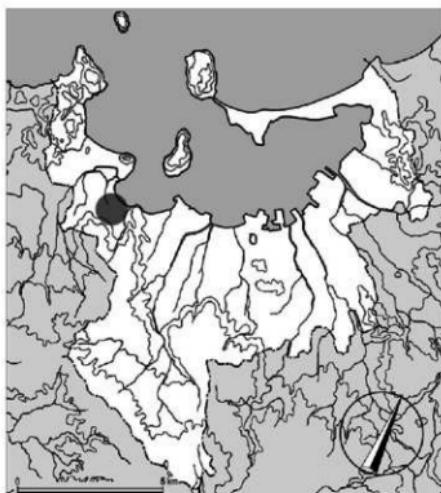


# 今宿五郎江 5

2006

福岡市教育委員会

いま じゅく ご ろう え  
今宿五郎江 5



調査番号 0254  
遺跡略号 IMJ-8  
調査番号 0255  
遺跡略号 IMJ-9 / TAN-1

2006

福岡市教育委員会





1 今宿五郎江遺跡遠景（第9次調査、東から）



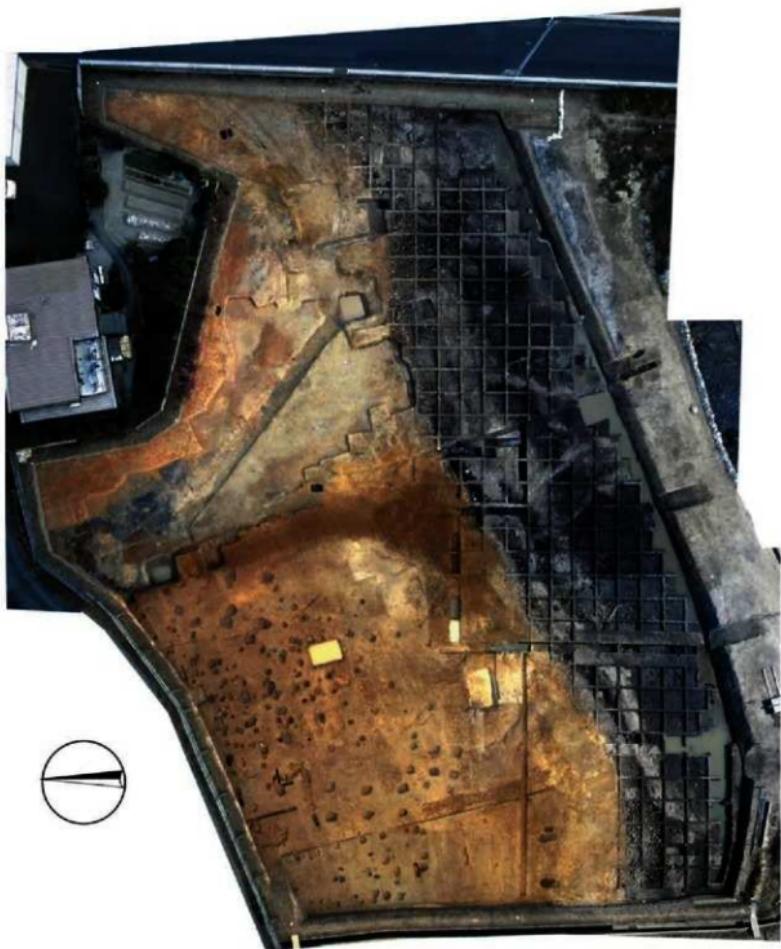
2 今宿五郎江遺跡第9次地点1区（東から）





3 今宿五郎江遺跡調査区（2002年度～2004年度地点、南から）





4 今宿五郎江遺跡第8次地点3区(谷4遺物出土状況、西から)





5 今宿五郎江遺跡第9次地点3区(東半部、海427、西から)



5 谷遺跡第1次地点(北から)



## 序

福岡市の西部に位置する今宿平野は、中国の史書にその名を残す糸島平野の東を占め、歴史的にみても重要な位置にある地域です。しかしま、大規模な土地区画整理事業の進行により、大きく変貌しようとしています。

福岡市では工事等により、現状保存のできなくなった埋蔵文化財については、記録による保存を図ることとし、調査を行っております。本書は、この目的で伊都土地区画整理事業地内の埋蔵文化財について実施した、発掘調査報告書第1冊です。

ここに至るまで、関係各位の多大なご理解とご協力があったことをここに記し、心からのお礼を申し上げます。

本書が、今宿平野の歴史について理解を深めるための資料として資するところがあれば幸いです。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 植木 とみ子

## はじめに

- 1 本書は、2002（平成13）年度から2003（平成14）年度にわたり、福岡市西区今宿町地内伊都土地区画整理事業地で福岡市教育委員会がおこなった、埋蔵文化財発掘調査の報告であり、同地内埋蔵文化財調査報告第1冊である。
- 2 報告する調査は、調査番号0254今宿五郎江遺跡第8次調査、調査番号0255今宿五郎江遺跡第9次調査および谷遺跡第1次調査である。調査番号0255のうち、前者は、分割して報告するうちの1である。後者は、前者と同一地点での調査であるものの文化財分布図（埋蔵文化財包蔵地）との整合性から、あえて別遺跡として分別したものであり、本書で一括報告する。
- 3 発掘調査は、文化財保護法57条の3（改正前）に基づく通知を受け、埋蔵文化財保存についての協議を行った結果、福岡市都市整備局伊都区画整理事務所の依頼により、記録保存を目的として、教育委員会埋蔵文化財課が実施したものである。現場作業は、関係各位のご理解とご協力のもと、円滑に遂行することができた。この場で深く感謝申し上げる。
- 4 発掘調査は、埋蔵文化財課 杉山富雄・阿部泰之が担当した。本書編集は担当者協議のうえ、杉山がおこない。執筆は両名でおこなった。遺物実測・掲載図作成は担当のほか、今井隆博がおこなった。
- 5 出土資料および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理し、利用に供する予定である。

## 凡 例

- 1 書名は、埋蔵文化財調査報告書としての利用を考え、遺跡名によることとし、簡略化を図るために『今宿五郎江』とした。前回報告に続けて第5冊とする。ただし、上記の事由により別遺跡名を冠した地点を併せて掲載することとなった。
- 2 位置の記録は、伊都土地区画整理事業にともない設置された基準点（日本測地系）を利用し、図中の位置は国土座標系で示すこととした。
- 3 図中に用いる方位は国土座標の座標北であり、真北から $0^{\circ}$  19分西偏している。
- 4 遺物実測図は、特に記さない限り縮尺4分の1で図示している。そのほかの縮尺の場合は、遺物番号に掛け、それを付記した。
- 5 報告中では、遺構・遺物に対し、調査中から整理の過程を通じて登録した通し番号で表記した。また、報告後、これを収蔵管理に際しての登録番号とする。このため、報告中の表記が煩雑となるが、調査から収蔵までの過程の情報を一貫して管理し、台帳・図・日誌等関係情報を極力参照、検証できるようなかたちで残してゆきたいとの意図からである。また、番号の種別を明示する必要のあるときは、遺構については区分の記号M、遺物については記号Rを付している。

調査番号	0254		遺跡略号	IMJ-8
調査地地番	福岡市西区今宿町 地内		分布地図番号	112(今宿)
工事面積	130ha	調査対象面積	297m <sup>2</sup>	
調査実施面積	297m <sup>2</sup>	調査期間	2002年12月22日～2003年1月8日	
調査番号	0255			
調査地地番	福岡市西区今宿町 地内			遺跡略号
				IMJ-8
				TAN-1
				分布地図番号 112(今宿)
工事面積	130ha	調査対象面積	5,080m <sup>2</sup>	
調査実施面積	3,520m <sup>2</sup>	調査期間	2002年12月22日～2003年3月31日	
	1,560m <sup>2</sup>		2002年12月22日～2004年3月31日	

## 本文目次

I 伊都地区画整理事業地内における埋蔵文化財調査	
－2002～2004年度調査の概要－	
1. 調査に至る経緯	1
2. 今宿五郎江遺跡・谷遺跡の立地と既往の調査	3
(1) 今宿五郎江遺跡・谷遺跡の立地	3
(2) 今宿平野の遺跡	3
(3) 既往の調査	5
3. 2002年度調査の概要	6
(1) 今宿五郎江遺跡第8次調査	6
(2) 今宿五郎江遺跡第9次調査（1区）・谷遺跡第1次調査	6
4. 2003年度調査の概要	8
今宿五郎江遺跡第9次調査3区	8
5. 2004年度調査の概要	10
今宿五郎江遺跡第10次調査	10
II 今宿五郎江遺跡第8次調査報告	
1. 調査の経過	15
2. 発掘調査の概要	15
調査地点の立地	15
土層と調査面	15
3. 調査出土の遺構と遺物	16
遺構1（図23・24・26・28）	16
4. 小結	17
III 今宿五郎江遺跡第9次調査報告(1)	
1. 調査の経過	19
2. 調査の概要	19
第9次地点の立地	
第9次地点の土層と調査面（図29）	
調査遺構	21
3. 今宿五郎江遺跡第9次調査出土の遺構と遺物	21
(1) 堆穴住居	21
堆穴住居24（図30・34）	21
堆穴住居240（図31・33・35）	22
(2) 挖建柱建物	23
挖建柱建物215（図36・38）	23
挖建柱建物262（図39）	24
挖建柱建物401（図42・43）	25
挖建柱建物412（図44・46）	26
挖建柱建物567（図47・48）	26
挖建柱建物568（図50・51）	28
挖建柱建物569（図52・54）	29
挖建柱建物570（図55・57）	30
挖建柱建物580（図58・60）	31
挖建柱建物710（図61）	32
挖建柱建物711（図63）	32
挖建柱建物712（図65）	33
挖建柱建物713（図67）	34
挖建柱建物714（図68）	34
挖建柱建物715（図70）	35
挖建柱建物716（図71）	36

掘建柱建物717(図72) .....	36	掘建柱建物721(図78) .....	38
掘建柱建物719(図74) .....	37	掘建柱建物722(図79) .....	38
掘建柱建物720(図76) .....	37	掘建柱建物723(図81) .....	39
(3) 土壌 .....			42
土壌421(図83・85・86) .....	42	土壌464(図93・94) .....	46
土壌422(図87・88・90) .....	45	土壌496(図95・96) .....	46
土壌462(図91) .....	45	土壌505(図97・98) .....	47
(4) 溝 .....			48
溝6(図100・101) .....	48	溝89(図100) .....	51
溝9(付図1) .....	49	溝516(図109) .....	52
溝10(図104・105・106) .....	50		
(5) その他の遺構 .....			52
遺構493(図110・111) .....	52	調査区内出土遺物(図113) .....	53
4. 小結 .....			54

#### IV. 谷遺跡第1次調査報告

1. 調査の経過 .....			59
2. 調査の概要 .....			59
(1) 土層 .....			59
(2) 出土遺構 .....			60
3. 調査出土の遺構と遺物 .....			61
(1) 溝 .....			61
溝164(図118) .....	61		
(2) 土壌 .....			62
土壌175(図123) .....	62	土壌193(図124) .....	67
土壌179(図123) .....	63	土壌196(図124) .....	69
土壌181(図123) .....	63	土壌197(図124) .....	69
土壌182(図123) .....	63	土壌200(図125) .....	70
土壌187(図124) .....	64	土壌201(図125) .....	70
土壌192(図124) .....	67	土壌207(図125) .....	70
(3) 小穴(ピット) .....			71
小穴208(付図2) .....	71		
(4) 旧河川および杭列 .....			71
旧河川162(図117) .....	71	杭列214(図127) .....	71
(5) 遺物包含層 .....			72
包含層158(図129) .....	72		
(6) その他の遺物(図133・134) .....			73
4. 小結 .....			74

## 図目次

図1 今宿五郎江遺跡遠景 (第9次調査、東から) .....	図版1	図33 爐248(1/20) .....	22
図2 今宿五郎江遺跡第9次地点1区 (東から) .....	図版1	図34 堪穴住居24(北から) .....	22
図3 今宿五郎江遺跡調査区 (2002年度～2004年度地点、南から) .....	図版2	図35 堪穴住居240(北から) .....	22
図4 今宿五郎江遺跡第9次地点3区 (谷4遺物出土状況、西から) .....	図版3	図36 掘建柱建物215(1/60) .....	23
図5 今宿五郎江遺跡第9次地点3区 (東半部、溝427、西から) .....	図版4	図37 掘建柱建物215出土遺物(1/4) .....	23
図6 谷遺跡第1次地点(北から) .....	図版4	図38 掘建柱建物215(北から) .....	23
図7 今宿平野遺跡分布(1/25,000) .....	2	図39 掘建柱建物262(1/60) .....	24
図8 今宿五郎江遺跡及び周辺調査区 (1/2,000) .....	4	図40 掘建柱建物262出土遺物(1/4・1/2) .....	24
図9 今宿五郎江遺跡第9次地点1区谷4・ 溝427の調査(東から) .....	6	図41 掘建柱建物401出土遺物(1/4) .....	24
図10 今宿五郎江9次地点3区遺構分布 (1/400) .....	7	図42 掘建柱建物401(1/60) .....	25
図11 土壌601・602(北から) .....	9	図43 掘建柱建物401(西から) .....	25
図12 溝427遺物出土状況(東から) .....	9	図44 掘建柱建物412(1/60) .....	26
図13 溝427(東半部、西から) .....	9	図45 掘建柱建物412出土遺物(1/4) .....	26
図14 今宿五郎江10次地点 (北半部、南から) .....	10	図46 掘建柱建物412(西から) .....	26
図15 5b層の調査(北から) .....	10	図47 掘建柱建物567(1/60) .....	27
図16 今宿五郎江遺跡第10次地点(南から) .....	11	図48 掘建柱建物567(西から) .....	27
図17 土壤46(北から) .....	12	図49 掘建柱建物568(1/60) .....	28
図18 溝427断面(南から) .....	12	図50 掘建柱建物568(西から) .....	28
図19 溝424遺物出土状況(16層 北から) .....	12	図51 掘建柱建物569(1/60) .....	29
図20 溝427遺物出土状況 (16層・土壤1061、北から) .....	13	図52 掘建柱建物569出土遺物(1/4) .....	29
図21 溝427遺物出土状況(22層 北から) .....	13	図53 掘建柱建物569(西から) .....	30
図22 今宿五郎江10次地点遺構分布図(1/500) .....	14	図54 掘建柱建物570(1/60) .....	30
図23 遺構1断面(1/100) .....	15	図55 掘建柱建物570出土遺物(1/4) .....	30
図24 今宿五郎江遺跡第8次調査区(1/200) .....	16	図56 掘建柱建物570(西から) .....	31
図25 遺構1出土遺物(1/3) .....	17	図57 掘建柱建物580(1/60) .....	31
図26 遺構1(南から) .....	17	図58 掘建柱建物580出土遺物(1/4) .....	31
図27 今宿五郎江遺跡第8次調査区全景 (西から) .....	18	図59 掘建柱建物580(西から) .....	32
図28 遺構1(北から) .....	18	図60 掘建柱建物710(1/60) .....	32
図29 第9次地点1区西壁土層 (1/100・1/40) .....	20	図61 掘建柱建物710出土遺物(1/4) .....	32
図30 堪穴住居24(1/60) .....	21	図62 掘建柱建物710出土遺物(1/4) .....	32
図31 堪穴住居240(1/60) .....	21	図63 掘建柱建物711(1/60) .....	33
図32 堪穴住居・炉出土遺物(1/4) .....	22	図64 掘建柱建物711出土遺物(1/4) .....	33
		図65 掘建柱建物712(1/60) .....	33
		図66 掘建柱建物712出土遺物(1/4) .....	34
		図67 掘建柱建物713(1/60) .....	34
		図68 掘建柱建物714(1/60) .....	34
		図69 掘建柱建物714出土遺物(1/4) .....	34
		図70 掘建柱建物715(1/60) .....	35
		図71 掘建柱建物716(1/60) .....	35
		図72 掘建柱建物717(1/60) .....	36
		図73 掘建柱建物717出土遺物(1/4) .....	36
		図74 掘建柱建物719(1/60) .....	36
		図75 掘建柱建物719出土遺物(1/4) .....	36
		図76 掘建柱建物720(1/60) .....	37
		図77 掘建柱建物720出土遺物(1/4) .....	37
		図78 掘建柱建物721(1/60) .....	38
		図79 掘建柱建物722(1/60) .....	38

図80 挖建柱建物722出土遺物(1/4) .....	39	図120 SD164・216出土遺物実測図(1/4) .....	64
図81 挖建柱建物723(1/60) .....	39	図121 SD164出土銅鏡・貨泉寒測図(1/1) .....	64
図82 挖建柱建物723出土遺物(1/4) .....	39	図122 SD164・216出土石錠実測図(1/4) .....	64
図83 土壇421(1/30) .....	42	図123 谷遺跡第1次調査検出土壇実測図① (1/40) .....	65
図84 土壇421出土遺物(1/4) .....	42	図124 谷遺跡第1次調査検出土壇実測図② (1/40) .....	66
図85 土壇421土層断面(1/30) .....	43	図125 谷遺跡第1次調査検出土壇実測図③ (1/40) .....	67
図86 土壇421(東から) .....	43	図126 谷遺跡第1次調査検出土壇 出土遺物実測図(1/4) .....	68
図87 土壇422(西から) .....	43	図127 杭列214実測図(1/40) .....	69
図88 土壇422(1/40) .....	43	図128 河川162出土縄文土器実測図(1/4) .....	70
図89 土壇422出土遺物(1/4) .....	44	図129 包含層158土層断面実測図(1/40) .....	71
図90 土壇422(西から) .....	45	図130 包含層158出土遺物実測図(1/4) .....	72
図91 土壇422(1/40) .....	45	図131 包含層158出土玉類実測図(1/1) .....	72
図92 土壇462出土遺物(1/4) .....	45	図132 谷遺跡1次調査出土石錠実測図 (1/1) .....	73
図93 土壇464(1/40) .....	46	図133 その他の遺物実測図①(1/4) .....	74
図94 土壇464(北から) .....	46	図134 その他の遺物実測図②(1/4) .....	74
図95 土壇496(1/40) .....	46	図135 埋もれ木出土状態 .....	77
図96 土壇496(北から) .....	47	図136 溝164貸泉出土状況 .....	77
図97 土壇505(北から) .....	47	図137 溝164土層断面 .....	77
図98 土壇505(1/40) .....	47	図138 土壇175 .....	78
図99 土壇505出土遺物(1/4) .....	47	図139 土壇179 .....	78
図100 溝6(1/100) .....	48	図140 土壇181 .....	78
図101 溝6(北から) .....	48	図141 土壇182土層断面 .....	79
図102 溝6出土遺物(1/4・1/2) .....	49	図142 土壇182 .....	79
図103 溝9出土遺物(1/4) .....	49	図143 土壇187 .....	79
図104 溝10(南から) .....	49	図144 土壇193土層断面 .....	80
図105 溝10(1/80) .....	50	図145 土壇193 .....	80
図106 溝10(北から) .....	50	図146 土壇200 .....	80
図107 溝10出土遺物(1/4) .....	51	図147 土壇201 .....	81
図108 溝89出土遺物(1/4) .....	51	図148 土壇207土層断面 .....	81
図109 溝516(1/100) .....	52	図149 土壇207 .....	81
図110 遺構493(北から) .....	52	図150 小穴208 .....	82
図111 遺構493(1/20) .....	53	図151 杭列214 .....	82
図112 遺構493出土遺物(1/4) .....	53	図152 包含層158 .....	82
図113 調査区内出土遺物(1/4・1/1) .....	53		
図114 挖建柱建物の方向 .....	54		
図115 谷遺跡1次調査区南壁 土層断面実測図(1/100) .....	59		
図116 セクションベルト250土層断面実測図 (1/60) .....	60		
図117 トレンチ251土層断面実測図(1/40) .....	61	付図1 今宿五郎江遺跡第9次調査区(1/200)	
図118 SD164実測図(1/100) .....	62	付図2 谷遺跡第1次調査区(1/200)	
図119 SD216実測図(1/40) .....	63	付図3 今宿五郎江遺跡第9次地点柱穴群(1/100)	

## 表目次

表1 挖建柱建物出土遺物構成(1) .....	40	表5 報告遺物観察表(3) .....	57
表2 挖建柱建物出土遺物構成(2) .....	41	表6 報告遺物観察表(4) .....	58
表3 報告遺物観察表(1) .....	55	表7 報告遺物観察表(5) .....	75
表4 報告遺物観察表(2) .....	56	表8 報告遺物観察表(6) .....	76

# I 伊都土地区画整理事業地内における埋蔵文化財調査 -2002~2004年度調査の概要-

## 1. 調査に至る経緯

今回報告する3地点の調査はいずれも伊都土地区画整理事業に先立つものである。そこで、本事業地内の埋蔵文化財の確認調査の経緯から述べることとする。

**伊都土地区画整理事業** 伊都土地区画整理事業は福岡市西部、今宿平野の東半部を対象に計画された区画整理事業である。施工面積は約130haである<sup>①</sup>。その範囲は、かつての潟湖と想像される今宿砂丘後背地を中心とし、高祖山麓の台地を含む範囲に及んでいる。今宿平野には指定史跡を含む多様な埋蔵文化財が分布し、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。

**概要試掘調査** 1996(平成8)年11月、都市整備局伊都区画整理事務所から、区画整理事業地内の埋蔵文化財について確認調査の依頼があった。教育委員会埋蔵文化財課では、事業地全体について、確認のための試掘が必要と判断し、区画整理事務所と協議を重ね、まず、可能な地点について試掘調査を実施することとなった。試掘調査は1996年12月から平成9年2月の間で68地点について実施した。調査は機力による試掘溝を掘削する方法を行った。

試掘調査の結果、事業計画地内の埋蔵文化財について概要を把握することができた。大まかにいえば、筑肥線の南北に沿う砂丘後背地部分では埋蔵文化財分布の可能性を認めず、計画地南縁部である山麓の丘陵部について埋蔵文化財の分布があるというものであった。これは、現況の周知の埋蔵文化財の範囲<sup>②</sup>とその周辺を覆う区域となっていた。

**確認調査** 広大な事業地を対象とした試掘調査では、個別の事業地點について埋蔵文化財の詳細な範囲、内容などを群らかにすることはできなかった。そこで、工事工程との調整をおこないながら、必要範囲について詳細な試掘(確認調査)を行ない、埋蔵文化財の内容を確認したうえで本発掘調査に着手するという手順をとることとなった。今回報告に係る確認調査は平成2002年度に2地点、2003年度に1地点を実施した。

**2002(平成14)年度の確認調査** 当面の最優先の区域として、今宿五郎江遺跡(埋蔵文化財包蔵地626)の北西部について実施した。調査は機力により試掘溝を掘削する方法を行った。調査範囲は今宿五郎江遺跡の立地する台地部から西の低地に及び、計14個所の試掘溝を掘削した。結果、低地部は後背湿地の堆積で埋積しており、埋蔵文化財は台地部にのみ分布することを確認した。今宿五郎江遺跡第8次調査(調査番号0254)として本発掘調査を2002(平成14)年度実施した。

次いで、同じく今宿五郎江遺跡の南辺部にあたる区域について確認調査を実施した。試掘溝は土地が狭長な形状であったことからそれに沿い2個所を設定し、機力により掘削した。結果、対象地中央の一部を除く範囲に埋蔵文化財が分布することを確認した。調査番号0255として本発掘調査を実施した。調査以前は、ごく一部が谷遺跡(埋蔵文化財包蔵地627)に該当し、調査区の大半は周知の埋蔵文化財包蔵地の近接地という位置関係であった。報告に際して調査成果に基づき、調査1区とした調査区を今宿五郎江遺跡とし、2区とした区域を谷遺跡と区分した(註102)。今宿五郎江遺跡は第9次調査、谷遺跡は第1次調査となる。

**2003(平成15)年度の確認調査** 前年度調査地点の隣接地を対象範囲とすることとなり、2003年4月11日から機力により試掘溝を掘削した。対象地は今宿五郎江遺跡の南縁部に接する位置にあり、緩い



図7 今宿平野遺跡分布 (1/25,000)

- 1 今宿五郎江遺跡 2 谷遺跡 3 周船寺遺跡群 4 山崎遺跡 5 週町遺跡 6 丸岡山遺跡群 7 丸岡山古墳 8 板氏引地遺跡 9 板氏遺跡群 10 板氏古墳群A群 11 安塚古墳 12 板氏古墳群B群 13 板氏B14号墳 14 板氏古墳群C群 15 板氏古墳群D群 16 板氏古墳群E群 17 板氏古墳群F群 18 板氏古墳群G群 19 鶴丘古墳群I群 20 板氏古墳群J群 21 千里里澤谷B遺跡 23 鶴永A遺跡 24 鶴永B遺跡 25 鶴永古墳群A群 26 鶴永古墳群C群 27 鶴永古墳群D群 28 鶴永古墳群G群 29 鶴永古墳群H群 30 女原上ノ谷製鉄跡 31 山ノ鼻1号墳 32 山ノ鼻2号墳 33 若八幡宮古墳 34 下谷古墳 35 女原遺跡 36 女原笠置遺跡 37 女原古墳群A群 38 女原古墳群B群 39 女原古墳群C群 40 女原古墳群D群 41 女原古墳群E群 42 今宿古墳群II群 43 今山遺跡 44 今前遺跡群 45 今宿田尻遺跡 46 大坂遺跡 47 大冢古墳 48 新開古墳群B群 49 新開古墳群C群 50 新開古墳群D群 51 新開古墳群E群 52 新開古墳群F群 53 新開遺跡 54 新開製鉄遺跡 55 谷上古墳群A群 56 谷上古墳群B群 57 谷上B1号墳 58 谷上古墳群C群 59 青木遺跡 60 相原古墳群A群 61 相原古墳群B群 62 相原古墳群C群 63 相原古墳群D群 64 相原古墳群E群 65 相原古墳群F群 66 相原古墳群G群 67 相原古墳群H群 68 相原古墳群I群 69 相原製鉄A遺跡 70 和原古墳群B遺跡 71 和原製鉄C遺跡 72 本村遺跡 73 本村古墳群A群 74 梶山製鐵遺跡 75 梶山古墳群B群 76 梶山古墳群C群 77 榛ノ内遺跡 78 青木遺跡群 79 鶴崎古墳 80 鶴崎製鉄B遺跡 81 鶴崎古墳群A群 82 鶴崎古墳群B群 83 鶴崎古墳群C群 84 鶴崎遺跡 85 シエウガ谷製鉄跡 86 油坂古墳群A群 87 油坂古墳群B群 88 長重山古墳群

南斜面と観察されたので、その傾斜に沿う方向を主として試掘溝9条を設定した。調査の結果、対象地の南半部は谷部で遺構遺物の分布がごく散漫になることから対象外とした。この結果を受けて引き続き本発掘調査に着手した。調査は2003年度、調査番号0255（今宿五郎江遺跡第9次調査）3区とし、継続調査とした。

**2004（平成16）年度の確認調査** 区画整理事業地東端の区域を対象地とすることとなり、機力による確認調査を行った。対象地は今宿五郎江遺跡の東縁部に接する位置にあり、東に傾斜する地形が主となると観察されたので、その傾斜に沿う方向を主として試掘溝7条を設定した。調査の結果、対象地の西半部を主として埋蔵文化財が分布することを確認したので、西半部について本発掘調査を2004年度、今宿五郎江遺跡第10次調査（調査番号0420）として実施した。さらに引き続いて2005年度、前年度調査により、谷部杭列の確認調査の必要が生じたため、対象地南端部について谷遺跡第2次調査（調査番号0512）として追加、実施した。

## 2. 今宿五郎江遺跡・谷遺跡の立地と既往の調査

伊都土地区画整理事業地内埋蔵文化財について、前節で述べたような経緯をたどり、平成14年度から本発掘調査を継続して実施している。本書に掲載した2002年度から2004年度までの調査は今宿五郎江遺跡と（調査上は区分が難しいが）谷遺跡を含むことから以下、両遺跡の立地と既往の調査について記述する。

### （1）今宿五郎江遺跡・谷遺跡の立地

両遺跡は、高祖山麓から今宿平野を今津湾に向かって伸びる丘陵の末端部にある。今津湾沿岸には、博多湾奥に通有の砂丘が発達する。山麓部との間には砂丘により海が閉じ込められて形成された潟湖の痕跡と思われる後背地が広がっている。この地形は、江戸時代まで耕作不能の湿地として残っていた。今宿五郎江遺跡はその低地に突出するように形成された砂礫台地上に立地している。地形面としては低位段丘として分類されている<sup>⑨</sup>。砂丘後背地へ突出する台地は複数条認められるが、今宿五郎江遺跡の立地する台地が最も深く突出している。谷遺跡は山麓側の台地を中心とした立地、今宿五郎江遺跡はそれとはやや離れた今津湾側の独立した台地上にある。両者の間には、現状では埋没している浅い谷がある。

今宿五郎江遺跡の旧地形面を最もよく残している地点の最高所で現況標高7.5mで、遺跡東西の谷部からの比高は2mほどある。谷遺跡の調査地点での標高は7.6mである。

### （2）今宿平野の遺跡

遺跡の位置する今宿平野東部について、周辺の弥生時代の遺跡を中心にして概観してみる。  
**弥生時代以前** 遺跡として調査・報告された例はないが、調査中の伴出遺物として報告された資料には先土器時代・縄文時代の遺物が散見される。今宿五郎江遺跡においても1次調査及び9次調査において先土器時代遺物が出土している。また、縄文時代の遺物は、谷部の堆積中から散漫に出土している。土器類では後晩期のものとされる資料であるが、石器についてはより古い時期のものかと思われる資料がある。

**弥生時代** 博多湾に面した今宿砂丘上の今宿遺跡群（44）では、5次にわたる調査が行われている。



図8 今宿五郎江庭跡及び周辺調査区 (1/2,000)

住居遺構は未検出だが、前期から後期にわたる土器が出土し、継続して集落が営まれていたことがわかる。甕棺墓、土壙墓からなる墳墓群も全域に広がっていたものと考えられる<sup>16</sup>。遺跡は砂丘東端まで広がり、前期から中期の甕棺、土壙墓からなる墓地を確認した<sup>17</sup>。砂丘の北西端に連なる今山遺跡(43)では、前期末から中期にかけて、陸繫島の山頂部に産出する玄武岩を利用して石斧を生産し、北部九州一円に供給している<sup>18</sup>。

山麓部と砂丘後背湿地の間は台地となり、弥生時代集落が立地する。発掘調査例は限られており、近年の調査は特に今宿五郎江遺跡に集中している。調査では中期～後期の集落が散見される。青木遺跡(78)では、弥生時代中期～後期の集落が確認され、中期初頭の貯蔵穴、中期中頃の竪穴住居、後期の溝、甕棺墓、井戸を確認している<sup>19</sup>。西方の大塚遺跡(47)では、弥生時代終末期の竪穴住居を確認している<sup>20</sup>。平野東辺部の動崎遺跡(84)では、谷に沿った狭い丘陵側の微高地でも中期の竪穴住居が確認され<sup>21</sup>、平野内には中期以降、広い範囲に集落が営まれていたことが予想される。

**古墳時代** 丘陵末端部、台地上に大形の前方後円墳が前期から後期にかけて継続して造営される一方、山麓部には後期の群集墳が濃密に分布する。しかし、集落の調査例は多くない。遺跡から西の台地を隔てた谷奥部で後期の集落を調査しているが未報告である(大塚5次地点)。さらに西の谷に位置する徳永A遺跡(24)では谷間の平坦地で竪穴住居、掘建柱建物で構成された集落が調査されている<sup>22</sup>。

### (3) 既往の調査

谷遺跡については今回調査が第1次調査である。

今宿五郎江遺跡については7次にわたる調査が実施された。

**今宿五郎江遺跡第1次調査** 今宿小学校校舎建築に伴い、1984年度調査を行った。台地上に立地する。261m<sup>2</sup>の調査区で弥生時代から古墳時代・平安時代・中世の遺構を調査した。弥生時代の遺構は台地上に掘削された溝であり、幅3m、深さ1.3mほどが遺存していた。溝中に大量の弥生土器が投棄されており、その時期は中期後葉に始まり後期前葉から中葉に及ぶものであった<sup>23</sup>。

**今宿五郎江遺跡第2次調査** 道路築造に伴い、1985年度調査を行った。遺跡の西側を南北に縦断する位置にある。6,000m<sup>2</sup>の調査区で弥生時代及び中世の遺構を調査した。弥生時代の遺構では、多数の掘建柱建物、溝のほかに井戸などを調査した。大溝・流路中から大量の土器、木器が出土した(中期後葉から後期前葉)。小形銅鐸が出土した<sup>24</sup>。

**今宿五郎江遺跡第3次調査** 給油所建設に伴い、1987年度調査を行った。893m<sup>2</sup>の調査区で、弥生時代・古墳時代の遺構を調査した。弥生時代の遺構には竪穴、掘建柱建物、溝がある。溝は幅4mで、後期土器が大量に出土した(未報告)。

**今宿五郎江遺跡第4次調査** 送電線仮鉄塔建設に伴い、1992年度、調査を行った。遺跡西側の谷にかかる地点である。81m<sup>2</sup>の調査区で、弥生時代遺構と包含層を調査した。包含層からは大量の弥生土器が出土した(中期後葉・後期前半)<sup>25</sup>。

**今宿五郎江遺跡第5次調査** 今宿小学校プール改築に伴い、2000年12月から2001年1月にかけて調査を行った。遺跡中央部台地の西端に立地する。150m<sup>2</sup>の調査区で、弥生時代の溝を調査した。大溝は幅3m、深さ0.9mほどが遺存した。溝中から大量の土器が出土した(後期前半)<sup>26</sup>。

**今宿五郎江遺跡第6・7次調査**隣接した地点で、共同住宅建築に伴い調査した。両地点2002年度の調査である。遺跡北半部で台地の尾根線上に立地する。771m<sup>2</sup>の調査区で、多数の柱穴のほか土壙を調査したが、ほとんどは中世の遺構であり、弥生時代の遺構は確認できなかった<sup>27</sup>。

### 3. 2002年度調査の概要

#### (1) 今宿五郎江遺跡第8次調査（調査番号0254）

伊都土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査の第1地点である。今宿五郎江遺跡の西縁部に位置する。2002年12月19日表土鋤取り。2003年1月8日現場撤収。台地上、台地縁部にまばらな遺構の分布があった。調査面積297m<sup>2</sup>。本書で報告する。

#### (2) 今宿五郎江遺跡第9次調査（1区）・谷遺跡第1次調査（調査番号0255-1・2区）

今宿五郎江遺跡と谷遺跡とを結ぶような細長い調査区となった。確認調査の結果、対象地の中央部で確認した谷部中央に遺物の分布しない部分があり、本調査対象から外した。それを境に北側の調査区を1区、南側の調査区を2区とした。調査は一体のものとして進めたが、報告時点では埋蔵文化財包蔵地範囲として分離する必要が生じた。そこで、調査の1区を今宿五郎江遺跡第9次地点1区として報告し、同2区を谷遺跡第1次地点として報告する。このような位置関係から谷遺跡についても本書に掲載することとした。今回調査において今宿五郎江遺跡・谷遺跡はそれぞれ南方、北方に広がることがわかり、隣接する関係となった。両者の間に截然とした区分があるわけではなく、両地点間の谷部(谷4)の南岸は谷遺跡、北岸は今宿五郎江遺跡という関係にある。従って呼称の違いは位置関係を明示するための便宜的なものである。

発掘調査は2002年12月26日着手し、次年度3区の確認調査、本発掘調査に継続した。

1区（今宿五郎江遺跡9次地点1区）台地部と谷部とで遺構遺物が出土した。台地部では堅穴住居1棟、掘建柱建物4棟、溝2条を調査した。調査面積は566m<sup>2</sup>ほどである。台地部遺構・遺物について、第III章で詳述する。

谷部を谷4として記録した。上部層には、遺物の投棄により生成したとみられる包含層が形成される。後期弥生土器で構成されている。上部でガラス小玉、貨泉の出土があり、下部では木器の出土があった（4-2層）。鍬、杵のほかに橋が出土した。これより下位では、谷部の掘り下げが半ば以上進行した段階で土壤229、溝427を検出した。いずれも断面の観察により確認したもので、平面での形状は詳細を知ることができなかった。溝427は調査区西から東へ向かい、次年度の3区で検出、調査することができた。

2区（谷遺跡1次地点）調査は上記1区と併行した。調査面積1,560m<sup>2</sup>。丘陵末端の台地から谷部に向かう緩斜面と調査区東半では南から北へ向かう谷部を含む。谷は調査区東端に東岸がごくわずか現れている。谷4の南岸を検出した。西半部で緩斜面上に包含層、土壤、溝を検出した。個別に第IV章で詳述する。



図9 今宿五郎江遺跡第9次地点1区谷4・溝427の調査（東から）

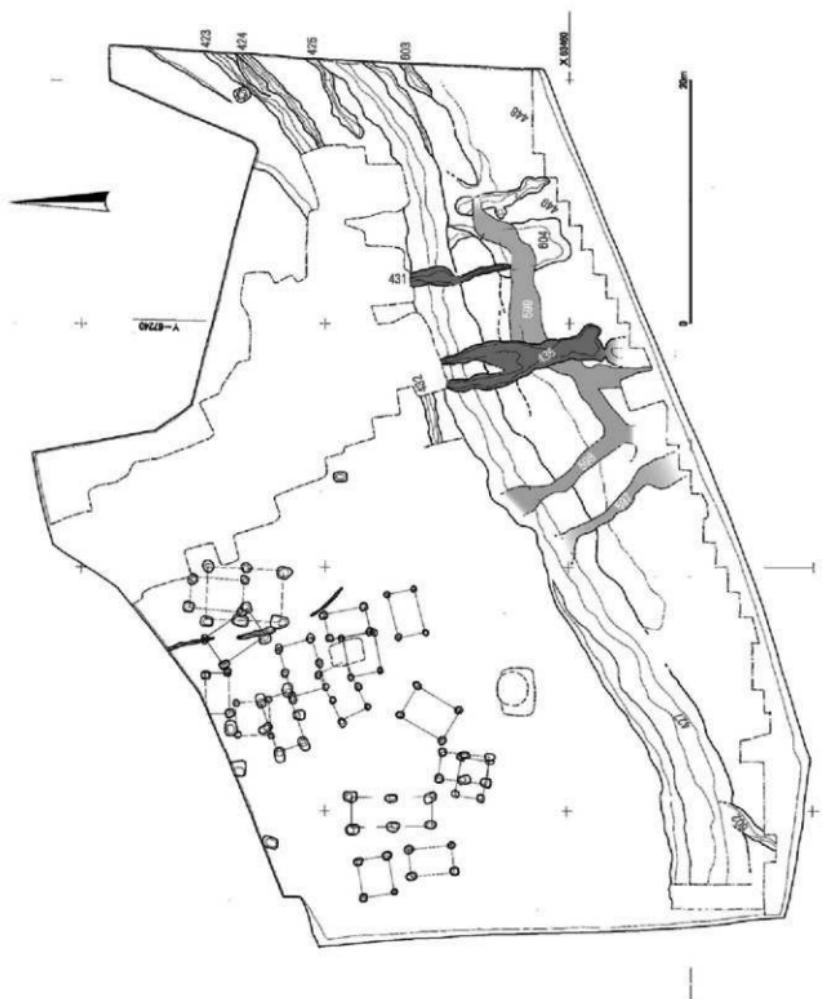


圖10 今宿五郎江9次地点3区建構分布 (1/400)

#### 4. 2003年度調査の概要

##### 今宿五郎江遺跡第9次調査3区（調査番号0255）

前年度の調査隣接地を調査対象とすることとなり、前節に述べたような確認調査を実施した。その成果を検討し、調査範囲を決定、直ちに本発掘調査に移行した。調査は2004年3月31日完了した。3区の調査面積は2,960m<sup>2</sup>となった。

確認調査の成果によると、対象地の北半部は遺跡中央の台地が緩く谷に落ちてゆく地形で、南半部はその谷堆積と一部その南岸とみられる地山の高まりが認められた。谷部の遺物分布は北岸付近では密集するが谷の中央部に向かっては急速に疎らとなる。この位置を調査区の南限としてそれ以北を調査区として設定した。

遺構は1区と同様、台地部と谷部とに分かれる。更に中間の位置で独立して土壤を検出した。台地部の遺構は1区から続くもので、柱穴・小穴が大半を占める。掘建柱建物18棟を復元できる。また、土壤、溝を検出した。台地部の遺構と遺物について、第III章で詳述する。台地部の遺構は遺物を取り上げるなどで番号を付したもので288基、そのうち231基は柱穴または小穴である。遺物量は1区、2区を併せて収納コンテナ1100箱余りである。このうち、谷部の包含層、遺構出土の遺物が大半を占め、木器なども含めた分量で900箱を超える分量を占めている。このため、谷部の遺構と遺物については次回の報告とし、ここでは、概要を報告するに留める。

**谷部の調査** 3区では1区・2区の款に確認していた谷が大きく広がり検出面では黒色の粘土層の広がりとして見ることができた。調査はそれの岸部から遺物分布のみられる範囲について行った。

調査に際して包含層の分布、堆積層の分布の検討のため、2m区画にセクションベルトを随時設定しながら観察を行い、南北方向の土層については極力記録を残すようにした。以下、谷部の主要な遺構について概要を記す。

##### 谷4（図103・106）

調査の南半部を占める。1区の西から続き、調査区東の広い谷へ抜けている。谷自体は人為的なものではないが、岸部を中心に土器の投棄などの行為が重層的に行われている。遺物包含層は大きく2層あり、間欠的に形成されたものようである。上位層（谷4-1層）では、土器は、細片化し磨滅の著しい後期弥生土器が大半を占める。その中に、格子目叩き痕を残す平瓦、越州窯系青磁、須恵器、黒色土器が小量ながら含まれており、平安時代以降に形成されたものと考えられる。後述する流路を挟んで下位層（谷4-2層）では大量の後期弥生土器の外に木器、ガラス小玉等の出土があった。土器の出土量は多いが、細片化したものが多く、復原の可能な遺物は東西の限られた区域に集中している。

**谷4-1層下の遺構** 流路435、杭列、溝423・424・425・432、土壤600・601がある。流路435は正確には遺構ではなく、自然に生成した、おそらく雨裂のようなものではないかと観察された。台地部から谷へ下る流れである。遺物に黒色土器、須恵器が混じる。大量の樹枝が集積した部分がある。樹枝は切断されたものが顕著であった。

**杭列**は岸から離れた位置で検出した、列をなす部分があるが、続かない。杭は細く、木質は芯が残っているのであるいはより上位から打ち込まれたものかもしれない。

**溝423・424・425・432** 谷4-1層は同2層より台地側に広く分布するが、その下位に相当するとみられる。台地の縁に沿うような位置で併行して走っている。

**土壤600・601**は近接しており、調査区東半部の岸近くに位置する。古墳時代前期の土器を出土した。

**谷4-2層下の遺構** 流路597・598・599、溝427、凹地604がある。

**流路597・598・599** 上位の流路435と同様、台地部から流れ下ったような位置にある。598は岸部に沿ったような位置にある。いずれも粗砂の堆積として検出したものである。後期弥生土器が出土した。別に調査区南辺の東半部から北東方向に流れる堆積層があり、流路448・449として記録した。谷4-2層との関係が不明瞭である。この部分2層の分布が不明瞭となるのはこれらにより流失したためであろうか。大半が後期弥生土器であるが、古墳時代前期の土師器を小量含む。梯子などの木器もこれに含まれるものであろう。

**溝427** 1区から台地縁部に沿って掘削されおり、本調査区を抜け、10次調査区から北方に続く。調査区西端部では谷4の堆積層である泥炭質の粘土層を掘削しており、検出に手間取った。東半部では台地部の張出を開墾している。断面は逆台形状で西側では広く開いた、東側では急に立ちあがるような形状となっている。これはおもに掘削した地盤の性質によるものか。幅は西端部で6.2m、東端部で2.5mを測る。深さは西端部で0.9~1.0mほどである。底面は東西端で変わらず、標高4.5mの位置にあり、むしろ中央部の底面が高い。延長は本調査区内で80mほどである。埋積土の上部では粗砂層、下部では泥炭質の粘土層が主となる。遺物は後期弥生土器が大量に出土したほか、鍔鋸類・容器・斧柄などの木器が出土した。また、樹枝などに混じって明らかに人为的に割り取られたとみられる割材が大量に出土した。これらは特定の部位に纏まるということではなく全体から満遍なく出土しているようにみえる。調査区東半部では、溝427掘削に伴ない掘りあげ土を盛り上げたものとみられる粘土層が溝に沿って土手状に堆積している。この層中に埋置されたようにして土器が出土した。

**凹地604** 溝427の南に位置する。泥炭質の砂層、粘土層で埋まる。不整な隅円長方形形状を呈し、長さ6m、幅4m、深さ0.3mを測る。覆土中から後期弥生土器が出土したほか、底面近くで木器



図11 土器601・602(北から)



図12 溝427遺物出土状況(東から)



図13 溝427(東半島、西から)

が出土した。容器、柄などがある。

## 5. 2004年度調査の概要

### 今宿五郎江遺跡第10次調査（調査番号0420）

前年度同様、年度当初に対象地について確認調査を行ない、その成果に基づいて調査範囲を決定し直ちに本発掘調査に移行した。対象地は、前年度地点の東にあたり、今宿五郎江遺跡の東側に位置する谷部である。この地点西側の変電所付近が今宿五郎江遺跡の旧地形が最もよく保存されている部分で、谷部との比高が2mほどある。

確認調査の成果を受けて、台地縁部から谷堆積中に広がる包含層の分布範囲をもって調査範囲を設定した。対象地は広く平らな谷底となっていたり、確認調査時も水田の遺存に留意したが、谷の下部堆積層である泥炭質の粘土層、粗砂層が浅い位置にあり、田面ほかの遺存は認められなかった。杭が複数個所で検出されたが、遺存状況、加工などから現水田の耕作に係わるものである可能性を考えられたので調査対象に含めず、本発掘調査区のなかで検討することとした。以上から2004年度は約3,000m<sup>2</sup>を調査対象範囲に設定した。ただ本調査の結果、一部、調査区を拡張・新設して次年度調査することとなった。調査区の一部を2個所拡張したうえで、1区を新設した（谷2次地点）。

発掘調査で検出した遺構は土壙15基、溝3条、堰2基、杭列などが主要なものである。以下、本調査の概要を記す。なお、遺構番号は調査時の番号を整理し、第9次調査からの通し番号とした。調査開始面は包含層（5b層）である。これの上下面で遺構を検出した。谷部ではさらに谷堆積中に遺構面がある。

**5b層（図110）** 10次調査区の遺構検出面には台地縁から谷部にかけて帶状の遺物包含層が分布する。これを5b層とした。調査区南端部では洗い出しにより礫層の疊と遺物が洗い出しにより密集して出土した。遺物の大半は後期弥生土器である。そのなかに越州窯系青磁、綠釉陶器、瓦、須恵器、黒色土器が混じって出土する。5b層の上下に遺構検出面がある。



図14 今宿五郎江第10次調査地点（北半部、南から）



図15 5b層の調査（北から）



図16 今宿五郎江道跡第10次地点（南から）

### 5 b 層上の遺構

**土壌20~22** 近接して分布する。いずれも円形の土壌で径は1m以下で深い逆台形状の断面形を呈す。糸切底の土師器が出土した。

### 5 b 層下の遺構

直下と考えられる遺構には土壌46、台地から流下する雨裂状の流路24・26・34がある。

**土壌46** (図111) 平面形は円形状で礫を投棄している。覆土中から綠釉陶器、黒色土器が出土した。

**流路24・26・34** 台地から流下する雨裂状の流れである。粗砂で埋まる。黒色土器、須恵器が出土した。

### 溝427 (図109・114~117)

第9次地点から続き、本調査区で北へ向きを変えてさらに北方に続く溝である。調査区内で蛇行している。断面形は逆台形状で、幅は2.3~2.8m、深さは0.9~1.3mが遺存する。底面は調査区南端部で標高4.3m、北端部では標高3.9mの位置にある。

溝の堆積は大きく3分することができる。上部は黒褐色粘土層(16層)、以下明褐色粗砂層(18層)、黒褐色泥炭質粘土層(22層)である。北半部では部分的に16層上に台地側から粒状・塊状の地山土層が流入し、溝を完全に覆っている(25層)。16層下面、25層下面からは投棄されたような状態で土器が出土する(図115・116)。18層からも大量の土器が出土するが、下部ではさらに木器を含む木質遺物が大量に出土した。また、銅鏡、貨泉といった遺物も出土している。木質遺物は下位の22層からも大量に出土している(図117)。出土の様態は第9次地点と同様、流木に混じって多数の割材が検出される。本地点ではその傾向が顕著である。溝の掘削土は、第9次地点と同様、谷側に盛土されている。本地点ではその後の流れによる削剥でごくわずか残るのみである。

### 溝中の遺構

溝427の埋没の過程で土壌が掘削されている。

**土壌1039** 最上部から掘削されているものと考



図17 土壌46(北から)



図18 溝427断面(南から)



図19 溝427出土状況(北から)

えられる。覆土が16層と同様の粘土である。古墳時代前期の土器が出土した。

**土壙1061・1062・1011・1014（図116）** 18層堆積後16層堆積以前に溝427の東岸から溝中の位置に掘削されている。隅円の方形・長方形形状を呈し、底面は平らである。壁面は直立するが、板等を当てた痕跡などは確認できなかった。遺物の出土量は少ない。特徴的なことは、底部近くにドングリの層が残っていることである。溝427をはずしてこの種の遺構は検出できなかった。

溝底の遺構 溝底の2箇所から堰を検出した。

**堰1053** 溝を横断する方向に矢板を打ち込んだものである。底部近くにわずかに遺存した。

**堰1070** 堰1053と同様矢板を打ち込んでいる。2層に打ち込まれて18層下部までが、遺存する。この部分で溝427は底部の幅を狭めており、堰設置との関連を考えられよう。また、底面も掘形上に盛土したのではないかとみえる塊状の地山土を含んだ層が分布する。堰の位置と溝の深さとを考えると水流を塞き止めて溝の外へ流す目的であったとは考え難い。

**溝1017（図109・113）** 溝427より台地内部によった位置に掘削された溝である。断続して2箇所で検出した。断面形は弧状を成し、深さ0.3mほどが遺存する。弥生土器が出土した。

#### 谷堆積層中の遺構

谷部の堆積中からも遺構を検出した。各堆積層（11～13層）は遺物包含層となっており、後期弥生土器から終末期までの遺物を主として含む。

**遺構78～81** 11層で検出した土器の一括投棄である。それぞれの群をなして密集する。一部は下位層にめり込んだ様な出土状況があった。

**土壙65** 12層中検出の土壙である。不整な円形で、木器や樹幹が流れ込んだような状態で出土した。

**土壙85** 12層下検出。円形の土壙で、壺を埋置している。



図20 溝427遺物出土状況（16層・土壙1061、北から）



図21 溝427遺物出土状況（22層北から）

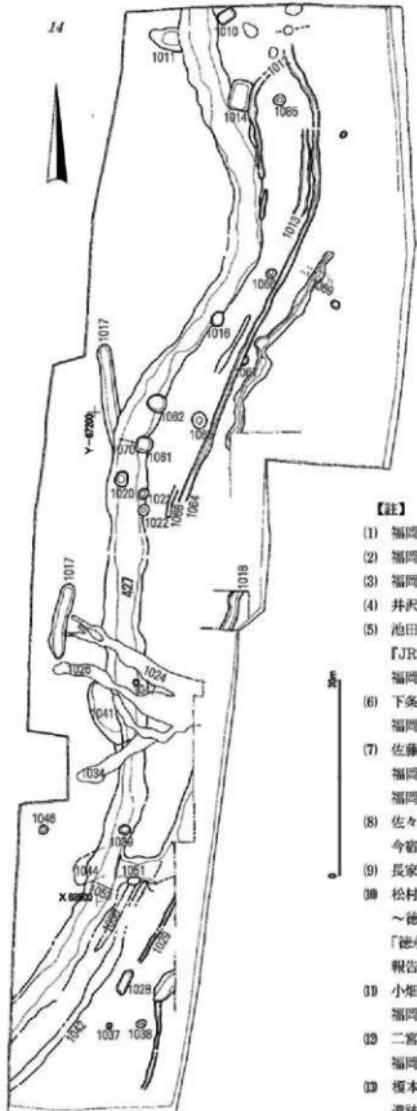


図22 今宿五郎江第10次地点遺跡分布 (1/500)

【註】

- (1) 福岡市都市整備局伊都区画整理事務所 2002.4 「伊都」10号
- (2) 福岡市教育委員会 1995 「福岡市文化財分布図(第2版)」
- (3) 福岡市土木局 1989 「福岡市土地分類地部調査報告書」
- (4) 井沢洋一/編 1994 「今宿遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第388集 池田祐司・久住猛雄/編 2000 「JR筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書」
- (5) 下条信行/編 1967 「今山遺跡II」
- (6) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集
- (7) 佐藤一郎/編 1987 「青木遺跡」
- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集・小林義彦/編 1993 「青木遺跡2」
- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第350集
- (8) 佐々木道彦/編 1984 「今宿 高田遺跡」
- 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第10集(福岡開発委員会)
- (9) 長家伸/編 1994 「勘定遺跡I」福岡市埋蔵文化財調査報告書第388集
- (10) 松村道博/編 「国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書II ~徳永遺跡~」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第306集・星山洋 1998 「徳永A遺跡第4次調査」 「国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書VI」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第583集
- (11) 小畠弘己/編 1986 「今宿五郎江遺跡I」
- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集
- (12) 二宮忠司/編 1981 「福岡市 今宿五郎江遺跡II」
- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集
- (13) 複本義重・星山洋/編 1981 「今宿五郎江遺跡III・徳永A遺跡III・丸根山遺跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第479集
- (14) 星野恵美/編 2003 「今宿五郎江遺跡IV」
- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第737集
- (15) 久住猛雄 2003 「0124・0158 今宿五郎江第6・7次調査」福岡市埋蔵文化財年報「第16集 平成13(2001)年度版」

## II 今宿五郎江遺跡第8次調査報告

### 1. 調査の経過

事前審査担当により試掘調査、伊都区画整理事務所と協議を経て、埋蔵文化財課調査第1係を担当として本発掘調査を実施することとなった。周辺で進行していた工事との調整を終えた後、平成14年12月19日機力により表土剥ぎを行った。遺構の広がりが試掘調査による推定範囲をこえる可能性も含めて作業を進めたが、推定範囲で分布が納まり、試掘成果に沿う調査範囲となった。調査面積は297m<sup>2</sup>である。

調査進行に際して、工程の一部が別現場と重複したことから、人力による遺構検出・発掘は年末にかかり、調査を完了し、現場から機材を撤収したのは2003年1月8日となった。

### 2. 発掘調査の概要

#### 調査地点の立地

調査地の現況は畠地となっている。西及び北側の水田面から1mの比高を保つて高い位置にある平坦地で、標高は3.7mである。調査時の地形は西と北側は段差をもって水田面に接しており、東に向かって緩く起伏をもつて微高地となっていた。戦後間もない時期の空中写真をみると、今津湾方向にこの一段高い平坦面が突出している。さらに本地点から北東方向、今宿小学校の北方方向に不整な形状の田畑が広がっており、周囲の整然と区画された水田と顕著な違いを示している。区画の整備された水田部はかつての潟湖であり、入り組んだ耕地は今宿五郎江遺跡が立地する段丘面の末端部である。今宿五郎江遺跡第8次地点は、潟湖に面した位置に立地し、段丘地形を明瞭に残して、段丘崖をもつて潟湖と画された地形上に立地する遺跡である。

#### 土層と調査面

表土として採取ったのは0.2mほどの厚さである。表土は全体に一様で、粘土質の暗褐色土、畠の耕作土である。表土直下が地山でありこれを調査面とした。調査面では、機械による掘削で生じた浅く広い窪みが散在し、調査区のかなりの面積を占めていた。このことから、本地点の現況は地下げの結果であり、旧状はさらに高い地形で

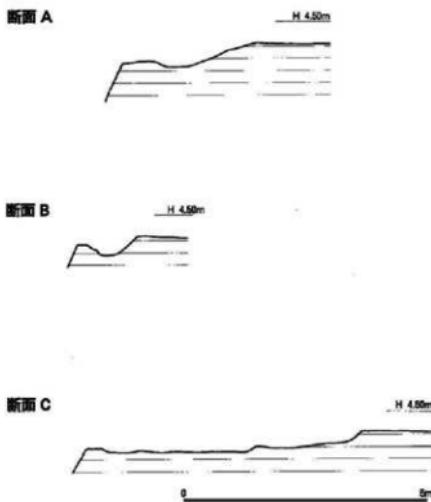


図23 遺構I断面(1/100)

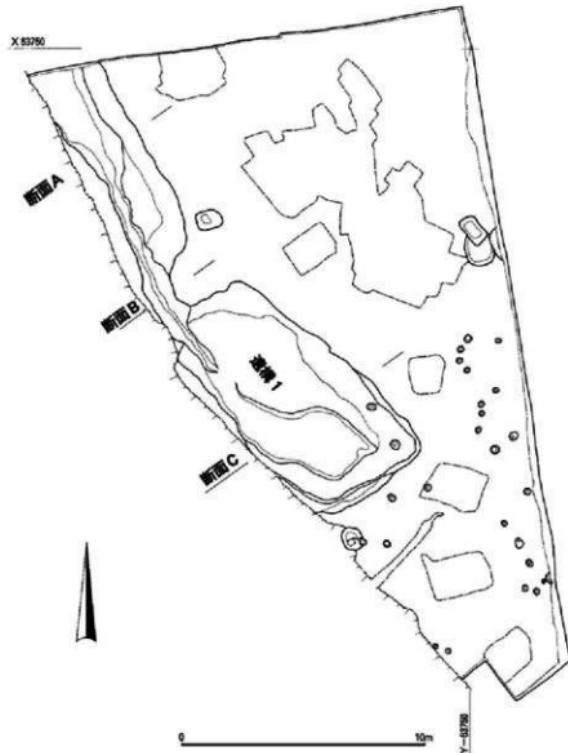


図24 今宮五郎江遺跡第8次調査区(1/200)

あったものとみえる。隣接する第2次調査地点では、柱穴を含む小形の遺構が多数検出されており、本地点の遺構密度は、この削平の結果である可能性がある。

### 3. 調査出土の遺構と遺物

前述した、理由によるものか、本地点で検出した遺構はごく小数である。調査区北半部は地下げに伴う攪乱が著しく、平坦面に小形の遺構はほとんど遺存しない。南半部を中心に土壌、小穴が散在する。台地西縁部では、崖線に沿って池状の掘り込みと溝状の遺構を検出した。

遺構のうち、5基を除いて遺物は出土しなかった。5基のうち、2基は近世以降に属し、残りは中世の遺物を出土した。それらも分量はごく少ない。また、遺物の器表は概して荒れが著しい。

#### 遺構1 (図23・24・26・28)

調査区の西に沿い、調査区中程から調査区北方に伸びる遺構である。その南端は不整な長方形で池

状の窪みとなっている。それから溝が台地縁部に沿って伸び、調査区外に向かって広がってゆくといった形状をもっている。造構の西側は台地崖面にかかるが立ち上がりが残り、たまたま水は西側の低地へは流出しないようになっている。南端の池状の部分で長さ11m、幅5.5m、深さは台地面から0.4mほどが造存している。ここから伸びる溝は南側で幅1m、調査区北壁部で幅3mほどとなり、この位置で西へ振れ、低地へと抜けているようである。底面は池状部の中央と、溝状部の北端との高度差はほとんど無い。ただ、両者を連接する部分の溝底面はごくわずかであるが高い。全体としては底面は水平に近いといえる。

覆土は一樣で、黒褐色粘質土である。

#### 出土遺物(図25)

遺物は覆土中から散漫に小量出土した。土器は細片化しており、土器器皿類、鍋・鉢類、陶磁器、石鍋が含まれている。

12は土器器皿である。底面は糸切り離し後に撫で調整をおこなったものか、平滑になっている。胎土はやや粒状性があり、器表はやや荒れて、やわらかい赤みの黄色(7.5YR 6.5/4)を呈す。11は土器器皿、内面が顯著に磨耗している。外底面には細目の刷毛目調整を施す。底径は復原して118mmとなる。7は土器器皿、内面の全体に

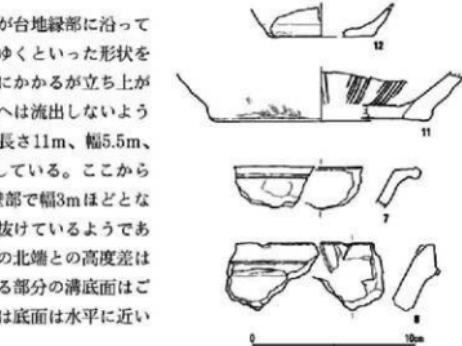


図25 造構1出土遺物(1/3)



図26 造構1(南から)

撫で調整が、外面に指頭圧痕が残る。やわらかい赤みの黄色(7.5YR 6.5/4)。8は石鍋口縁部細片であるが、鉢部、口縁端内面を新たに擦り削っており、何らかの素材となっていたものか。

## 4. 小結

今宿五郎江第8次地点は、遺跡の西を限る位置に立地している。削平により台地上の造構の大半は失われていると思われる。2次調査の成果からすると、かなりの数個建柱建物が分布していた可能性があるが、本地点では痕跡を残していない。現状では、崖線に沿って池状の掘り込みが残り、それが中世に遡るものであろう。そこでは、遺物の出土はごく小量で、生活に伴う投棄などの行為からは隔たっていたものとみえる。また、覆土の状態からも埋没も、その過程で環境に変化なく進行していくものであろう。



図27 今宿五郎江遺跡第8次調査区全景（西から）



図28 遺構1（北から）

### III 今宿五郎江遺跡第9次調査報告(1)

#### 1. 調査の経過

第1章で述べたように、今宿五郎江遺跡第9次調査の調査区は、2002(平成14)年度の調査0255として実施した発掘調査のうち、第1区及び、同調査で継続して翌2003(平成15)年度実施した第3区とからなっている。発掘調査は、第1区を第2区(谷遺跡群第1次調査として報告)とともに平成14年12月26日着手した。続いて、隣接地について2003(平成15)年度調査対象とすることになったので、対象地について2003年4月から試掘調査を実施した。試掘結果から、対象地の北半部を要調査範囲とし、これを調査0256の継続として同3区とした。試掘調査終了後、直ちに本発掘調査に移行した。3区の調査を完了したのは2004(平成16)年3月31日である。調査面積は第1区・3区をあわせて、5,080m<sup>2</sup>となった。出土遺物は遺物収納コンテナに換算して1,112箱ほどの分量となった。このうち961箱が弥生土器を主とする土器類で、残りが木器をはじめとする木製品である。ガラス製品、金属製品も含まれる。

今回報告にあたって、必要に応じてこの区画を踏襲して記述を進める。

#### 2. 調査の概要

##### 第9次地点の立地

本調査区は遺跡の立地する中位段丘でも南端、高祖山から伸びる丘陵にとりつく部分に位置している。調査前の田面の標高は1区で7.4m、3区で6.9mとなっていた。今回調査区でのあり方からすると、この段丘の南端には東から広い谷(m4とする)が切り込んでおり、段丘部が独立した台地として残されたような地形となっていたのではないかとおもわれる。ただ、本地点西側の状況は不明である。そこで2005(平成17)年度実施した試掘調査の結果からすると谷部はさらに南へ続き、上述したような地形であった可能性が高くなかった。

調査区はこの段丘部から谷部へ続く緩斜面と、それに接した谷の堆積部の一部を含む位置にある。この部分では、明確な段丘の高まりは残らず調査区北部分の平坦面から極緩い斜面が続き谷の堆積層下にもぐり込んでゆく。試掘成果などから見ると基盤層である段丘礫層は、そのやや傾斜を急にして谷底に至る。谷底は最深部では現況地盤(田面)から2.3mほどの深さがある。

段丘からの緩斜面は褐色の粘質土が広がり、みたところAso-4火砕流による堆積の遺存したものかとみえる。今回報告するのは、この段丘・緩斜面に位置する遺構と遺物である。

##### 第9次地点の土層と調査面(図29)

1区西壁土層を図示する。上述した段丘から谷へ向かう傾斜面に沿った土層である。上部は地表下0.3~0.4mまでで、現水田耕作土・客土(床上げ)・旧水田耕作土及び、床土層の生成がみられる(1~4層)。上部層は全体として厚さが一様である。中部層も谷部から台地部まで分布するが、谷部に厚く台地奥部に薄くなり、谷を最終的に埋積する堆積で、厚さは谷部で0.5m、台地部では0.2mである。下部は谷部のみに分布する。中部層の下面是台地部でも波状を呈し、地山層が巻き上がったような部分もある。水田耕作などにより地山粘土層が軟弱となり、流動化したためか。

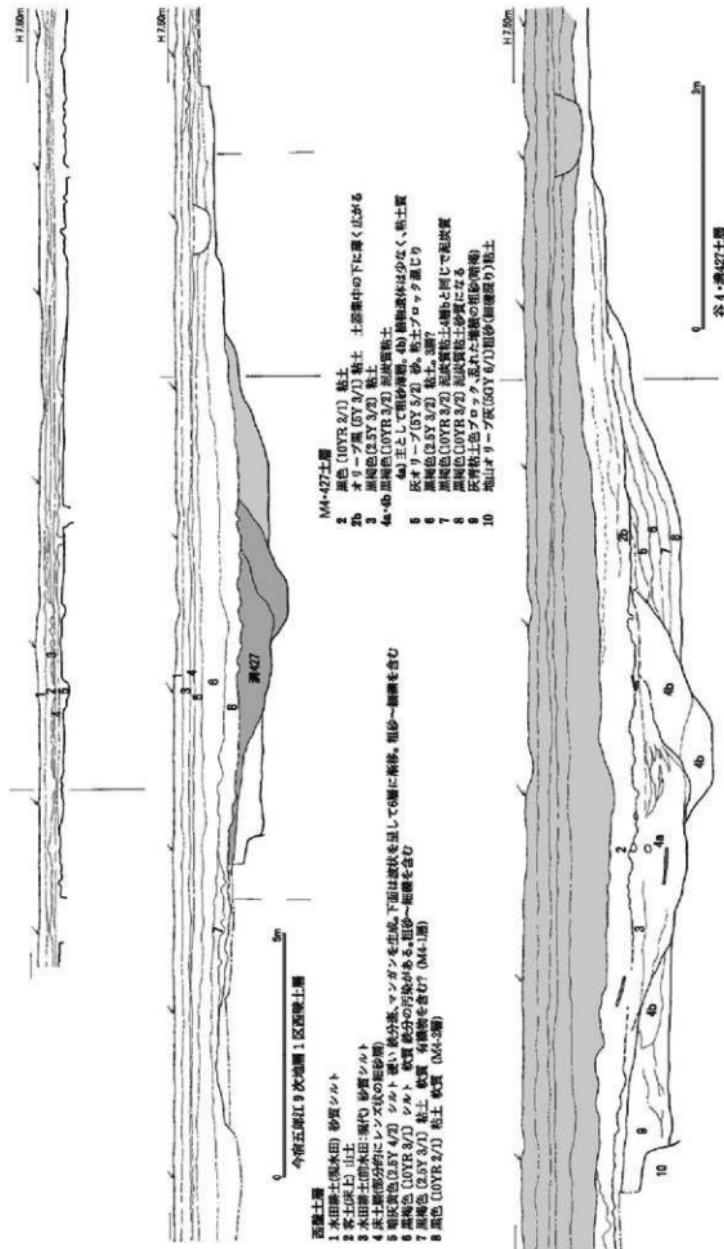


図29 第9次地点1区西壁土層 (1/100, 1/40)

台地部の調査面は中部層を鏟取った段丘面に設定した。この面は、部分的に変化しており、上述した褐色粘土層部分と段丘疊層と思われる砂疊層が露出した部分がある。3区の東半部の北部にはそれにはさまれる粘土層を採掘した大規模な攪乱が広がっている。調査面は1区の平坦部で標高6.8m、3区では6.5mの位置である。

#### 調査構造

台地部で検出した構造は大部分が柱穴、あるいは小穴である。土壤としたものがあるが、大型の柱穴の可能性を残している。

竪穴住居は1区で検出した。溝は南北方向に検出した。第9次調査で、遺物の出土、その他記録に際して登録した構造は426基である。

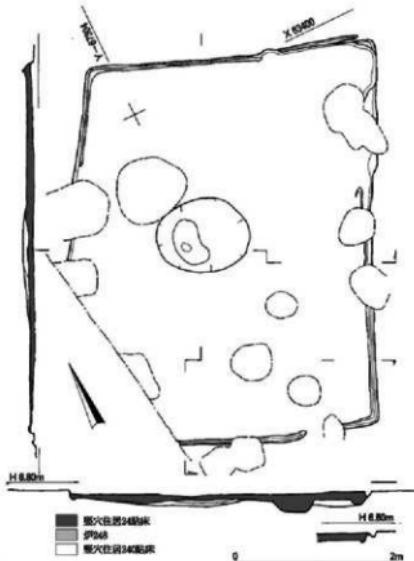


図30 竪穴住居24 (1/60)

### 3. 今宿五郎江遺跡第9次調査 出土の構造と遺物

今宿五郎江遺跡第9次調査地点の台地部の調査において出土した構造と遺物について、竪穴住居、掘立柱建物、土壙、溝その他に区分し、遺構番号順に報告する。

#### (1) 竪穴住居

竪穴住居は既往の調査では、検出されていない。重複する2基を1区で検出した。

##### 竪穴住居24(図30・34)

45-17区で検出した。長方形の竪穴住居である。壁溝の遺存により確認した。竪穴住居240を埋めて床を貼り、やや拡張したような関係にある。中央に地床炉がある。炉は灰層の分布として確認した。明確な掘形などは確認できなかった。

平面形はゆがんだ長方形で、長さ4.8m、幅3.7mを測る。西壁がわずか立ち上がりを残し、その部分で0.05mを測る。柱穴の可能性を考え検討したが、該当するものは確認できなかった。溝11が住居南壁をこえる位置まで伸びる。現場

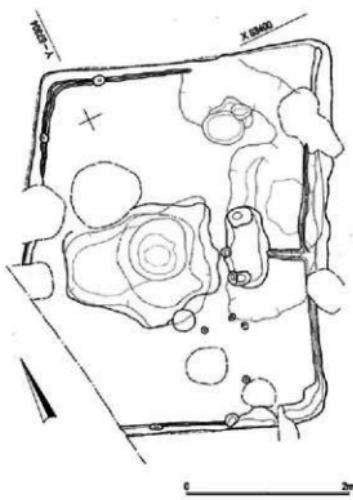


図31 竪穴住居240 (1/60)

での観察によると溝11が竪穴住居24と重複して新しい。  
出土遺物（図32、表3） 貼床から、コンテナ2/3程の分量出土した。大半は細片の弥生土器で、遺存状態に差のあるものが混じる。

5082は甕である。外面に右下がりのごく粗い刷毛目調整を施す。5083は甕底部である。底面がやや凸面となっている。被熱したものか、赤化している。

#### 竪穴住居240（図31・33・35）

竪穴住居24と重複してそれよりも古く、その下に埋め込まれた状態で遺存する。南壁が住居24より内側に位置する。床面では、東壁の中央部に近い位置で梢円形の浅い土壤を検出した。両端を一段掘

住居24

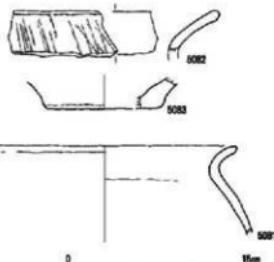


図32 竪穴住居24・炉248出土遺物（1/4）

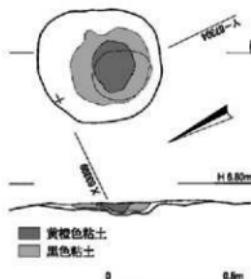


図33 炉248（1/20）

り窪める。壁溝から溝が伸びる。東壁側、中央西壁側には貼床を行って床面を均している。

竪穴住居24とほぼ同位置の床面に炉248が位置する。

炉248（図33） 平面形が梢円形の地床炉である。長さ1.1m、幅0.9mの規模で浅い皿状の掘形をもつ。掘形をこえて灰層が広がっている。灰層には木炭を顕著に含む。中央には焼土とみられる赤褐色粘土層が残る。

出土遺物（図32、表3） 小量が出土したのみである。そのなかで、炉248からも弥生土器を出土した。

5081は、炉248中から出土した。



図34 竪穴住居24（北から）



図35 竪穴住居240（北から）

他の破片と比べてやや大きな資料である。弥生土器壺である。器表は荒れており、調整は不詳である。

## (2) 掘建柱建物

1区、2区それぞれ調査区の北側に偏って分布する。調査現場において確認したもの9棟、整理時に図面の検討から復原したもの13棟の計22棟を報告する。このうち、6棟は柱の構成が $1 \times 2$ 間とするもの、ほかは $1 \times 1$ 間の構成である。以下、個別建物について報告する。

### 掘建柱建物215(図36・38)

1区35-07区に位置する。柱穴から $1 \times 2$ 間の構造を復原できる。平面形は南北方向に長軸をとる長方形状を呈す。建物軸は北から $25^{\circ}$ 西偏する。柱間隔は下記のようになる。なお、建物平面図上、長軸方向を上下に配置した上で、左側辺(桁行)の上位から順に、次いで右側辺、上辺、下辺(梁行)の順に列記する。計測点は、柱痕跡または

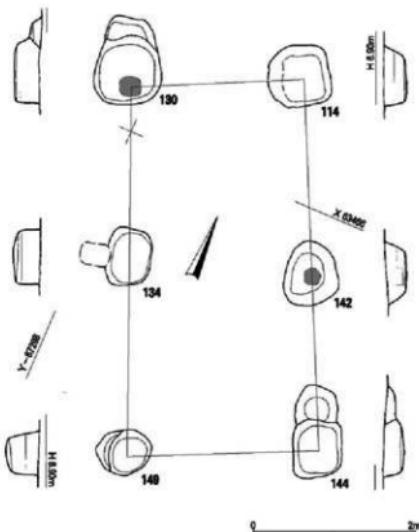


図36 掘建柱建物215(1/60)

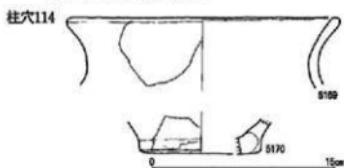


図37 掘建柱建物215出土遺物(1/4)

柱圧痕の残るものはそれの中心、そうでないものは柱穴の中心とした。計測値は図上での値である。

$$\text{柱穴130} \sim \text{柱穴134} = 2.10\text{m}$$

$$\text{柱穴134} \sim \text{柱穴149} = 2.45\text{m}$$

$$\text{柱穴114} \sim \text{柱穴142} = 2.38\text{m}$$

$$\text{柱穴142} \sim \text{柱穴144} = 2.17\text{m}$$

$$\text{柱穴130} \sim \text{柱穴114} = 2.14\text{m}$$

$$\text{柱穴149} \sim \text{柱穴144} = 2.32\text{m}$$

柱穴は圓角の方形状を呈する。柱穴130は2基の重複とみるが、底面に段差をもつ圓角長方形である可能性が残る。一辺 $0.7\text{m}$ 前後の規模である。柱穴130では柱圧痕とみる凹部を検出した。柱穴底面の高度は標高 $6.6\text{m}$ を前後し、

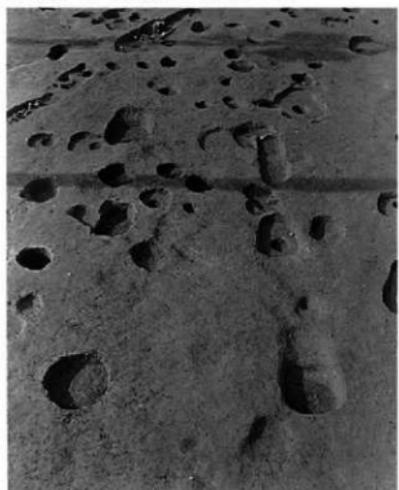


図38 掘建柱建物215(北から)

高低0.2mほどの幅がある。

**出土遺物** (図37、表1・3) 各柱穴からごく小量の遺物が出土した。大半は弥生土器である。細片で、器表の荒れが顕著である。柱穴覆土中から散漫に出土した。

図示する5169・5170はいずれも柱穴114から出土した。5169は弥生土器壺口縁部で外面に化粧掛けの痕跡が残る。5170は、弥生土器壺か。

#### 掘建柱建物262 (図39)

1区435-17区に位置する。柱穴から $1 \times 2$ 間の構造を復原できる。平面形は東西方向に長軸をとり、長方形形状というより平行四辺形形状を呈す。建物軸は北から $86^{\circ}$ 西偏する。柱間隔は下記のようになる。

$$\text{柱穴162} \sim \text{柱穴171} = 3.0\text{m}$$

$$\text{柱穴171} \sim \text{柱穴21} = 2.0\text{m}$$

$$\text{柱穴146} \sim \text{柱穴154} = 3.1\text{m}$$

$$\text{柱穴154} \sim \text{柱穴236} = 2.2\text{m}$$

$$\text{柱穴162} \sim \text{柱穴146} = 2.1\text{m}$$

$$\text{柱穴21} \sim \text{柱穴236} = 2.3\text{m}$$

柱穴は隅円の方形、長方形、不整な円形がある。柱穴146は長さ1.1m、柱穴21は1辺0.7mと規模が多様である。底面の高度も6.5~6.6mの位置にある。

柱間隔から見ると西の4基が纏まりをもっており、あるいは $1 \times 1$ 間の建物である可能性がある。底面に凹部をもち、その高さが5.3m付近にあることも共通する。ただ、短辺方向の傾きが一致することは、6基の柱穴でまとまる可能性も示唆している。

**出土遺物** (図40、表1・3) 各柱穴からごく小量の遺物が出土した。大半は弥生土器である。中期資料が目立つが、後期資料が含まれる。土器は細片で、器表の荒れが顕著である。柱穴覆土中から散漫に出土した。ほかに石製品、獸齒などが出た。柱穴236出土土器の一部は被熱したものか、赤化している。

図示する弥生土器壺5171は柱穴21からの出土である。5172は、石製紡錘車の未成品か、偏平な砂岩礫の周縁の一部を欠き取り、片面の中央には回転による穿孔を開始している。径は53mm、

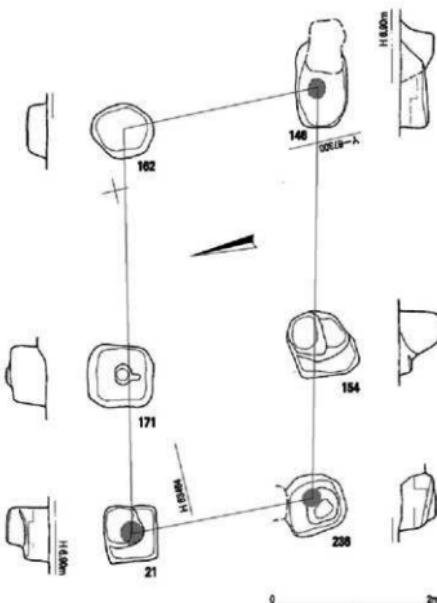


図39 掘建柱建物262 (1/60)

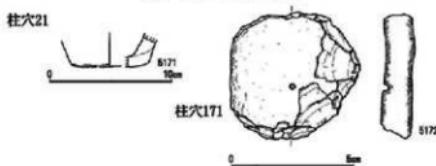


図40 掘建柱建物262出土遺物 (1/4・1/2)

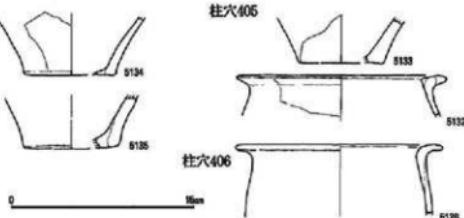


図41 掘建柱建物406出土遺物 (1/4)

厚さ13mm、重量39gである。穿孔部の径は2mm、深さ2mmほどの規模である。

#### 掘建柱建物401(図42・43)

3区35-88区に位置する。柱穴から $1 \times 2$ 間の構造を復原できる。平面形は南北方向に長軸をとる長方形状を呈す。建物軸は北から $2^{\circ}$ 西偏する。柱穴は隅円の長方形状である。それぞれ底面に段差があり、平面形に入り組んでいるようにみえるのは、複数柱穴の重複した結果か。ここでは、西側の柱筋が通っていることから上記の構成を考えた。柱穴の重複を前提とするのであれば、南北方向に2棟の $1 \times 1$ 間建物を復原することができる。柱間隔は下記のようになる。

$$\text{柱穴 } 402 \sim \text{柱穴 } 403 = 3.5\text{m}$$

$$\text{柱穴 } 403 \sim \text{柱穴 } 404 = 3.3\text{m}$$

$$\text{柱穴 } 407 \sim \text{柱穴 } 406 = 3.5\text{m}$$

$$\text{柱穴 } 406 \sim \text{柱穴 } 405 = 3.3\text{m}$$

$$\text{柱穴 } 402 \sim \text{柱穴 } 407 = 2.7\text{m}$$

$$\text{柱穴 } 404 \sim \text{柱穴 } 405 = 2.4\text{m}$$

柱穴は長さ0.9~1.1mの規模で、底面の高さは、形状が複雑なことから最深部の高さをみると、標高5.8mから6.1mまでの幅がある。埋土は掘り上げた地山粘土塊をそのまま埋め込んでいる(柱穴404・406)。

**出土遺物**(図41、表1・3) 各柱穴からごく小量の遺物が出土した。大半は弥生土器で、細片で、器表の荒れが顕著である。柱穴覆土中から散漫に出土した。時期を判別できた土器は中期のものであり、各柱穴から満遍なく出土している。柱穴403・405・406出土土器を図示する。

柱穴403出土の5134・5135は弥生土器甕である。

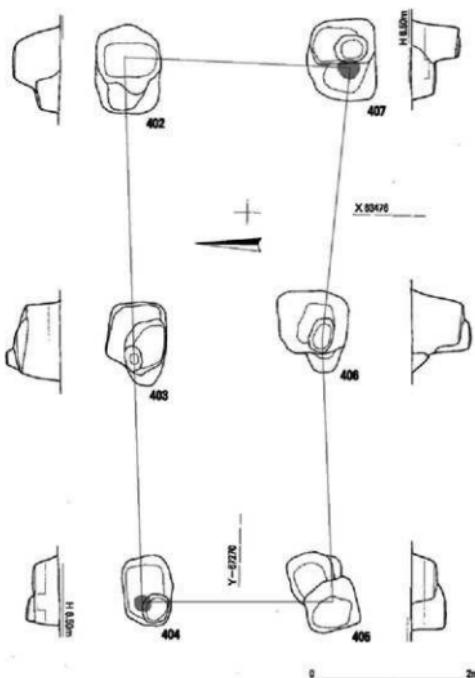


図42 新建柱建物401(1/60)



図43 離立柱建物401(西から)

柱穴405出土の5132・5133は甕底部、5132は甕口縁部である。

柱穴406出土 5136は甕口縁部である。

#### 掘建柱建物412(図44・46)

3区35-87区に位置する。柱穴から1×2間の構造を復原できる。平面形は南北方向に長軸をとる長方形形状を呈す。建物715と重複する。柱穴415での重複関係からすると、建物412が新しい。建物軸は北から7°西偏する。柱間隔は下記のようになる。

柱穴418～柱穴417 = 1.9m

柱穴417～柱穴416 = 2.2m

柱穴413～柱穴414 = 1.9m

柱穴414～柱穴415 = 2.2m

柱穴418～柱穴413 = 2.2m

柱穴416～柱穴415 = 2.1m

柱穴は平面で隅円の方形・長方形状である。長さは0.6～0.8mの規模である。柱穴底面は平坦でその高度は6.1～6.3mの幅がある。埋土は掘り上げた地山粘土塊をそのまま埋め込んでいる。柱穴417では、平面では確認できなかった柱痕跡を断面で確認することができた。

**出土遺物(図45、表1・3)** 柱穴415・416を除く各柱穴からごく小量の遺物が出土した。いずれも弥生土器細片で、一部を除き器表の荒れが顕著である。遺物は柱穴覆土中から散漫に出土した。時期を判別できた土器は、中期のものである。1750は壺である。

#### 掘建柱建物567(図47・48)

3区35-79区に位置する。柱穴から1×2間の構造を復原できる。平面形は南北方向に長軸をとる長方形形状を呈す。建物568、711と重複する。

柱穴532での重複関係からすると、建物568より古い。建物軸は北から4°東偏する。柱間隔は下記のようになる。

柱穴530～柱穴532 = 2.8m

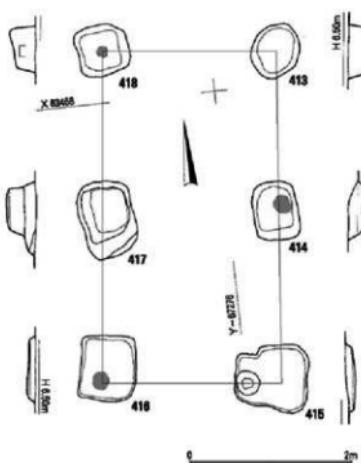


図44 掘建柱建物412 (1/60)



図45 掘建柱建物412出土遺物 (1/4)



図46 掘建柱建物412 (西から)

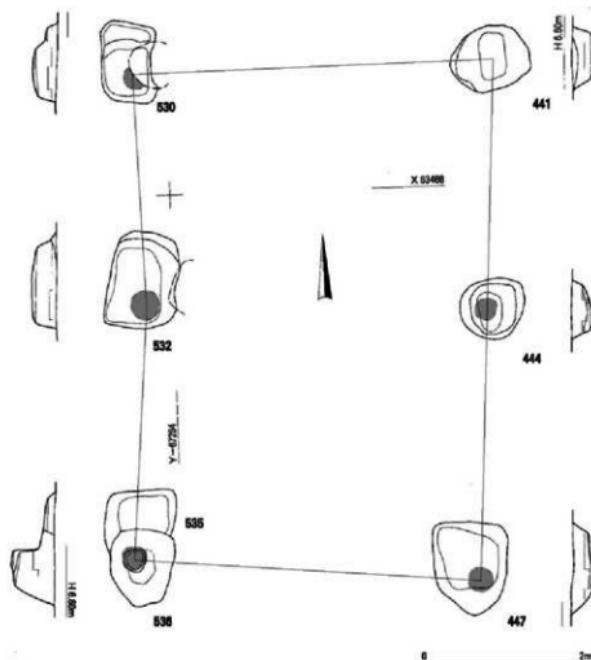


図47 柱礎柱建物567(1/60)

柱穴532～柱穴536 = 3.2m

柱穴441～柱穴444 = 3.1m

柱穴444～柱穴724 = 3.3m

柱穴430～柱穴441 = 4.4m

柱穴536～柱穴724 = 4.3m

柱間隔は絶じて大きい。特に梁行は4mをこえる。間柱の可能性を考えたが、現場では検出されなかった。柱穴が全体に浅く、かなりの削平を受けていると考えられ、現状では失われてしまった可能性がある。柱穴は平面で隅円の長方形状、不整な橢円形状を呈するが、全体として不整な形状である。円形状の柱穴で径0.8m、長方形状の



図48 柱礎柱建物567(西から)



図49 挿建柱建物567出土遺物(1/4)

柱穴では長さ1.2mに及ぶものがある。柱穴底面は平坦でその高度は6.2m前後に集中するが、柱穴536は深く、標高6.0mほどとなる。柱穴536では柱圧痕が検出された。柱穴441以外では平面で柱痕跡と思われる変化を検出したが、断面の観察で確認できたのは柱穴532・536である。柱穴はおそらく掘り上げた地山土塊でそのまま埋めるが、724では、表土と思われる黒褐色粘質土の割合が大きい。断面で柱痕跡を確認できたのは、柱穴532・536である。平面での観察とほぼ一致する。

出土遺物(図49、表1・3) 各柱穴からごく小量の遺物が出土した。弥生土器細片で、すべて器表の荒れが顕著である。遺物は柱穴覆土中から散漫に出土した。時期を判別できた土器は、中期・後期のものである。大半は体部細片で詳細は不詳である。

柱穴447 5138は壺頭部である。細片であるが、頭部基部の1条の突帯下は球状の体部となるようである。

柱穴530 5137は高環口縁部である。

端部近くで屈曲外反気味に立ち上がる。

柱穴728 5139は甕底部か、底部近くの器壁がごく厚い。

#### 挿建柱建物568(図50・51)

3区35-79区に位置する。柱穴から1×1間の構造を復原できる。平面形は南北方向に長軸をとる長方形を呈す。柱筋を柱穴中心に想定すると、台形に近いような形状となる。建物567・711と重複する。上述したように柱穴533が建物567の柱穴530と重複して新しい。

また、柱穴533は建物711の柱穴534

とも重複するが、両者の前後関係は不明確である。建物軸は北から3°東偏する。柱間隔は下記のようになる。

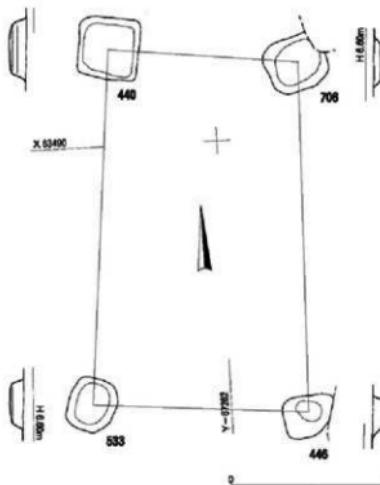


図50 挿建柱建物568(1/60)



図51 挿建柱建物568(西から)

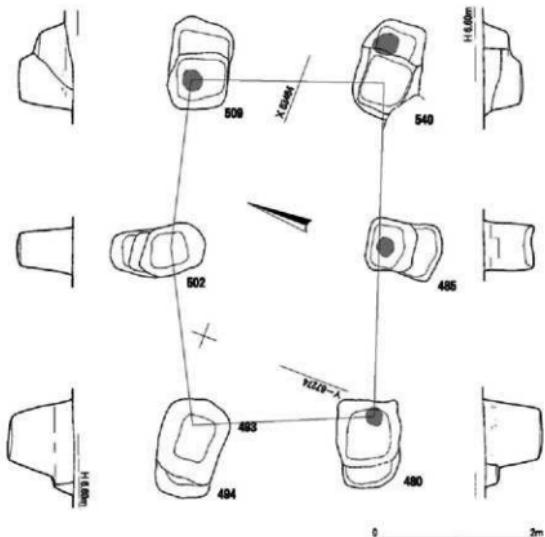


図52 掘建柱建物569 (1/90)

柱穴440～柱穴533 = 4.3m

柱穴706～柱穴446 = 4.3m

柱穴440～柱穴706 = 2.4m

柱穴533～柱穴446 = 2.7m

長軸方向の柱間隔は大きい。特に  
梁行は4mをこえる。間柱の可能性  
を考えたが、現場では検出されなかっ

た。柱穴は平面で隅円の方形状、不整な楕円形状を呈する。各柱穴は現状で0.1m強程の深さを残すのみであり、形状が不整な柱穴は削平の影響を受けているものかもしれない。柱穴の規模は長さ0.7～0.8mほど、柱穴底面は平坦で、標高6.3～6.2mの位置にある。

**出土遺物（表1）** 図示できる資料は無いが、709を除く各柱穴から小量出土した。黒縞石製の剥片を除いて、すべて弥生土器細片で、いずれも器表の荒れが顕著である。遺物は柱穴覆土中から散漫に出土した。体部細片で時期・調整など詳細は不詳である。

#### 掘建柱建物569（図52・54）

3区35-79区に位置する。柱穴から2×1間の構造を復原できる。平面形は東西方向に長軸をとる長方形形状を呈す。桁行の柱筋は中央の柱穴が、柱穴長軸を隅柱とは90°違えた上で、全体にやや外方に張り出すような配置となっている。南側の柱筋は柱穴中心をたどると直線となるが、北側のそれは、中央の柱穴自体が北へ寄っており、筋の通る柱の配置を復原することが難しい。建物軸は北から72°東偏する。復原する柱間隔は下記のようになる。

柱穴509～柱穴502 = 2.2m

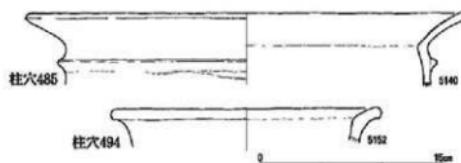


図53 掘建柱建物569出土遺物 (1/4)

柱穴502～柱穴494 = 2.2m

柱穴540～柱穴485 = 2.0m

柱穴485～柱穴480 = 2.1m

柱穴509～柱穴540 = 2.4m

柱穴494～柱穴480 = 2.2m

対面する柱行の長さの差が大きい。

柱穴は平面で隅円の長方形状を呈する。各柱穴の底面は2段となっており、それぞれ建物外方に浅い段をもつ。柱穴の長さは柱穴485が例外的に0.9mほどであるほかは1.1～1.2mの範囲に収まる。柱穴底面は平坦で、標高5.9mを中心に5.7～6.0mの範囲にある。柱穴494は遺構493と重複してそれより古い。

**出土遺物**（図53、表1・3） 遺物は各柱穴から出土した。特に大量と言うほどではないが、他建物の柱穴からの出土量と比べると格段に多い。遺物のほとんどは弥生土器であるが、柱穴480からは石鍤かと思われる破片資料が出土した。弥生土器は細片で、器表の荒れが著しい。中期・後期とみられる資料が含まれる。5140は柱穴485出土の甕である。5152は柱穴494出土の甕である。

#### 掘建柱建物570（図55・57）

3区55-79区に位置する。柱穴から2×1間の構造を復原できる。平面形は東西方向に長軸をとる長方形状を呈す。建物軸は北から73° 東偏する。復原する柱間隔は下記のようになる。

柱穴537～柱穴539 = 2.1m

柱穴539～柱穴486 = 1.9m

柱穴551～柱穴547 = 2.4m

柱穴547～柱穴545 = 1.8m

柱穴537～柱穴531 = 2.7m

柱穴486～柱穴545 = 2.8m



図54 挖建柱建物569(西から)

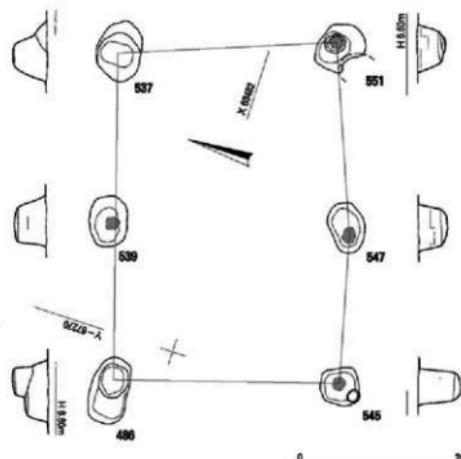


図55 挖建柱建物570(1/60)

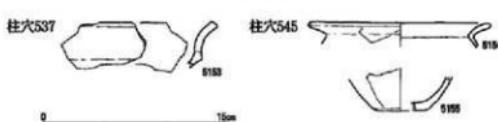


図56 挖建柱建物570出土遺物(1/4)

柱穴は平面で隅円の方形状または不整な橿円形を呈するものとがある。前者で1辺0.5m、後者で長さ0.6~0.8mほどの規模である。柱穴底面は柱穴545が標高5.9mの位置にあるほかは、6.1~6.2mにある。柱穴545・551柱穴底面には柱圧痕が残り、平面上で柱痕跡とよく一致する。

**出土遺物**（図56、表1~3） 遺物は各柱穴埋土から小量、散漫に出土した。遺物はすべて弥生土器である。ただし、細片であり、かつ器表の荒

れがいちじるしい。時期を判断できる資料では中期・後期の資料が含まれる。5154・5155は柱穴545から出土した。甕5154の口縁以下の外面には煤状の付着物が残る。壺底部5155は、体部から底部にかけて器厚が一様で、底面がやや凸面状を呈す。

#### 掘建柱建物580（図58・60）

3区35-78区、掘建柱建物群の南辺部に位置する。周囲に柱穴ではなく柱穴の構成は明瞭である。柱穴から1×1間の構造を復原できる。平面形は東西方向に長軸をとる四辺形で、一方の辺の柱穴がずれて、平行四辺形状となっている。建物軸は北から74° 東偏する。復原する柱間隔は下記のようになる。

$$\text{柱穴} 704 \sim \text{柱穴} 703 = 3.6\text{m}$$

$$\text{柱穴} 572 \sim \text{柱穴} 670 = 3.6\text{m}$$

$$\text{柱穴} 704 \sim \text{柱穴} 572 = 2.2\text{m}$$

$$\text{柱穴} 703 \sim \text{柱穴} 670 = 2.4\text{m}$$

柱穴は平面で円形状を呈し、径0.4~0.5mであり、本地点で復原した掘建柱建物の柱穴としては小規模である。柱穴底面は標高5.9~6.4mの位置にある。

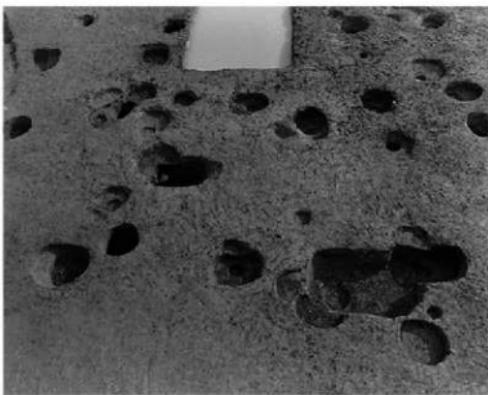


図57 掘建柱建物570（西から）

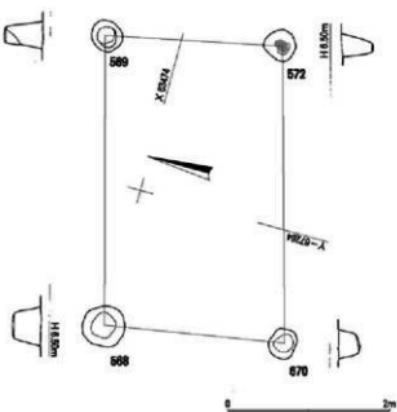


図58 掘建柱建物580 (1/60)

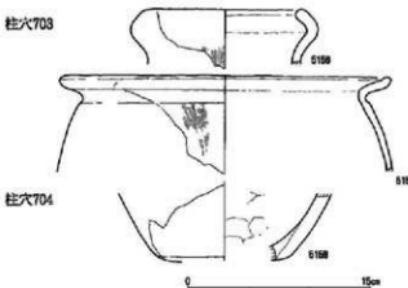


図59 掘建柱建物580出土遺物 (1/4)

**出土遺物 (図59、表2~4)** 遺物は各柱穴埋土中から散漫に小量出土した。すべて弥生土器細片資料である。器表の荒れが顕著である。時期を判別できた資料には後期の他に中期のものが含まれる。5156・5157は柱穴703出土である。5156は袋状口縁壺である。器壁が厚く、口縁下の外面に刷毛目調整痕が残る。5157は甌である。5158は柱穴704から出土した。体部から底部にかけて器厚が一定で、底面がやや凸面を成す。

#### 掘建柱建物710 (図61)

3区55-79区、調査区北壁際に位置する。一部を調査区外に想定している。柱穴から1×1間の構造を想定できる。平面形は東西方向に長軸をとる長方形状である。建物軸は北から82° 東偏する。復原する柱間隔は下記のようになる。

$$\text{柱穴526} \sim \text{柱穴512} = 3.5\text{m}$$

$$\text{柱穴525} \sim \text{柱穴526} = 1.8\text{m}$$

柱穴は平面で隅円方形を呈し、軸長0.6~0.7mほどである。柱穴底面は平坦でいずれも標高6.2mの位置にある。調査区外にさらに柱穴を想定するならば1×2間の構造の可能性もある。

**出土遺物 (図62、表2~4)** 各柱穴埋土から、散漫に、小量遺物が出土した。すべて弥生土器細片資料である。器表の荒れが顕著で体部破片が大半を占めることから、時期・調整等の詳細は不詳の資料が大半である。時期を判別できた資料には後期の他に中期のものがあり、器形には甌・壺が含まれる。5159・5160はともに柱穴525出土である。5159は甌、5160は壺で、平底、底部近くの体部がやや屈曲する。

#### 掘建柱建物711 (図63)

3区55-79区に位置する。建物567・568と重複する。柱穴534で建物533と重複するが、前後関係を確認することはできなかった。また、柱穴566が溝516として、それより古い。柱穴から1×1間の構



図60 掘建柱建物580 (西から)



図61 掘建柱建物710 (1/50)

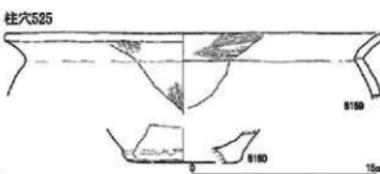


図62 掘建柱建物710出土遺物 (1/4)

造を復原できる。平面形は南北方向に長軸をとる四辺形で、短辺側の柱間隔に差があることから、全体として台形状を呈す。建物軸は北から35° 東偏する。復原する柱間隔は下記のようになる。

$$\text{柱穴527} \sim \text{柱穴557} = 4.1\text{m}$$

$$\text{柱穴566} \sim \text{柱穴534} = 4.2\text{m}$$

$$\text{柱穴527} \sim \text{柱穴566} = 2.6\text{m}$$

$$\text{柱穴557} \sim \text{柱穴534} = 3.0\text{m}$$

長辺側の柱間隔が大きいが、間柱などを確認することはできなかった。柱穴は平面で不整な隅円の長方形状を呈する。長さは0.7~1.0m範囲にあり、形状



図64 掘建柱建物711出土遺物(1/4)

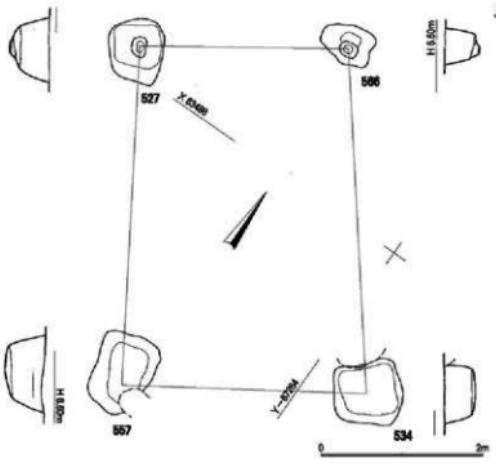


図63 掘建柱建物711(1/60)

の差が顕著である。柱穴底面は柱穴566以外は平坦で、標高6.0~6.1mの位置にある。

**出土遺物** (図64、表2・4) 566を除く各柱穴から遺物が小量出土した。いずれも埋土中から散漫に出土したもので、すべて弥生土器細片資料である。大半が体部細片で、時期不詳のものである。時期のわかる資料では中期壺がある。5161は柱穴327出土の壺である。

#### 掘建柱建物712 (図65)

3区35-78区に位置する。柱穴から1×1間の構造を復原できる。平面形は南北方向に長軸をとる四辺形で、一方の辺の柱穴がずれて、平行四辺形状となっている。建物714と重複し、柱穴565が建物714柱穴701と重複してそれよりも新しい。建物軸は北から13° 東偏する。

柱間隔は下記のようになる。

$$\text{柱穴559} \sim \text{柱穴565} = 3.5\text{m}$$

$$\text{柱穴558} \sim \text{柱穴742} = 3.5\text{m}$$

$$\text{柱穴559} \sim \text{柱穴558} = 2.1\text{m}$$

$$\text{柱穴565} \sim \text{柱穴702} = 2.1\text{m}$$

柱穴は平面で隅円の方形状あるいは不整な円形状を呈し、軸長または径で0.6mほどの規模である。柱穴底面は平坦で、柱痕跡とみられる窪みが柱穴565以外で検出した。底面

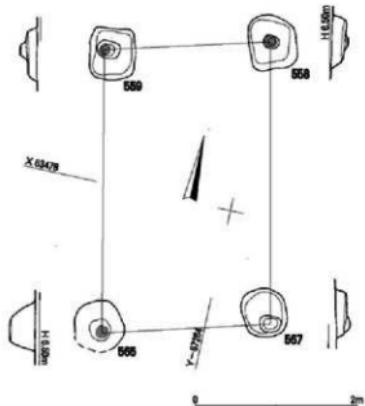


図65 掘建柱建物712(1/60)

の標高は6.2~6.3mの位置にある。

**出土遺物（図66、表2・4）** 柱穴559を除く各柱穴埋土から遺物が出土した。いずれもごく小量の弥生土器細片である。器表の荒れが著しく、時期など不詳のものが大半である。時期のわかる資料には中期のものと、後期かと思われるものがある。器形には甕・壺が認められた。

5132は柱穴565出土壺である。球状の体部を復原できよう。

#### 掘建柱建物713（図67）

3区35-88区で、掘建柱建物群南辺部に位置する。周辺に柱穴の分布がなく、柱穴から1×1間の構造を復原できる。平面形は南北方向に長軸をとる四辺形で、長辺側の柱間隔の差が大きいことからやや台形状を呈す。建物軸は北から30°東偏する。

柱間隔は下記のようになる。

柱穴466～柱穴419 = 4.3m

柱穴705～柱穴708 = 4.0m

柱穴466～柱穴705 = 2.9m

柱穴419～柱穴708 = 3.0m

柱穴は平面で円形あるいは梢円形状を呈す。梢円形とする柱穴の長軸は建物中心の方向を向いている。柱穴底面は平坦で、底面の標高は6.2mを中心にして上下0.1mの範囲にある。

**出土遺物（表2）** 柱穴708を除く各柱穴埋土から小量遺物が出土した。すべて弥生土器細片資料で、器表の荒れが著しく、器形・時期とも不詳である。

#### 掘建柱建物714（図68）

3区35-78区に位置する。柱穴から1×1間の構造を復原できる。平面形は南北方向に長軸をとる長方形状である。建物軸は北から80°東偏する。建物720・712と重複する。建物712とは柱穴701で重複しており、そこでの関係から建物714が712より新しいことがわかる。



図66 掘建柱建物712出土遺物(1/4)

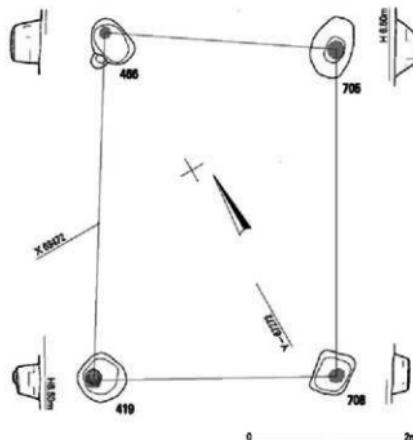


図67 掘建柱建物713(1/60)

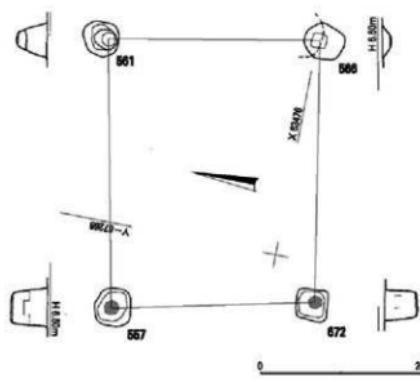


図68 掘建柱建物714(1/60)



図69 掘建柱建物714出土遺物(1/4)

柱間隔は下記のようになる。

柱穴561～柱穴557 = 3.3m

柱穴701～柱穴672 = 3.2m

柱穴561～柱穴701 = 2.6m

柱穴557～柱穴672 = 2.5m

柱穴は平面で円形状あるいは隅円の方形形状を呈す。径・軸長は0.4～0.5mほどである。

底面は標高5.1～5.3mの位置にある。

**出土遺物**（図69、表2・4） 柱穴657以外の各柱穴から小量出土した。いずれも弥生土器細片資料で、器表の荒れが著しく、大半は時期・調整などの詳細は不詳である。時期を判断できる資料では中期のほかに後期のものがある。

壺5163は柱穴701出土である。球状の胴部に繋がる頸部資料である。

#### 掘建柱建物715（図70）

3区35-87区に位置する。柱穴から $1 \times 1$ 間の構造を復原できる。平面形は東西方向に長軸をとる四辺形である。短辺方向の柱穴間隔が異なることから、やや台形状を呈す。建物軸は北から $77^{\circ}$ 西偏する。建物412と重複する。柱穴752での重複関係から建物412が新しいと判断した。ただ、柱穴725については、復原する建物の平面形が整った形状となるという点から考えると、重複する414の位置が建物715の位置として整合性があるという問題を残す。

柱間隔は下記のようになる。

柱穴725～柱穴584 = 3.1m

柱穴726～柱穴707 = 3.1m

柱穴725～柱穴726 = 2.5m

柱穴584～柱穴707 = 2.2m

柱穴は平面で円形状あるいは隅円の方形形状を呈す。径・軸長は0.4～0.5mほどである。

底面は標高6.1～6.3mの位置にある。

**出土遺物**（表2） 柱穴584・707からは遺物の出土がなかった。重複する建物412の柱穴との分別が難しいが、弥生土器細片の一部は柱穴725・726埋土中からの出土であったと考

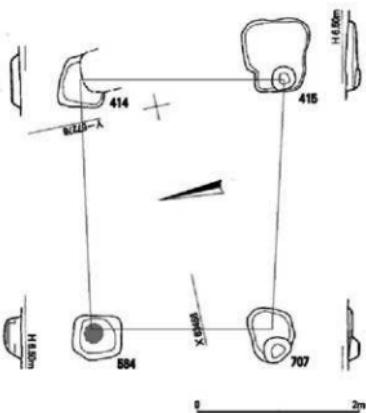


図70 掘建柱建物715 (1/60)

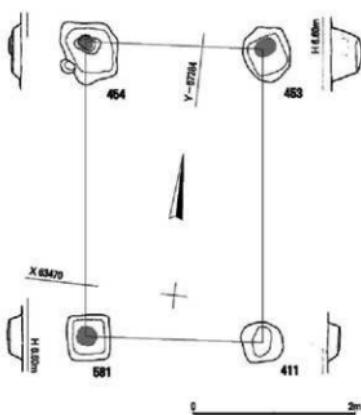


図71 掘建柱建物716 (1/60)

えられる。

#### 掘建柱建物716 (図71)

3区35-98区に位置する。柱穴から $1 \times 1$ 間の構造を復原できる。平面形は南北方向に長軸をとる四辺形で、一方の辺の柱穴がずれて、平行四辺形状となっている。建物軸は北から $7^{\circ}$ 東偏する。

柱間隔は下記のようになる。

柱穴454～柱穴581 = 3.7m

柱穴453～柱穴411 = 3.6m

柱穴454～柱穴453 = 2.2m

柱穴581～柱穴411 = 2.2m

柱穴は平面で隅円の方形状あるいは不整な長方形状を呈し、軸長まで0.5～0.7mほどの規模である。柱穴底面は柱穴453が標高6.1mの位置にあるほかは、標高6.4m前後の位置にある。

**出土遺物（表2）** 柱穴454を除く各柱穴埋土から、小量遺物が出土した。すべて弥生土器細片資料である。器表の荒れが著しく、体部破片が大半を占める。時期は不詳である。

#### 掘建柱建物717 (図72)

3区35-98区に位置する。柱穴から $1 \times 1$ 間の構造を復原できる。平面形は東西方向に長軸をとる四辺形である。短辺方向の柱間隔が異なることからやや台形状を呈す。建物軸は北から $81^{\circ}$ 東偏する。

柱間隔は下記のようになる。

柱穴727～柱穴456 = 3.1m

柱穴583～柱穴452 = 3.2m

柱穴727～柱穴583 = 2.5m

柱穴456～柱穴452 = 2.7m

柱穴は平面で隅円の方形状を呈す。

軸長は0.4～0.6mほどである。底面は平坦で、位置に標高6.1～6.5mの幅がある。

**出土遺物（図73、表2・4）** 柱穴452・456の埋土中から散漫に小量出土した。すべて弥生土器細片資料である。器表の荒れが顕著で大半は体部細片である。時期のわかる資料には後期のものがある。5164は柱穴456出土の甕である。

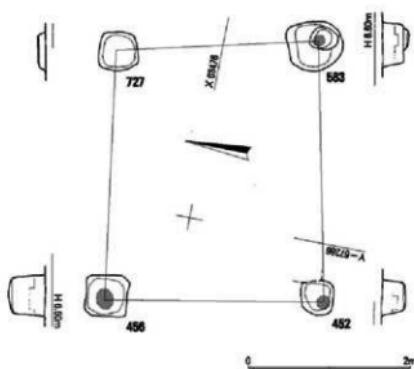


図72 掘建柱建物717 (1/60)



図73 掘建柱建物717出土遺物 (1/4)

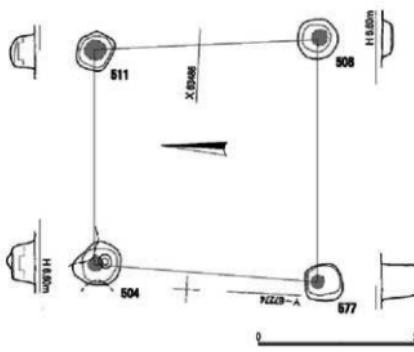


図74 掘建柱建物719 (1/60)

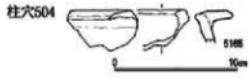


図75 掘建柱建物719出土遺物 (1/4)

### 掘建柱建物719 (図74)

区35-89区に位置する。柱穴から $1 \times 1$ 間の構造を復原できる。北西の柱穴564については、隣接する576の可能性が残る。柱痕跡、規模の点から柱穴564を充てておく。ほとんど等辺に近いが、平面形は東西方向に長軸をとる四辺形とした。長辺方向の柱間隔が異なることから、やや台形状を呈す。建物軸は北から $85^\circ$ 東偏する。

柱間隔は下記のようになる。

柱穴511～柱穴564 = 2.6m

柱穴508～柱穴571 = 3.0m

柱穴511～柱穴508 = 2.8m

柱穴564～柱穴571 = 2.8m

柱穴は平面で隅円の方形状、円形状を呈す。軸長・径は $0.4 \sim 0.5$ mほどである。平面では、それぞれの柱

穴で柱痕跡を確認した。底面の位置は標高6.2mを中心に $6.1 \sim 6.4$ mの幅がある。

**出土遺物 (図75、表2・4)** 577を除く各柱穴から遺物が小量出土した。大半は弥生土器である。細片で器表が荒れている。時期のわかる資料には中期の甕がある。甕5165は柱穴504からの出土である。

### 掘建柱建物720 (図76)

3区35-89区に位置する。柱穴から $1 \times 2$ 間の構造を復原した。1基は擾乱により欠失している。桁行方向の柱間隔が不揃いな点疑問が残り、西側4基の柱穴で $1 \times 1$ 間の建物を構成していた可能性がある。平面形は東西方向に長軸をとる長方形である。建物軸は北から $63^\circ$ 東偏する。桁行方向で柱圧痕とみられる柱穴底面の凹部は筋が通らず、南へずれる。

柱間隔は下記のようになる。

柱穴546～柱穴575 = 2.3m

柱穴575～柱穴472 = 1.9m

柱穴563～柱穴468 = 1.8m

柱穴472～柱穴468 = 2.5m

柱穴は平面で隅円の方形状、不整な梢円形状を呈す。軸長は $0.5 \sim 0.6$ mほどである。平面では、それぞれの柱穴底面で、柱圧痕かと思われる凹部を検出したが、その位置は偏り

の大きいものがあったり、柱痕跡と一致しないものなどがある。底面の位置は標高 $6.1 \sim 6.4$ mの幅がある。

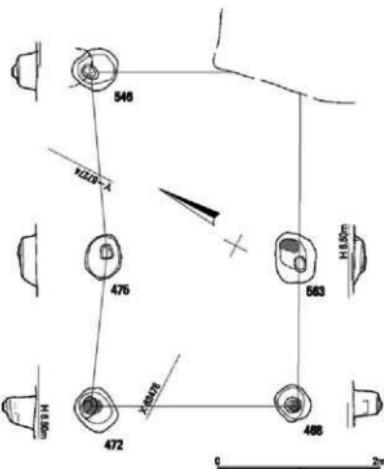


図76 掘建柱建物720 (1/60)

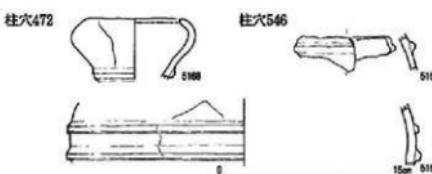


図77 掘建柱建物720出土遺物 (1/4)

**出土遺物** (図77、表2・4) 各柱穴埋土からそれぞれ小量の遺物が散漫に出土した。ほとんどは弥生土器である。弥生土器は細片資料で、器表の荒れが顕著である。時期を判別できたものは中期・後期に属する。柱穴563からガラス小玉が出土した。

5168は柱穴472出土の袋状口縁壺である。器壁が薄く、外面に化粧掛けの痕跡が残る。5166・5167は柱穴546から出土した。ともに壺で2条の突帯をもつ胴部である。

#### 掘建柱建物721 (図78)

1区35-07区に位置する。柱穴2基が軸を描んで並んでいる。現状で建物の形状・規模を復原できないが、調査区外に対応する柱穴を想定するとして、周間に同規模・形状の造構がなく際立っており、ほかに可能性を考えられないことから建物としておく。柱筋は北から $10^{\circ}$  東偏する。

柱間隔は下記のようになる。

柱穴 96～柱穴119 = 3.3m

柱穴の平面形は不整な椭円形状を呈す。底面が2段の掘形となっており、中央の深い掘形に重なって柱痕跡、底面に柱圧痕が検出された。断面でも柱痕跡は明瞭である。柱穴の長さは柱穴96で1.2m、柱穴119で1.4mを測る。底面の高さは標高6.5～6.6mの位置にある。

**出土遺物** (表2) 各柱穴からそれぞれ小量の遺物が出土した。すべて弥生土器の体部細片で、器表の荒れが顕著で、時期その他不詳である。

#### 掘建柱建物722 (図79)

1区45-18区に位置する。45-18区では柱穴とみられる小穴が集中する。柱穴から1×1間の構造を復原できる。平面形は南北方向に長軸をとり、縦横比の小さな長方形状である。建物723と重複する。建物軸は北から $23^{\circ}$  西偏する。

柱間隔は下記のようになる。

柱穴 58～柱穴 53 = 2.8m

柱穴 70～柱穴108 = 2.9m

柱穴 58～柱穴 70 = 2.4m

柱穴 53～柱穴108 = 2.4m

柱穴は平面で隅円の方形状、不整な円形状を呈す。軸長・径は0.5～0.6mほどである。底面は平坦で、その標高は6.3～6.4mの位置にある。

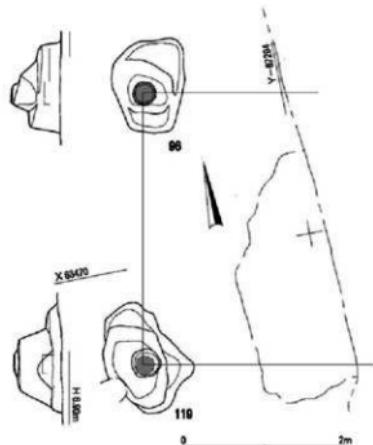


図78 掘建柱建物721 (1/60)

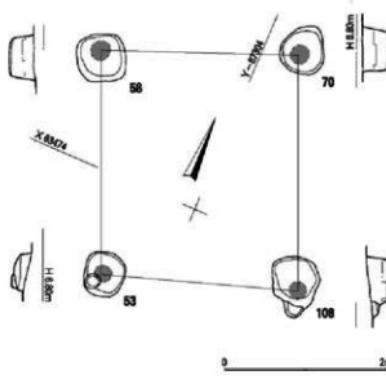


図79 掘建柱建物722 (1/60)

**出土遺物 (図80、表2・4)** 各柱穴埋土からそれぞれ小量の遺物が、散漫に出土した。すべて弥生土器の細片資料である。大半が体部破片で、器表の荒れが顕著であり、時期を判断できたものはごく小数である。

中期・後期の土器を認めた。

高環杯部5173は柱穴58から出土した。口縁端近くで屈曲外反外向する。壺底部5174は柱穴70から出土した。胎土に角閃石を小量含み器壁が薄い。

#### 掘建柱建物723 (図81)

1区45-18区に位置する。柱穴から1×1間の構造を復原できる。平面形は南北方向に長軸をとる四辺形で、一方の辺の柱穴がずれて、平行四辺形状となっている。建物722と重複する。建物軸は北から $26^{\circ}$ 西偏する。

柱間隔は下記のようになる。

柱穴 57～柱穴 49 = 2.5m

柱穴 59～柱穴 56 = 2.3m

柱穴 57～柱穴 59 = 1.5m

柱穴 49～柱穴 56 = 1.6m

柱穴は平面で隅円の方形状あるいは円形状を呈し、軸長または径で0.5～0.6mほどの規模である。柱穴底面は平坦で、底面の標高は6.3～6.5mの位置にある。

**出土遺物 (図82、表2・4)** 各柱穴埋土からそれぞれ小量の遺物が散漫に出土した。すべて弥生土器で、ごく一部を除いて細片の資料である。大半が体部破片で器表の荒れが顕著であり、器形・時期不詳である。

甕5175は柱穴56から出土した。例外的に大きく遺存する破片資料である。器表の荒れは顕著である。

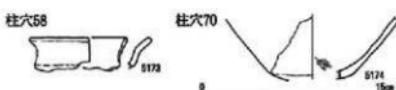


図80 掘建柱建物722出土遺物 (1/4)

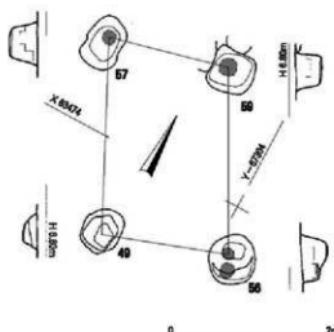


図81 掘建柱建物723 (1/80)

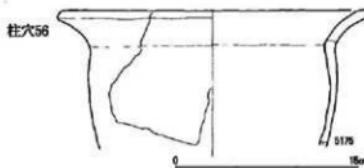


図82 掘建柱建物723出土遺物 (1/4)

箇所	時代	馬鹿字書	遺物鑑定状態		遺物説明
			馬鹿字書	馬鹿字書	
215	140	小量	馬鹿片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + (馬鹿片、船片、馬鹿不詳)	
	114	小量	馬鹿片～船片、若吉丸れ顔。	+ 馬生土器 + 船 (広口横口船底丹波引窓)、馬鹿片	-
	130	小量	馬鹿片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 船 (馬鹿片、若吉、時期不詳)	-
	134	小量	馬鹿片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 中量 + 船 (馬鹿片、船底片)	-
	140	小量	馬鹿片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + (馬鹿片、船片、時期不詳)	-
	144	小量	馬鹿片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 中量 + 船 (馬鹿片)	-
262	21	中量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) (馬鹿片)	
	160	中量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	- + その他 (大抵は伴用破片、船形、時期不詳)	-
	171	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 陶器品 + 佚失 (?) (馬鹿片)	-
	173	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 陶器品 + 佚失 (?) (馬鹿片)	-
	174	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 陶器品 + 佚失 (?) (馬鹿片)	-
	236	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔(一舟山被熱)。	+ 馬生土器 + 小量 + 船 (馬鹿片)	-
403	403	小量	船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 中量 + 船 (馬鹿片)	
	407	小量	船片、若吉の速万好日丸れ顔。	- + 佚失 (馬鹿片、船形、時期不詳)	-
	408	小量	船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 中量 + 船 (馬鹿片)	-
	414	小量	船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 小量 + 船 (馬鹿片)	-
	415	小量	船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 小量 + 船 (馬鹿片)	-
	416	小量	船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 中量 + 船 (馬鹿片)	-
413	414	小量	小帆片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 中量 + 船 (馬鹿片)	
	417	中量	船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 中量 (馬鹿片)	-
	418	小量	船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 中量 (馬鹿片)	-
	425				
	426				
	433	小量	小帆片。若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 中量 + 船 (馬鹿片)	-
567	724	中量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 中量 + 船 (馬鹿片)	
	526	中量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 中量 + 船 (馬鹿片)	-
	530	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) (馬鹿片)	-
	729	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) (馬鹿片)	-
	448	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) (馬鹿片)	-
	502	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) (馬鹿片)	-
568	729	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) (馬鹿片)	
	446	小量	船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + (若吉・時期不詳)	-
	450	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + (佚失・時期不詳)	-
	523	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 陶器品 + 佚失 (?) (馬鹿片)	-
	441	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + (佚失・時期不詳)	-
	442	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + (佚失・時期不詳)	-
569	495	中量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) + 船 (馬鹿片)	
	496	中量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) + 船 (馬鹿片)	-
	540	中量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) + 船 (馬鹿片)	-
	494	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) + 船 (馬鹿片)	-
	501	中量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) + 船 (馬鹿片)	-
	509	中量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) + 船 (馬鹿片)	-
870	539	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + (大抵が馬鹿片、船形・時期不詳)	
	527	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) (馬鹿片)	-
	521	小量	船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) (馬鹿片)	-
	545	小量	船底片～船片、若吉の丸れ顔。	+ 馬生土器 + 佚失 (?) (馬鹿片)	-
				+ 大部分が伴用破片、船形・時期不詳)	-
				+ 大部分が伴用破片、船形・時期不詳)	-

表1 据建柱建物出土遺物構成(1)

箇所	時代	馬鹿骨羣	遺物調査状態	箇所地名
570	547	小量	馬鹿片～細片、馬鹿丸。	+ 防生土器 + 大型片 (口縁部破片)、器壁・堆積不詳
	496	小量	馬鹿片～細片、馬鹿の丸れ細部。	+ 防生土器 + 後期 + 壁 (口縁部破片)
				+ 中前 + 壁 (小形、体部細片)
580	670	小量	細片、馬鹿の丸れ細部。	+ 壁 (口縁部破片)、器壁・堆積不詳
	703	小量	細片～小片片、馬鹿丸。	+ 防生土器 + (骨頭破片、器壁・堆積不詳)
	714	小量	細片～小片片、馬鹿丸。	+ 防生土器 + 後期 + 壁 (口縁部破片)、器壁・堆積不詳
	672	小量	馬鹿片～細片、馬鹿丸。	+ 防生土器 + 後期 + 壁 (口縁部破片)、器壁・堆積不詳
710	826	小量	馬鹿丸の丸れが悪い。	+ 防生土器 + (骨頭片)、器壁・堆積不詳
	825	小量	馬鹿丸の丸れが悪い。細片で、毎どが体部破片。	+ 防生土器 + 後期 + 壁 (口縁部破片)
	811	極少量	馬鹿丸の丸れが悪い。	+ 防生土器 + 後期 + 壁 (口縁部破片)、器壁・堆積不詳
711	814	小量	馬鹿丸。馬鹿片～細片	+ 防生土器 + 後期 (骨頭片)
	866			+ 防生土器 + 後期 (骨頭片)
	827	小量	通行片好、馬鹿片～細片。	+ 防生土器 + 後期 (骨頭片)、器壁・堆積不詳
712	827	小量	一端浅舟底。細片。	+ 防生土器 + 中前 + 壁
	828	中量	馬鹿丸が悪い。	+ 防生土器 + 後期 (口縁部破片)、器壁・堆積不詳
	702	小量	馬鹿丸が悪い。	+ 防生土器 + 後期 (口縁部破片)、器壁・堆積不詳
713	755	小量	馬鹿丸が悪い。	+ 防生土器 + 壁 (後期)、堆積不詳
	756	中量	馬鹿丸が悪い。	+ 防生土器 + 壁 (後期)、堆積不詳
	858	极少量	馬鹿丸が悪い。	+ 防生土器 + 壁 (中前)、堆積不詳
714	871	小量	馬鹿丸。馬鹿片～細片	+ 防生土器 + 壁 (中前)、堆積不詳
	701	小量	馬鹿丸。細片	+ 防生土器 + 直 (口縁部破片)、器壁・堆積不詳
	561	小量	馬鹿丸。馬鹿片～細片	+ 防生土器 + 直 (口縁部破片)、器壁・堆積不詳
715	657			
	554			
	707			
716	728			
	725			
	454			
717	521	極少量	馬鹿丸。馬鹿片	+ 防生土器 + (骨頭破片)、器壁・堆積不詳
	471	小量	馬鹿丸。馬鹿片	+ 防生土器 + (骨頭破片)、器壁・堆積不詳
	453	極少量	馬鹿丸。	+ 防生土器 + (骨頭破片)
718	727			
	563			
	456	中量	毎どが器底の丸れが悪い。細片～細片。	+ 防生土器 + 後期 + 壁 (口縁部破片)、全体に丸れが悪い。
719	511	小量	馬鹿丸。	+ 壁 (口縁部破片)、堆積・堆積不詳。
	524	小量	細片。馬鹿丸部分的に丸れ。	+ 防生土器 + (骨頭破片)、器壁・堆積不詳
	577			+ 防生土器 + 中前 + 壁 (口縁部破片)
720	526	小量	細片。馬鹿丸。	+ 防生土器 + (骨頭破片)、器壁・堆積不詳
	468	小量	細片。馬鹿丸。	+ 防生土器 + (骨頭破片)、器壁・堆積不詳
	546	小量	細片。器底の丸れ部。	+ 防生土器 + 中前 + (骨頭破片)、中前
721	472	小量	細片～小片片。馬鹿丸の丸れ。	+ 防生土器 + (口縁部破片)、器壁・堆積不詳
	475	小量	細片。馬鹿丸の丸れ。	+ 防生土器 + (骨頭片)、器壁・堆積不詳
	563	小量	上部・馬鹿片、馬鹿丸の丸れ。	+ 防生土器 + (骨頭破片)、器壁・堆積不詳
722	119	小量	馬鹿片～細片、馬鹿丸の丸れ。	+ 防生土器 + (骨頭破片)、器壁・堆積不詳
	96	小量	馬鹿片～細片、馬鹿丸。	+ 防生土器 + (骨頭破片)、器壁・堆積不詳
	58	小量	馬鹿片～細片。馬鹿の丸れ細部。	+ 防生土器 + 後期 + (口縁部破片)、堆積
723	128	中量	馬鹿片～細片。馬鹿の丸れ細部。	+ 大量分合堆積物、器壁・堆積不詳
	56	小量	細片～小片片。馬鹿の丸れ細部。	+ 防生土器 + 後期 + (口縁部破片)
	49	小量	細片。馬鹿の丸れ細部。	+ 大量分合堆積物、器壁・堆積不詳
724	52	小量	細片～細片、馬鹿の丸れ細部。	+ 防生土器 + (口縁部破片)、器壁・堆積不詳
				+ 防生土器 + (骨頭破片)、器壁・堆積不詳

表2 框建柱建物出土遺物構成(2)

## (3) 土壌

土壌は3区台地上の調査区北部分と谷部4の台地寄りの部分、台地部の谷4寄りの部分の3個所に分布する。台地部では平面で長方形の土壌が、谷部では円形の土壌を調査した。第9次調査地点では柱穴に大規模なものがあり、両者の区分は柱の痕跡などがない限り不明である。ここでは、前2者、台地部の土壌について報告する。谷部の土壌については、谷4の報告に併せて報告することとした。

調査区北部分の台地中央部の土壌に、462・464・496・505がある。台地縁部の土壌に421・422がある。以下、遺構番号順に記述する。

## 土壌421(図83・85・86)

3区35-68区に位置する。台地が谷に落ちるやや内側に立地する。周囲に同時期の遺構は分布しない。平面で隅円長方形となる。断面は深い逆台形状である。底面は隅円長方形状である。確認面で長さ1.1m、幅0.7m、深さは、現況で1.0m、底面の長さ0.5m、幅0.3mをはかる。底面の標高は6.6mの位置にある。

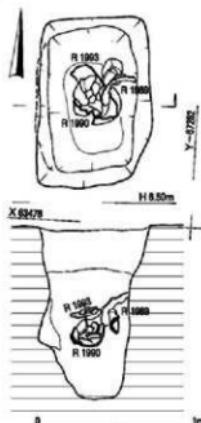


図83 土壌421(1/30)

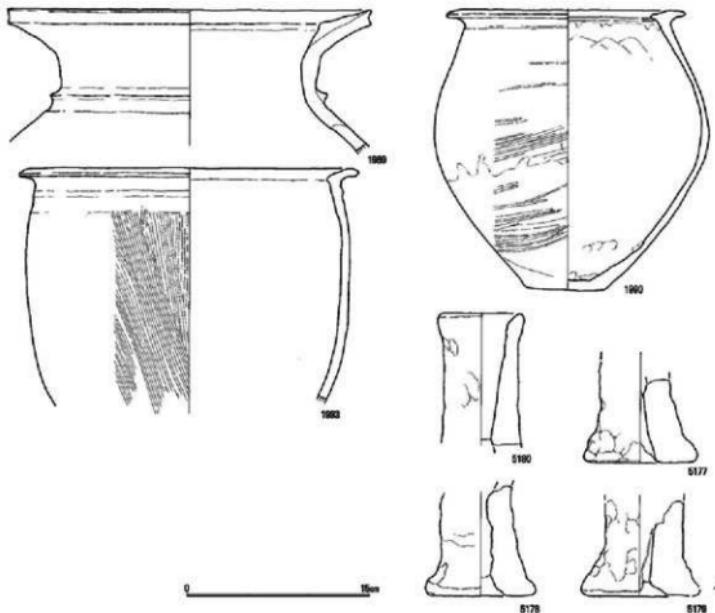


図84 土壌421出土遺物(1/4)

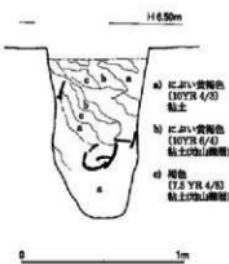


図85 土壌421土層断面 (1/30)

土壤の中央東西方向の断面を観察すると、土壤西側から流し込まれたような堆積層の流れがあり、土壤中位以上はこれによる堆積で埋まっている。下位の土層は調査中の冠水により観察を十分に行うことができなかったが、上部層構成層のうち、ぶい黄褐色粘土によって埋まっているものとみられる。このうち、上部層底面近くから、土器及び小兒頭大の礫が投棄されたような状態で出土した。また、それの下位に炭化米とみられる炭化物が密集して出土した。



図86 土壌421 (東から)



図87 土壌422 (西から)

**出土遺物 (図84・表4)** 遺物は総量で収納コンテナ2/3ほどの分量が出土した。その大部分は覆土中位からまとめて出土した。図84に示すのは、その縁まりに含まれる土器である。壺・甕の他に器台が出土した。

1989は広口壺である。口縁部の小破片資料で、器表は大部分剥落しており、器表の遺存状態は他資料に比べ極端に悪く、異質な印象を受ける。頸部が直立し、口縁部が大きく外反して開く。口縁内面に粘土を張り付け、やや内向きの面を形成している。頸部基部に1条の突帯を設ける。胴部外面に縦方向の撓で調整を行っていることが観察される。

1990は無頸甕である。接合してほぼ完形となった。口縁端内面から外面上半部にかけて化粧掛けを行う。内面には指印の痕跡が各

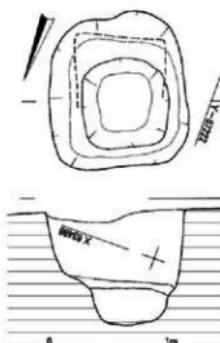


図88 土壌422 (1/30)

部に残る。外面下半部には周回方向に6区画して擦磨き調整を行う。口縁部径194mm、底径97mm、器高222mmを測る。1993は壺上部である。口縁部外面には周回方向の擦で調整を行なうが、外面では強い擦で調整により凹線状の窪みを生じている。復元口径275mmである。

1988・5177～5179は器台である。1988は上半部、他は下半資料である。器表の全体に指押さえの痕跡が残る。成形後、全体に擦で調整を加えている。粘土板を軸に巻き付けて成形したような痕跡が残る資料がある(5178)。

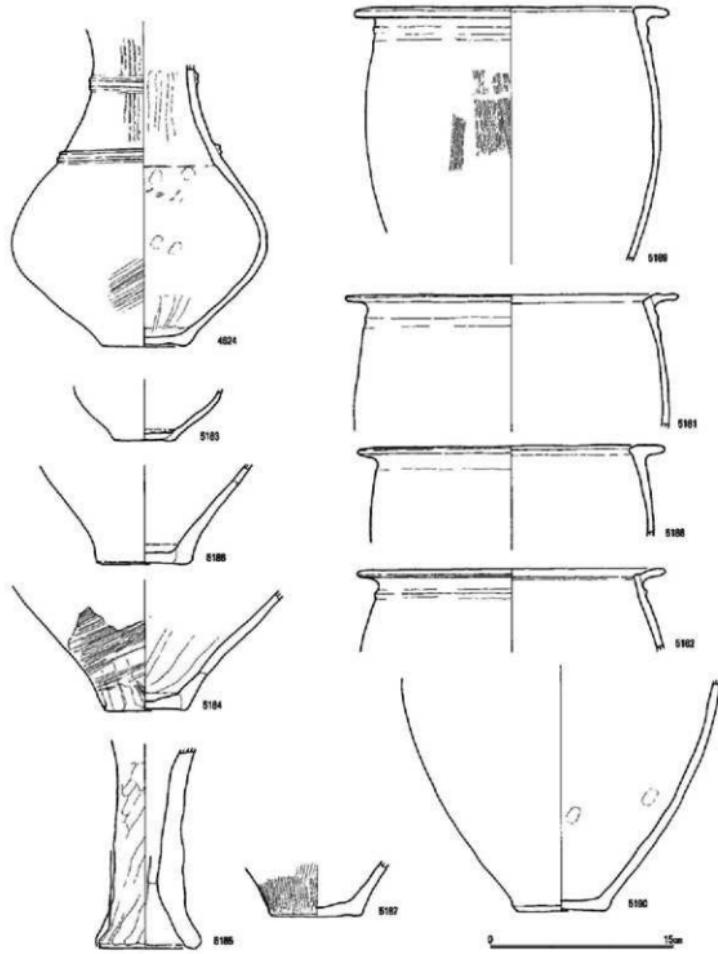


図89 土壠422出土遺物(1/4)

### 土壤422 (図87・88・90)

3区の35-38区に位置する。土壤421よりさらに谷部に近い立地である。確認面では、たわんだ長方形状にみえたが、掘形は隅円の方形状を呈する。確認面での形状と掘形範囲との間は、地山土である真砂で埋まっている。この部分に同心円状に亀裂があり、造構中心に向かって倒れ込んで行った状態を見ることができる。真砂層は覆土下位までは広がらず、以下は黒褐色粘質土となる。当初、井戸枠の可能性にも留意して掘り下げを進めたが、覆土の様態から袋状



図89 土壌422 (西から)

の断面をもった土壤の崩落の結果と判断した。底面は2段になっており、中程が広がる断面形を復原でき、この点からは帶水していた可能性も捨てきれない。覆土には、明確な水成層を確認できなかった。確認面での長さ1.0m、幅0.7m、掘形の長さ1.2m、幅1.1m、深さは段部まで0.6m、底面まで1.0mが遺存している。底面は標高5.9mの位置にある。

**出土遺物 (図89、表4・5)** 主として上半部で遺物が出土した。覆土中に満遍なく含まれているような状態の中に個体資料が混じる。総量でコンテナ1箱余ほどの分量となった。遺物はすべて弥生土器である。細片から大破片までの資料を含み、器表の状態も良好なものから剥落するものまで幅がある。袋状口縁壺を含む壺、甕、器台が出土している。

4624・5183・5186・5184は壺である。4624の外面には上掛けの痕跡が残る。頭部には上下方向の、胴部下半を中心として左下がありの範囲を調整を加えている。

5189・5181・5188・5182・5190・5187は甕である。口縁は量をなして屈曲し、口縁端面を形成する。底部は平底であるが、底部近くの体部がやや膨らみ気味の資料がある。

### 土壤462 (図91)

3区の35-99区で半ば調査区壁にかかった位置にある。他土壤と比べ例外的に浅い。平面では隅円の長方形、断面は弧状を呈す。長さ1.1m、幅0.8m、深さ0.2mを測る。覆土は地山の褐色粘土で、間に灰層とみられる黒褐

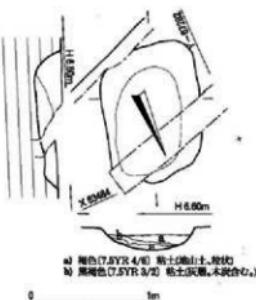


図90 土壌462 (1/40)

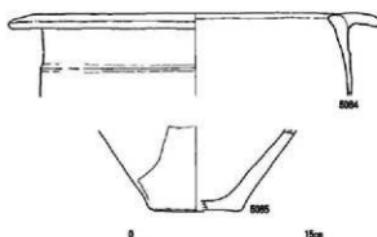


図91 土壌462出土遺物 (1/40)

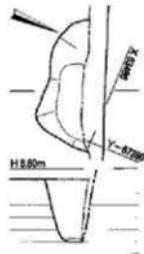


図93 土壌464 (1/40)

いるので判然としないが、平面で隅円長方形あるいは方形を成すものと思われる。断面は深い逆台形状を呈す。現状で長さ1.1m、深さ0.5mを測る。底面は標高6.0mの位置にある。覆土は黒褐色粘土である。

**出土遺物** 遺物は覆土中から散漫に小量出土した。すべて弥生土器細片資料である。器表の荒れが著しく、体部資料でもあるため、時期・器形とも不詳である。

#### 土壤496 (図95・96)

半ば以上を調査したものと思われる。平面形は南北に長い長方形とみえる。断面は確認面近くの上端部が大きく開く他は深い逆台形状を呈す。現況で長さ1.0m以上、幅は0.8m大きく開く部分を含めると1.2m、深さは0.8m、底面の位置は標高5.7mである。土壤肩部が広がる位置を境に上下で覆土が異なり、下位の覆土では黒褐色粘土に地山土塊がはさまれるような状態であるのが上位では地山土塊が大部分を占める。このことから土壤がある程度埋没した時点で人為的に埋め立てられたことも可能性として考えられよう。

色粘質土を挟む。

**出土遺物 (図92、表5)** 遺物は覆土中から散漫に出土した。すべて弥生土器で、小破片までの資料を含む。器表の荒れが顕著である。中期の壺・甕のほかに高环がある。

5084は甕口縁部である。口縁下の外面にごく低い突帯を形成している。5085は甕底部である。

#### 土壤464 (図93・94)

3区の35-99区で半ば調査区壁にかかった位置にある。遺構の一部を調査して



図94 土壌464 (北から)

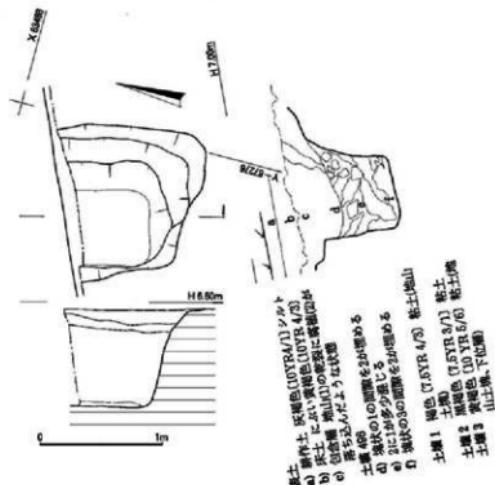


図95 土壌496 (1/40)

**出土遺物** 遺物は覆土中から散漫に小量出土した。玄武岩剥片が含まれるほかは、すべて弥生土器細片資料である。器表の荒れが著しく、体部資料でもあるため、時期・器形とも不詳である。赤化した資料を含んでいる。

#### 土壤505 (図97・98)

3区の35-89区に位置する。不整な方形状の土壤である。断面は深い逆台形状を呈す。軸長は1.0mほどで、深さ0.8mを測る。底面は標高5.7mの位置にある。覆土は地山土である褐色粘土塊を主として間隙を黒色粘質土が充填する。

**出土遺物** (図99、表5) 遺物は小量が覆土中から散漫に出土した。すべて弥生土器細片資料である。後期かと思われる壺がある。その外は体部細片で器表の荒れが顕著であることから、器種・時期など不詳である。

5101は壺底部である。外底面がやや凸面を成す。胴部は底面との境界まで縦方向の刷毛目調整を行っている。



図96 土壌505(北から)

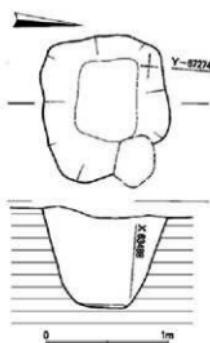


図97 土壌505(北から)

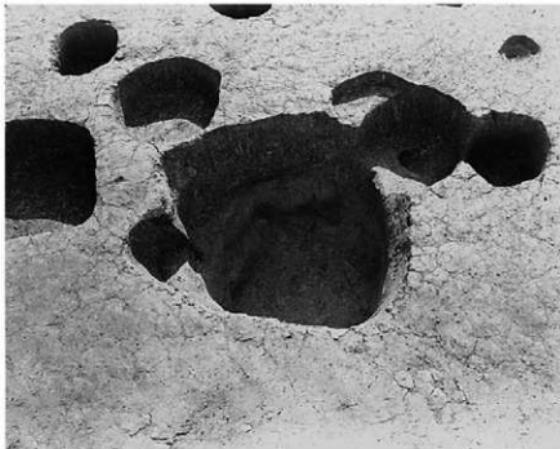


図98 土壌505(1/40)



図99 土壌505出土遺物(1/40)

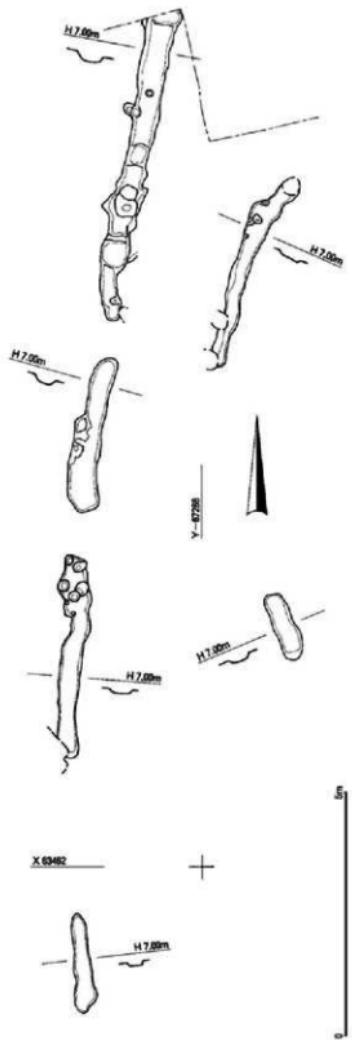


図100 溝6 (1/100)

## (4) 溝

溝は1区・3区の台地部の中央寄りの区域、3区東半部で、台地縁部の谷部堆積に沿った位置及び谷堆積中に分布する。台地部の溝は全体として地形を継続する南北方向に走る。対して台地縁部の溝は谷部に沿う方向に走る(423・424・432・435)。このうち台地縁部、谷堆積中の溝については谷部の遺構と遺物を報告する機会に併せて報告することとし、今回は台地部の溝6・9・10・89・516について報告する。

## 溝6 (図100・101)

1区45-18区から南へ伸びる。溝7・8として記録した遺構を含み、45-16区まで続く。北方へは調査区外に伸びる。溝9と重複してそれよりも新しいものとみえる。覆土は黒褐色粘質土で全体に一樣である。平面ではやや弧状を呈し、両側の岸の凹凸がある。断面は低い逆台形状を呈す。溝の幅0.3~0.5m、深さ0.2~0.1m弱である。北側で広く、深い。

**出土遺物 (図102、表5)** 遺物は覆土中から散漫に出土した。北側で密度が高い。総量でコンテナ2ほどの分量が出土した。半ば以上が北部分の出土である。大部分が土器で、すべて弥生土器である。ほと



図101 溝6 (北から)

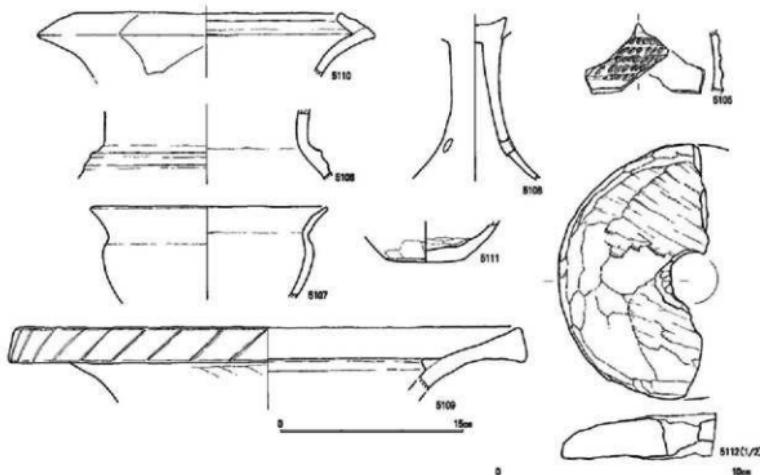


図102 溝8出土遺物(1/4・1/2)

などは細片で、器表の荒れが顕著な資料であり、器形・時期とも不詳である。時期を判別できたものでは中期・後期の資料がある。

5110・5106は壺である。5111は壺底部である。外底面がやや凸面を成す。5109は大形の壺である。大きく開く口縁の内面側に突帯を張り付けている。口縁裏裏面には刻み目を施す。5108は高環脚部である。穿孔は3~4個所であろう。5107は浅い底部をもつ。5105は深い器形で、外面に平行する突帯を巡らせる。突帯の両側に刻み目を連続して全体に施している。器壁は比較的薄く、胎土に粗砂を含み、外面は明るい灰みの赤みを帯びた黄色〔10YR 8/3〕を呈す。5112は円盤状の石錘である。一部を研磨した状態で未成品か。

#### 溝9(付図1)

1区の35-98区から45-18区にかけて北東から南西方向に伸びる。溝と

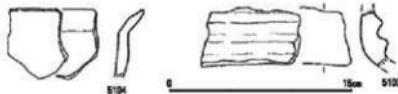


図103 溝9出土遺物(1/4)



図104 溝10(南から)

いうには平面形が不整で、両岸の立ち上がりも不明瞭である。あるいは段落ちの様なものか。覆土は黒褐色粘質土で、遺物を多く含む。幅は1mをこえる部分があり、深い部分で0.1mほどを測る。

**出土遺物（図103、表5）** 遺物は覆土中から満遍なく、比較的密に出土した。剥片類を除いたすべては弥生土器の細片で器表の荒れが顕著である。時期を判別できたものでは後期の高環・壺がある。そのほかは大半が体部資料で器種・時期は不詳である。

5104は壺口縁部、5103は壺頸部で基部に2条の突帯を貼り付ける。

#### 溝10（図104・105・106）

1区45-16区から南下する。45-17区から南下する溝11と合流して谷部に向かう溝である。両者を併せて溝10として報告する。溝10は調査区外へ伸びるが、溝11の北端は堅穴住居24に接する位置にある。調査時の観察によれば溝11が堅穴住居24に重複してそれより新しい。溝の幅は0.2~0.3mである。断面は深いU字形で、幅に比して深い。今回報告する溝のうちで最も深い。溝11の北端部で深さ0.3m、合流部で0.4mほどある。南端部は谷部に向かう斜面にかかり次第に浅くなって確認でき



図106 溝10（北から）

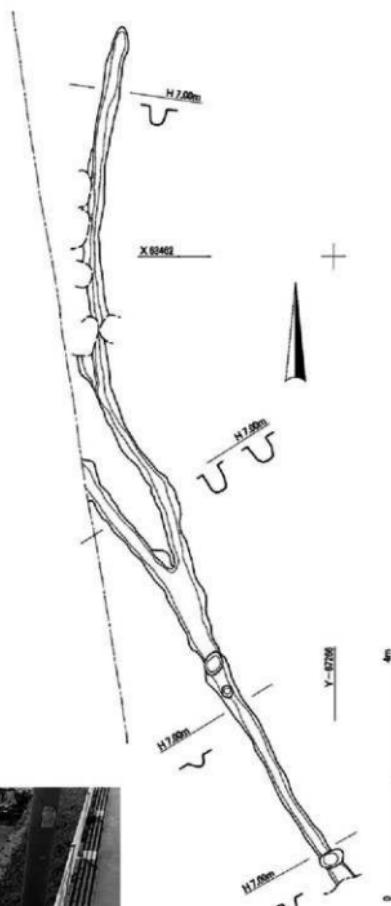


図106 溝10（1/80）

なくなる。谷堆積物との関係は不明瞭で、先後関係を明確にすることはできなかった。覆土は黒褐色でないし褐色で一様である。完形の土器を含む多量の土器が突き込

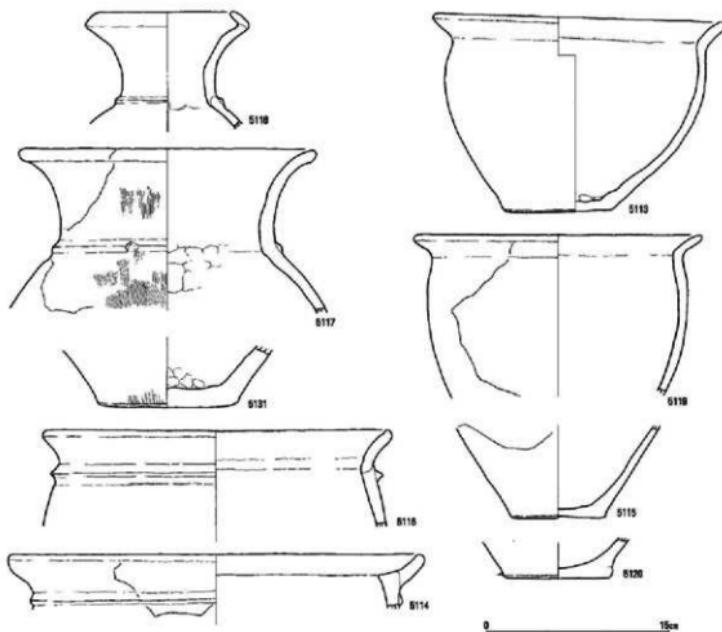


図107 溝10出土遺物 (1/4)

まれたようにして出土した。

**出土遺物 (図107、表5・6)** 上記のような出土状況で、総量コンテナにして3箱ほどの分量出土した。須恵質の平瓦、龍泉窯系青磁の細片があるが、表土下面の凹凸が激しいことからの混じり込みとすると、他の遺物すべてが弥生土器である。完形の資料があるが、その他の大半は細片資料で、かつ器表の荒れ、端部の欠損が顕著である。また、多くは体部細片である。このため器種・時期の判別ができるものは少ない。後期の土器に中期の土器が混じる。

5118・5117・5131は壺である。広口壺5117の頸部突帯には板状工具の角を押しつけたような圧痕が2個所残る。底部5131の外底面はやや凸面を成す。

5116・5114・5113・5119・5115・5120は甌である。甌5113は、ほぼ完形である。圧潰した状態で出土した。器表の大部分は剥落する。

#### 溝89 (図100)

1区35-08区に位置する。35-07区の遺構113も本遺構の部分であろう。湾曲して南方向に向かう。幅0.3m前後、深さ0.1m弱である。覆土は黒褐色粘質土である。

**出土遺物 (図108、表6)** 覆土中から散漫に小量の遺物が出土した。

すべて土器で、細片資料である。器表の荒れが著しい。弥生土器には



図108 溝89出土遺物 (1/4)

中期の壺・後期の壺がある。

土器5102は体部細片の資料である。平行する5条の突帯が残る。突帯の両斜面に斜めに方向の刻み目を等間隔で、連続して施す。溝6で出土した土器5105(図102)と同一個体か。

#### 溝516(図109)

3区35-70区から79区をへて78区に断続する。ごく浅い溝である。平面形状も不整であり、底部近くの部分がかろうじて遺存しているものか。幅0.2~0.3m、深さ0.1mほどである。覆土は黒褐色粘質土。

**出土遺物** 覆土中から散漫に小量が出土した。弥生土器細片資料で器表の荒れが顕著である。中期の壺が含まれる。

#### (5) その他の遺構

以下、これまで報告した区分外の遺構と、報告遺構以外出土遺物、調査面出土遺物のいくつかについて記述する。

#### 遺構493(図110・111)

3区35-89区に位置する。建物569の柱穴494と重複してそれよりも新しい。壺2984が横位の状態で出土した。下部1/3程が検出面に遺存していた。上部の破片が内部に落ち込んだ状態で残り、原状は完形のままで埋置されていたものとみられる。掘形の確認を試みたが確認できなかった。柱穴494の想定さ



図110 遺構493(北から)

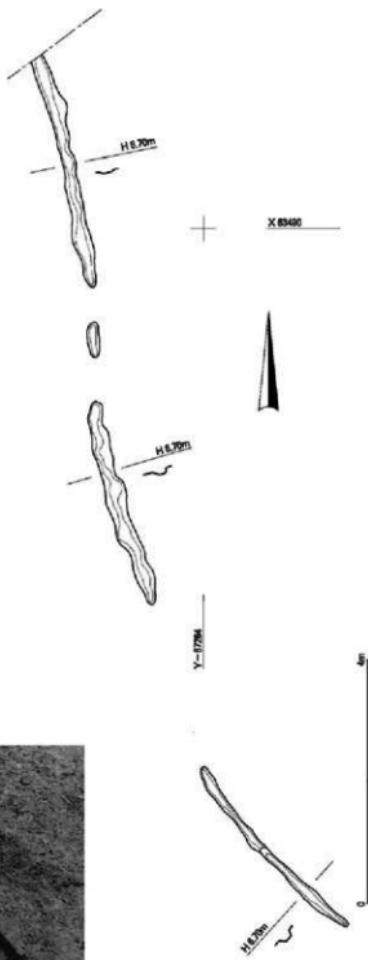


図109 溝516(1/100)

れる柱の直上に位置し、その掘形範囲内に納まる。あるいは、柱穴内に埋納されたものか。

**出土遺物（図112、表6）** 壺2984は上記のような出土状態であったことから、全周の1/3程を接合することができる。胴部中位に突帯が巡りそれより上部は球状、下部はなだらかに底部に統く。底部外底面は凸面を成す。断面からすると内底面から押し出したような成形が行われている。外面の器表は剥落する。内面には粗目の刷毛目調整を施す。5176は2984と同一個体の可能性を考えたが、復原した口径ではそうみえない。資料が細片のため以上の判断がつきかねる。口縁は大きく外反して開き、

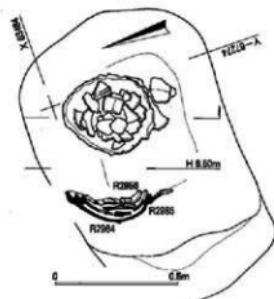


図111 遺構483 (1/20)

端部に刻み目が残る。

#### 調査区内出土遺物（図113、表6）

1925は龍泉窯系青磁碗である。内外面に釉が厚くかかる。緑みの明るい灰色 [10GY 7/1.5] を呈す。表土出土。

2243は白磁碗である。内底面外周に1条の圓線を彫り込む。釉はむらがあり、施釉部は黄みのうすい灰色 [2.5Y 8.5/1.5 象牙色] を呈す。大宰府分類IV類。表土採集。

2337は青磁碗である。胎土に粒状性がある。釉は発砲して不透明、赤みの灰色 [2.5R 5.5/1] を呈す。施釉が畠付まで及ぶ。3区35-24区壁面出土。

78はガラス小玉である。発泡するが透明で濃い緑みの青色 [5B 3/7 マリンブルー] を呈す。1区柱穴14出土。

1839は台形石器である。側縁の調整は部分的に打ち漬し状となっている。刃縁付近の右縁部では表面からの調整を加えている。石材は黒耀石。被熱したものか、器表が擦ガラス状を呈す。素材に礫面を残す。3区35-77区調査面出土。

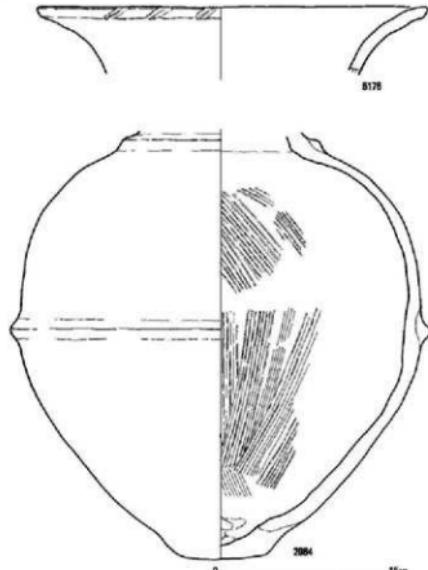


図112 遺構483出土遺物 (1/4)

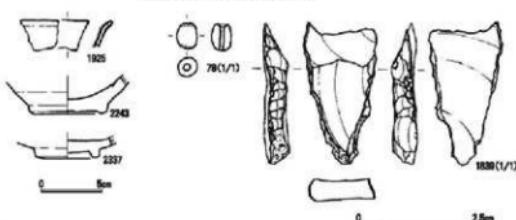


図113 調査区内出土遺物 (1/4・1/1)

#### 4. 小結

今回報告では、今宿五郎江遺跡第9次調査成果のうち、台地部出土遺構・遺物について報告した。遺構は、谷（谷4）縁辺では土壤を除いて分布せず、より台地内部に偏る。

谷部近くに立地する土壙421・422が本最も先行する遺構である。中期後半の土器が多数投棄されている。ともに井戸の可能性が残る。

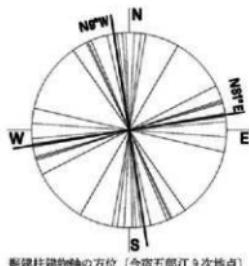
堅穴住居は、本遺跡で初めての調査例である。台地内部に位置する1・5次地点の成果から、台地部の削平が著しく、遺構が破壊されたためかあるいは、もともと分布しなかったためかは即断できないが、ともかく本例が最初の調査例である。堅穴住居24は貼床により先の堅穴住居240を埋めているものと観察された。上位の24には地床炉、下位の240では地床炉、東面する平側に位置する土壙など、弥生時代終末期以降の堅穴住居の特徴を備えている。柱穴は確認できなかった。

溝は、隣接する2次調査地点<sup>⑨</sup>の細く、深い例と同種のものであるが、削平が著しい。

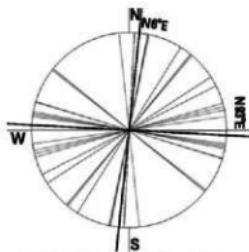
遺構の大半は、柱穴あるいは小穴である。柱穴から掘建柱建物を復原できた。全部で22棟を復原した。柱穴の構成で1×1間の建物14棟、1×2間建物8棟である。柱穴埋土中の遺物は、中期から後期にかけての弥生土器がほとんどである。中期土器は本地点の遺構から満遍なく出土することから、掘建柱建物の時期は、小量ながら出土した後期土器を考えることができよう。

掘建柱建物について、その長軸の方向を図示してみた（図114）。一見してわかるように、建物の想定される棟（長軸）の方向は、東西と南北とに集中している。座標北を基準に、分布の疎らな部分を除外して数値化してみると、南北棟の建物は北から9°西に偏した位置を中心とし、東西棟の建物は

北から81°東に偏した位置を中心として分布する。それは、ちょうど座標北に対して、9°西周りに回転した位置関係となるさらに今宿平野で同様な建物の調査例として、飯氏6次地点で検出した掘建柱建物<sup>⑩</sup>について操作してみた。本地点と同様、東西または南北方向に建物の軸をとる様態を見てとることができる。ただ、その中心となる方向は、本地点とはやや異なる。このような一定の傾向が本地点を含めた今宿五郎江遺跡に分布する掘建柱建物に敷衍できるものか、既往調査成果を再検討し、継続する調査成果と総合して検討する必要がある。



掘建柱建物の方位【今宿五郎江9次地点】



掘建柱建物の方位（飯氏6次地点）

図114 掘建柱建物の方向

##### 【注】

- (1) 1次、2次地点とも開田により削平されおり、現況は校地造成時1m程度盛土された結果である。  
小畠弘己/編 1986『今宿五郎江遺跡I』  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集 (Fig.18)  
星野恵美/編 2003『今宿五郎江遺跡IV』  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第737集 (第7回)
- (2) 二宮忠司/編 1981『福岡市 今宿五郎江遺跡II』  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集
- (3) 杉山富雄 1998『飯氏遺跡第6次調査』  
『國道20号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』  
福岡埋蔵文化財調査報告書 第583集

第三回 田舎の娘と城下の娘

地名	標高	地質学的特徴	成因	地質学的特徴		地質学的特徴
				外生的	内生的	
丹波高原の主な山脈						
62 710 625 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
63 711 625 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
64 712 625 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
65 713 701 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
73 717 605 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
75 719 595 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
77 720 615 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
78 721 615 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
80 722 605 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
81 723 595 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
85 621 1000 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
86 622 1000 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
丹波高原の主な山脈						
62 710 625 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
63 711 625 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
64 712 625 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
65 713 701 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
73 717 605 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
75 719 595 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
77 720 615 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
78 721 615 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
80 722 605 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
81 723 595 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
丹波高原の主な山脈						
62 710 625 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
63 711 625 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
64 712 625 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
65 713 701 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
73 717 605 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
75 719 595 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
77 720 615 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
78 721 615 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
80 722 605 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床
81 723 595 阿賀野川上流 岩	河床	河床	河床	河床	河床	河床



日付	調査地名	位置	標高	平均(±SD) 鮮度		平均(±SD) 鮮度		平均(±SD) 鮮度	
				内面	外側	内面	外側	内面	外側
<b>平均(±SD) 鮮度</b>									
10/19	新生二塚	東	100	1.0	0.7	1.0	0.7	1.0	0.7
10/19	新生二塚	西	100	1.0	0.7	1.0	0.7	1.0	0.7
11/10	89	新生二塚?	東?	1.0	0.7	1.0	0.7	1.0	0.7
11/12	403	新生二塚	東	1.0	0.7	1.0	0.7	1.0	0.7
11/12	403	新生二塚	西	1.0	0.7	1.0	0.7	1.0	0.7
11/12	109	新生二塚	南	1.0	0.7	1.0	0.7	1.0	0.7
11/12	109	新生二塚	北	1.0	0.7	1.0	0.7	1.0	0.7
12/25	日田	東	100	1.0	0.7	1.0	0.7	1.0	0.7
12/27	日田	西	100	1.0	0.7	1.0	0.7	1.0	0.7
12/28	ガラス小屋	西	100	1.0	0.7	1.0	0.7	1.0	0.7

\* 色の濃度について、下記の尺度を参考にして。  
-1:未だ現れず/発達20%未満の半緑色の半緑色/半緑

-0:半緑色/発達20%以上の半緑色の半緑色/半緑

+1:半緑色/発達20%以上の緑色の半緑色/半緑

+2:半緑色/発達20%以上の緑色の緑色/緑

## IV 谷遺跡第1次調査報告

### 1. 調査の経過

谷遺跡第1次調査は、伊都区画整理事業による大型店舗新設に伴い実施された発掘調査である。2003（平成15）年1月6日より重機による表土掘削を開始した。

表土はぎが進展するに従って調査区西側に台地状の微高地、東側に河川堆積がみとめられ、微高地の落ち際を検出したものと思われた。微高地と河川の境界に弥生時代後期の遺物を主体とする遺物包含層と溝が、河川堆積の中に埋もれ木および杭列が検出された。

調査作業自体は擾乱・排水暗渠の除去後遺物包含層の掘り下げを最初に行い、コンテナケース89箱の遺物が出土した。この作業の最中に下層から溝が1条検出され、北端付近から貨泉1・銅鏡1の出土をみた。3月9日に気球による空中写真撮影を実施し、調査区の全景を撮影した。その後微高地上の土壤を掘り下げつつ記録の作成を行い、3月14日から調査区の埋め戻しを行い発掘調査を終了した。

### 2. 調査の概要

#### (1) 土層

谷遺跡第1次調査の土層は、西側の微高地部分については耕作土およびその床土の直下にて造構検出面である紫灰色～黒褐色のシルト質粘土となり、造構検出面上の堆積土は薄いといえる。造構検出面としたこれらのシルト質粘土は複数の層をなして堆積しており、境界は明確に識別できるものの大きく波打っている。

これらの堆積層は少量ながら弥生土器片を包含するため調査当時は人為的な整地層と考えていたが、2005（平成17）年度に実施した今宿五郎江第11次調査において流路と接する微高地部分にこれと酷似した堆積状況が見られ、自然堆積と考えられることから谷遺跡第1次調査でみられたこのような堆積は暫定的に水性の自然堆積としておく。

微高地と河川堆積の境界付近に溝が1条検出された。この溝SD164は断面観察の結果、微高地上のシルト質粘土を切って流れている。

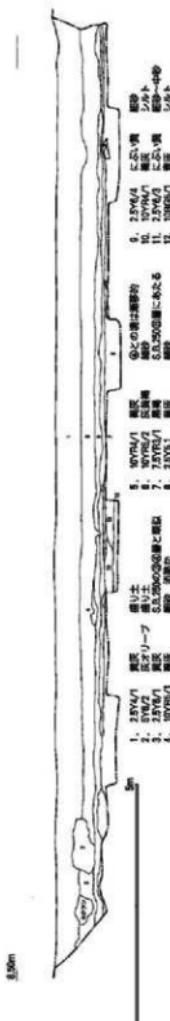


図116 谷遺跡第1次調査区南壁土層断面実測図 (1/100)

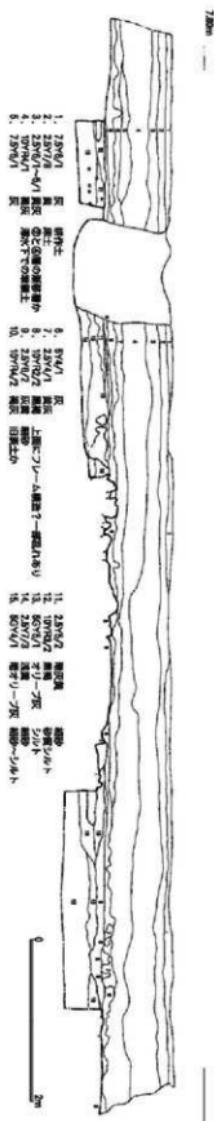


図116 セクションベルト250土層断面実測図 (1/60)

東側の河川堆積部では、埋もれ木が検出された。谷遺跡1次調査では埋もれ木が検出されたレベルで掘削を止め、褐灰～青灰色細砂層上にて遺構の検出を行った。調査地周辺は元来谷地形で、土層観察では流水→滯水を繰り返していたものと思われる。乾燥した時期があったものと思われ、埋もれ木はこのとき成長したものであろう。埋もれ木の直上の土層が大きく乱されていることから、洪水（鉄砲水的な激しいもの）が起こって木を押し流し、根に近い部分が埋もれ木となったと推測される。埋もれ木の上には80cm近い堆積土がみられる。これらは黄灰～褐色を呈する砂質土で、かつ層の境界は漸移的である。滯水した状況で徐々に堆積したものと推測される。最上層が水田耕作土で、谷が完全に埋没した後、湿田として利用されたものであろう。

## (2) 出土遺構

溝2条・土壙11基・ピット1基、遺物包含層1が検出された。

溝は微高地部分に1条、微高地と旧河川162の境界部分に1条検出された。微高地上の溝SD216は、包含層158の下から検出された。北端は広く浅くなりグリッド35-0011でとぎれる。土層には砂堆が観察され、流水していたと推測される。微高地と旧河川162の境界部分の検出された溝SD164は、その埋土の大半が砂であり、流水の結果埋没したものと推測される。水路として掘削されたものか。特記すべき遺物として銅鏡が1点、底部近くから貨泉がそれぞれ1点ずつ出土している。

土壙は微高地上に集中して検出された。微高地の北部、谷に落ち込む付近に帶状に集中する傾向が見られる。大半が不整な円形を呈し、壁面がオーバーハンプするものもある。土壙状のくぼみは計41基検出したが、極端に浅いもの、壁面が不明瞭なものは遺構と認定せず、うち11基を暫定的に土壙として報告する。

ピットは微高地上で検出された。建物を構成せず、柱痕跡も認められなかったため、暫定的にピットとして報告する。

遺物包含層は弥生時代後期の遺物を主体とし、5世紀末～6世紀初頭頃までの遺物を含む。岸辺に洗い出された形の出土状況で、2次的な堆積と思われる。

### 3. 調査出土の遺構と遺物

#### (1) 溝

溝164 (図118)

調査区中央部、微高地と旧河川162の境界部分にて検出した。微高地縁辺部の曲線に沿って緩く蛇行し、南西—北東方向に流れる溝である。北は近世以降の攪乱に着られ、流れに直交して杭が打たれる部分がある。南に約15mで溝の立ち上がりを検出できなくなった。北部は比較的東岸を明瞭に認識できるが、南部では不明瞭となり、溝として検出できなくなる。断面形は逆台形を呈し、埋土は砂砾である。

**出土遺物 (図120・121・122)** 遺物は弥生土器が主体で、後期後半から終末期の土器である。

古墳時代前期の遺物も少數含まれるが、須恵器の出土はなかった。銅鏡が1点底面から浮いて、貨泉が1点底面直上から出土した。

5148は、弥生土器である。甕の胴部で、内面に黒色を呈する薄い被膜が観察される小片である。漆か。内面は荒いハケ、外面は横方向のハケ調整が施される。5151は、土師器である。器壁は薄く布留系壺の胴部か。内面は上下方向のヘラ削り、外面には炭化物が多くかさぶた状に付着し、調整はタテハケである。5095~5097は弥生土器である。5095は支脚で全体の約80%が残存する個体である。底径12.8cm(復元)、器高14.5cmを測る。上部に指押されで平坦面と棒状の突起部を成形する。5096・5097は器台である。5096は全体の約80%が残存する個体である。口径10.5cm(復元)、器高16.4cm、底径12.3cmを測る。全体に磨滅が著しいが外面は縦方向のハケ調整がみえる。5097は2/3個体残存し、底部を失う。口径12.0cm(復元)、残存高17.4cmを測る。外面には縦方向のハケ調整がみられる。5149・5130は土師器である。5149は布留系壺の口縁部である。小片で不正確であるが、口径10.8cmに復元できる。磨滅し調整は不明瞭。回転ナテ調整か。5130は小片である。マリカ。内面に密なヘラミガキを施し、小片のため不正確だが口径11.4cmに復元できる。外面は疊なハケ調整。胎土は非常に精良で砂粒がほとんど含まれない。5050は弥生土器である。甕の底部で、小片

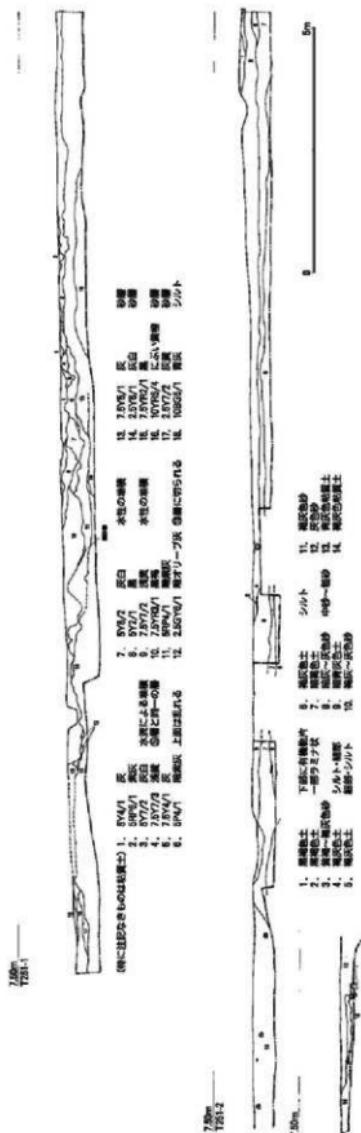


図117 トレンチ251土層断面実測図 (1/40)

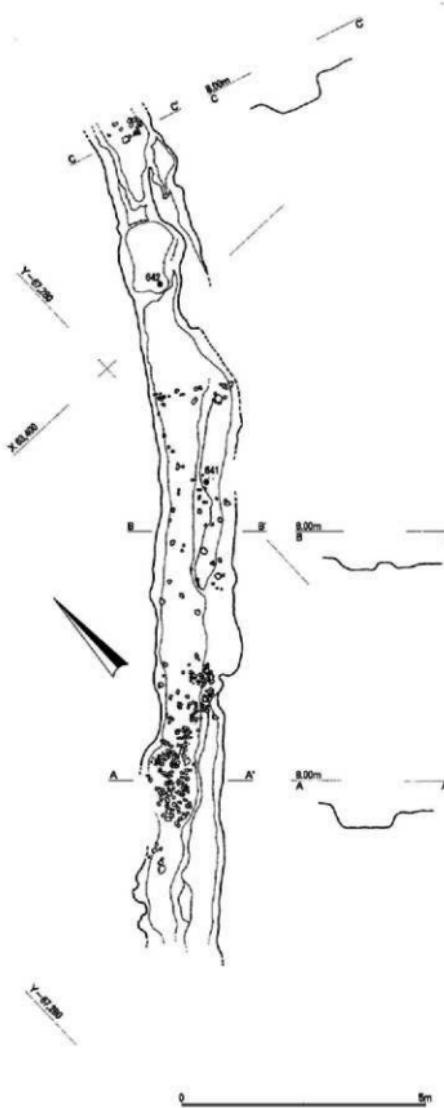


図118 SD164実測図 (1/100)

である。底面に計8カ所、中央の大きな孔を取り囲んで7カ所の小さな孔が確認できる。いずれも焼成前の穿孔であり、中央の孔は外面からヘラ状の工具で穿孔したと推測されるが、周囲の小穴は内面から棒状の工具で穿孔されている。器壁内面は指壓さえ、外面の調整は器壁剥落のため不明である。

(図121) 641・642は、青銅器である。いずれも溝の底面近くから出土した。

641は銅鏡である。茎部を欠損するが、身部はほぼ完形である。緩く反りあがるが、土圧によるものか人為的な要因によるものかは不明。全体に銹化し緑青に覆われるが、外形は明瞭に認識される。身部は柳葉形を呈し、断面形は菱形である。タガネ状の工具で身部と茎部の境を成型している。642は貨泉である。完形だが水分豊かな土中にあったため銅が溶出し、器壁はきわめて薄い。一部穴が開いた部分がみられる。

いずれの個体も重量は1.2gを測る。

(図122) 5005は石錘である。硬質な滑石製で先端部を欠損する。残存長5.9cm、最大径1.3cmを測る。

#### 溝216(図119)

調査区西部、微高地にて検出した。断面観察の結果SD216は包含層158を切るものではないと思われる。緩く蛇行し、グリッド35-0011で浅く広くなり流れを追えなくなる。底面には生痕と思われる小穴が多くみられる。土層断面に薄くではあるが砂層が観察され、流水していくことがわかる。水路とも考えられるがここでは結論を保留したい。

**出土遺物** (図122) 5127は、石錘である。軟質の滑石製で、先端部を欠損する。残存長9.5cm、最大幅5.2cmを測る。

SD216からはこのほか弥生土器の小片が出土している。

#### (2) 土壙

##### 土壙175(図123)

調査区西部にて検出した不整な平面形を呈す

る土壤である。2段のテラスを有し、2段目のテラスは一部オーバーハングする。上端部から底面まで深さ0.5mを測る。埋土の堆積はレンズ状の自然堆積で、掘られた後滲水と乾燥を繰り返しつつ埋没したとみられる。

遺物は弥生土器小片が出土している。

#### 土壤179（図123）

調査区西部にて検出した。平面形は強いていえば不整な方形で、東壁にテラスを有する。上端面から底面まで0.2mを測り、西壁面はオーバーハングする。埋土の堆積は人為的な埋土の可能性がある①層をのぞき自然堆積で、①層下面に薄い砂層を挟む。1時期微高地上を水が走ったことがあると推測される。

**出土遺物（図126）** 5077は、土師器である。小形の壺の小片で、口径13.2cm、胴部最大径16.1cm、残存高10.2cmを測る。この個体は2次的に被熱して暗赤色を呈し、器壁が大きく剥落・磨滅している。胴部内面に上下方向のヘラ削りが観察されるが、他の調整は不明瞭である。5078は瓦である。平瓦の小片で、凹面は磨滅するが布目痕が、凸面は菱形の格子目叩きが観察される。

このほか須恵器蓋の小片が出土している。

#### 土壤181（図123）

調査区西部にて検出した。西部を試掘トレンチに切られるが、不整な梢円形を呈する土壤である。長径1.6m、短径1.1mを測る。底面はフラットであるが東壁部分はオーバーハングする。上端面から底面までの深さは0.3mを測る。埋土の堆積は水性の自然堆積で、滲水と乾燥を繰り返しつつ東から埋没している。④層上面に薄い細砂層がみられ、一時流水にさらされたことがわかる。

遺物は、土師器壺の小片が出土している。

#### 土壤182（図123）

調査区西端付近にて検出した。東側の一部を試掘トレンチに切られるが、ほぼ全体形を把握できる。長軸を南東—北西方向に持つ不整梢円形を呈する土壤である。底部はほぼフラットであるが、南東部にテラスを有し、上端面からの深さは0.4mを測る。

埋土の堆積状況は自然堆積で、東から土砂が流れ込む形で埋没している。底面直上に薄い黒色土層がみら

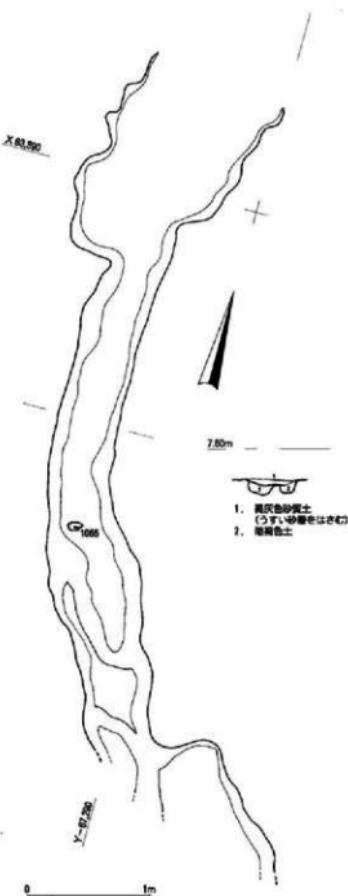


図119 SD216実測図(1/40)

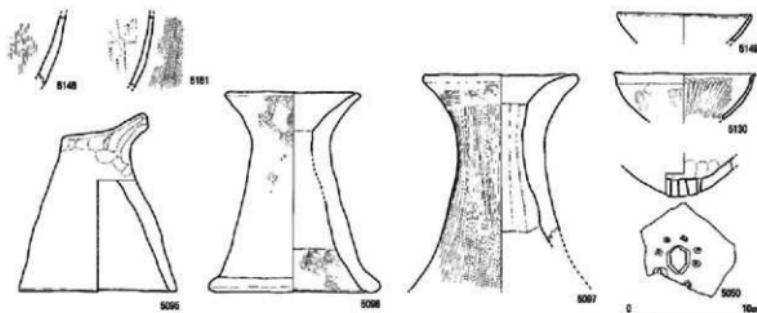


図120 SD164・216出土遺物実測図(1/4)

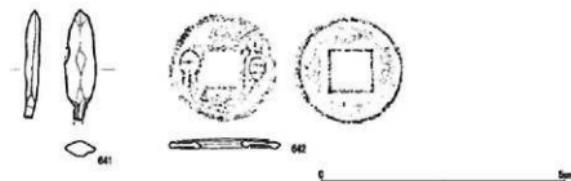


図121 SD164出土銅鏡・貨泉実測図(1/1)

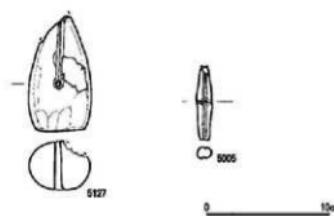


図122 SD164・216出土石鏡実測図(1/4)

れ、掘削された後一時滞水したと推測される。③層は上部が粘土、下部がシルトのラミナ状の堆積であり、滞水→流水→乾燥を繰り返すような環境で埋没したと推測される。

**出土遺物(図126)** 5089は、甕である。赤色がかった橙色を呈する個体で、土師器というより赤焼き土器というべきか。

この個体は口縁部の小片である。口径11.2cmに復元され、残存高8.6cmを測る。胴部内面には肩部付近に当て具痕がある。口縁部周辺は回転ナデ調整、胴部外側には叩き目が観察される。

#### 土壤187(図124)

調査区西端付近で検出した。平面形は不整で特定の形に比するのは難しいが、強いていえば不整な

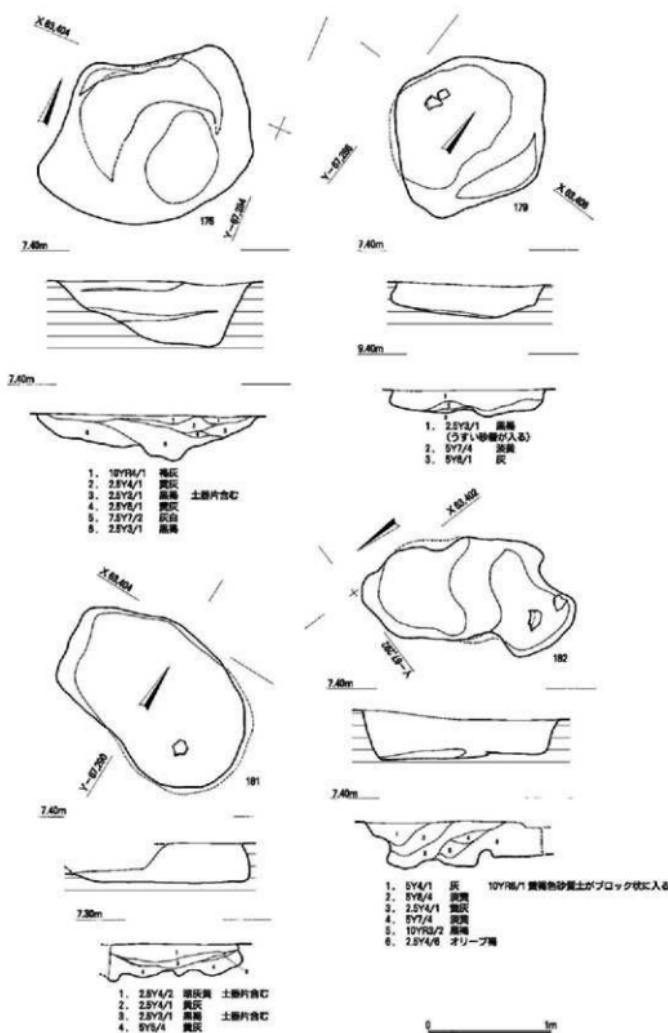


図123 谷造跡第1次調査後出土調査面図① (1/40)

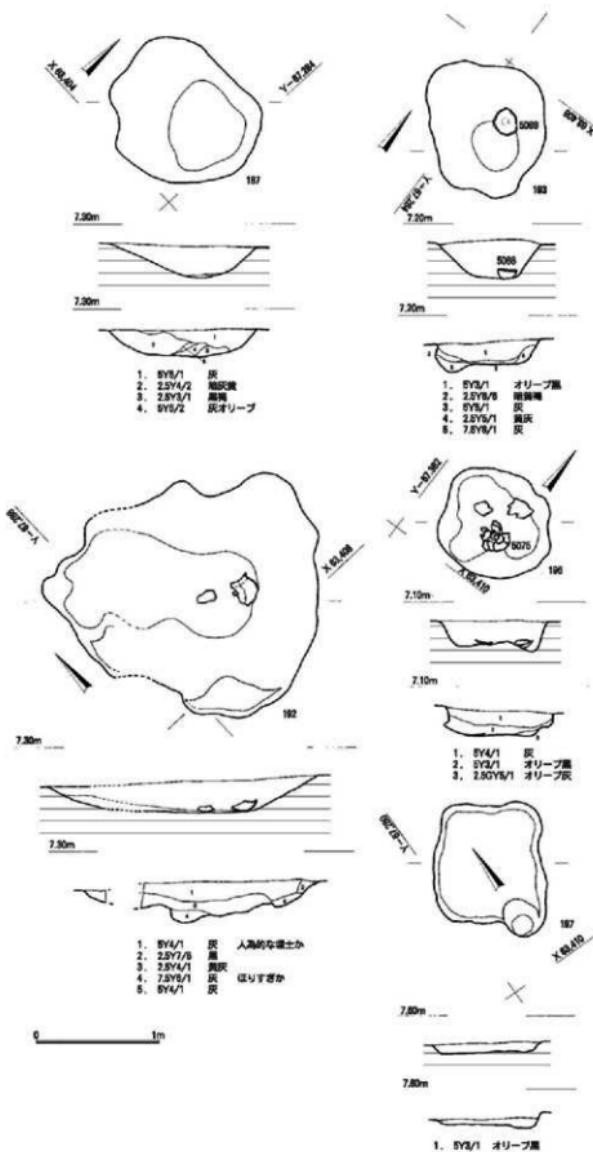


図124 谷津跡第1次調査後出土墳形測図② (1/40)

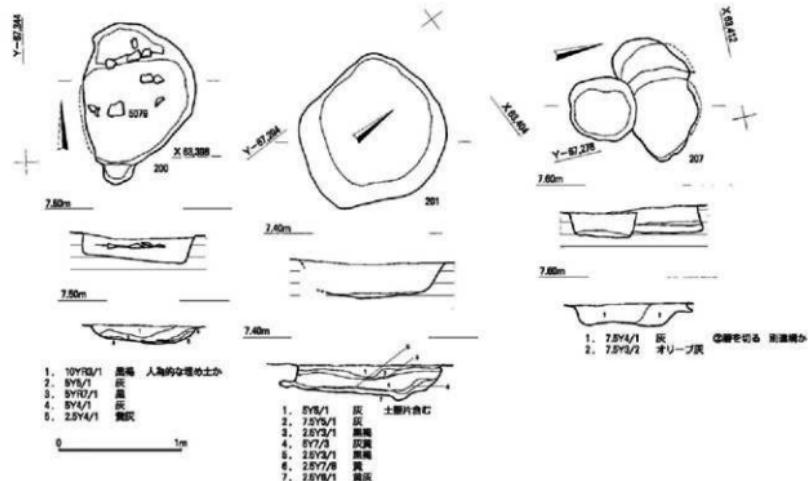


図126 谷津跡第1次調査後出土標実測図(1/40)

円形を呈する土壤である。底面は平坦でテラスは検出できなかった。東壁面にわずかなオーバーハングが認められる。埋土の堆積状況は自然堆積で、水流による堆積土とそうでないもの間に黒色土層がみられ、流水→滯水→乾燥という流れで環境が変化したと推測される。なお①層は他の堆積土層を切っており、掘り直しの可能性が考えられる。遺物は、土師器または赤焼き土器の壺の小片、器種不明の土師器の小片が出土した。

#### 土壤192(図124)

調査区北部にて検出した。北西部を排水暗渠に切られ、長軸を南東→北西方向にもつ土壤である。平面形は不整な梢円形で、西壁に2カ所テラスを有する。底面には凹凸がみられ、上端面からの深さは0.3mを測る。底面直上から土師器または赤焼き土器壺5087が出土した(図126)。

埋土の堆積状況は下部が自然堆積で、上部の①層は人為的な埋土の可能性がある。③層は滯水した状況で堆積した可能性があり、一時滯水した後人為的に埋められたと推測される。

**出土遺物(図126)** 5087は、壺である。胎土は土師質だが外面調整は須恵器に類似し、いわゆる赤焼き土器である可能性もある。1/4個体残存する破片で、口径16.4cm、胸部最大径20.0cmに復元でき、器高20.6cmを測る。外面は2次的な被熱により特に下部は赤化し、器壁は大きく剥落している。

調整は、胸部内面に当て具痕、頭部から口縁部にかけては回転ナデ、胸部外面は叩きの後、横方向のハケにて叩き目を消している。

#### 土壤193(図124)

調査区北部にて検出した。SK192の東1.4mに位置する土壤である。平面形は不整な円形を呈し、長径1.1m、短径0.9mを測る。底面は概ねフラットで、テラスは検出されなかった。遺構の上端面から底面までの深さは、0.3mを測る。

埋土の堆積状況は水性の自然堆積で、特に①層はレンズ状を呈する。黒色土層②層が認められ、土

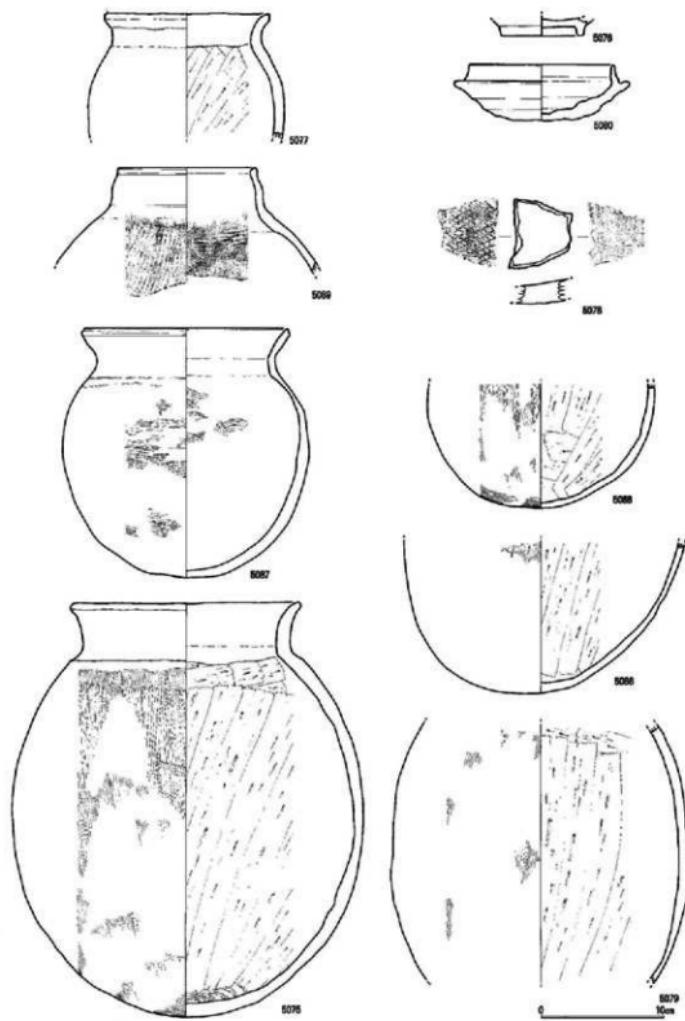


图126 谷堆冢第1次调查出土陶器实物图(1/4)

層観察からは度重なる流水・滝水にさらされたと推測される。

**出土遺物** (図126) 5088は、土師器である。壺の破片で底部が完存する個体である。残存高は10.1cmで、胴部最大径は18.6cmに復元される。底面から8.6cm付近で計測された数値で、5088自体あまり大形の壺ではないと推測される。調整は、内面は横方向のヘラ削りのうち上下方向のヘラ削りが行われている。外面は磨滅により器壁が剥落するが、縦方向のハケメがわずかに残る。

#### 土壤196 (図124)

調査区北部にて検出した。不整な円形を呈する土壤で、径0.9mを測る。底面は概ねフラットであるが平面形は不整で、壁面は一部オーバーハンプする。造構の上端面から底面までの深さは、深い地点で0.25mを測り、北側が深く南側が浅い。底面直上から土師器壺5075が出土した。

埋土の堆積状況は水性の自然堆積で、オーバーハンプ部分から湧水がみられた。③層がレンズ状の堆積、他の土層も水性の堆積特有の堆積状況がみられ、流水と滝水にさらされたと推測される。

**出土遺物** (図126) 5075は、土師器壺である。1/2個体残存し、口径18.3cm、胴部最大径28.6cmに復元され、器高33.8cmを測る。

調整は、胴部内面が上下方向の、上部が横方向のヘラ削りで、底面に当て具痕がみられる。叩きで器形を整えた後、ヘラ削りで器壁を調整したものと推測される。頸部から口縁部は回転ナデ、胴部外面は縦方向のハケメが観察される。内面は器壁が剥落、外面は磨滅するため調整は不明瞭である。

5076は白磁碗である。底部の小片で、他の土壤の遺物に比べ時期が離れており、混入の可能性がある。底径6.6cmに復元でき、残存高1.5cmを測る。

#### 土壤197 (図124)

調査区北部、SK193の東1.2mに位置する。

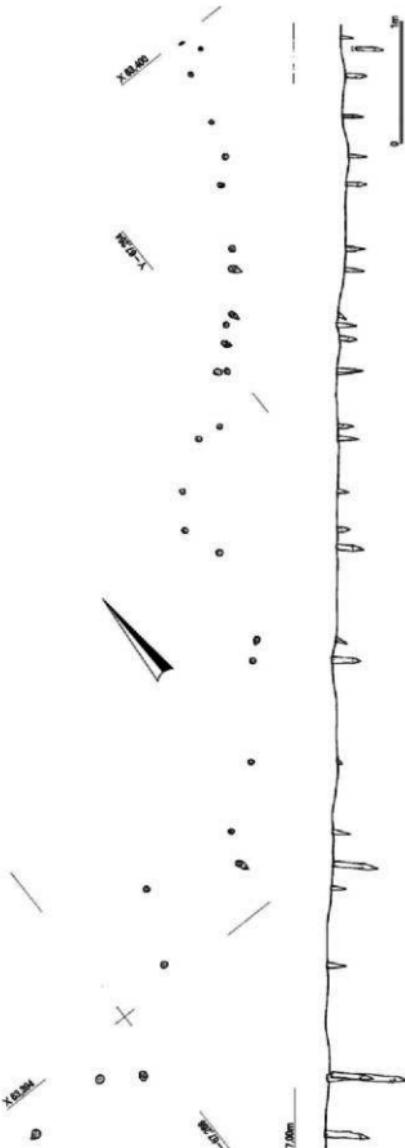


図127 杭例214実測図 (1/40)

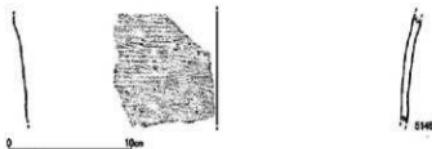


図128 阿川162出土縄文土器基底測図 (1/4)

長軸を南西—北東方向に持つ不整な楕円形を呈する土壤である。長径1.2m、短径0.7mを測る。底面は概ねフラットで、上端面から底面までの深さは4cm程度で、他の土壤に比べ浅い。

埋土の堆積状況は自然堆積で、遺構自体が浅いためオリーブ黒色の層が1層観察されたのみである。水性堆積特有の堆積状況が認められないため、乾燥した環境下で形成された堆積土と推測される。

**出土遺物** (図126) 5086は、土師器である。壺の底部で、残存高12.5cmを測る。全体に器壁の磨滅が著しいが、内面には上下方向のヘラ削り、外面には縦方向のハケメがわずかに観察される。

#### 土壤200 (図125)

調査区西端部にて検出した。長軸を南北方向に持つ不整な楕円形の土壤である。長径1.3cm、短径0.9mを測り、上端面から底面までの深さは0.2mを測る。底面は概ねフラットであるが壁面は西壁でオーバーハングする。

埋土の堆積状況は①層をのぞき自然堆積で、ラミナ状を呈する層や薄い黒色土の堆積がみられ、流水・滌水を繰り返していた環境であったことが推測される。①層は人為的な埋土である可能性があり、浅いくぼみ状となったSK200を埋め、平坦にした可能性がある。

**出土遺物** (図126) 5079は、土師器である。壺の胴部で、小片である。残存高21.1cmを測り、胴部最大径26.2cmに復元できた。調整は、内面が上下方向のヘラ削り、外面は縦方向のハケメが観察される。

このほか5079とは接合しない土師器壺の小片が出土した。

#### 土壤201 (図125)

調査区西端部にて検出した。SK187の南東に位置する土壤である。平面形は不整な円形を呈し、径1.2mを測る。底面は一部凹凸がみられるが、顕著なものではない。西壁の底面付近に一部オーバーハングした部分がみられ、SK201は水流によって掘削されたくぼみの可能性がある。上端面から底面までの深さは、0.25~0.3mを測る。

埋土の堆積状況は自然堆積で、各層とも概ね水平に堆積する。うすい黒色土層が複数みられ、SK201が掘削されてから周囲は滌水→乾燥を繰り返す環境であったと推測される。

遺物は、土師器壺の小片が出土している。

#### 土壤207 (図125)

調査区北部にて検出した。SK197の東に隣接する土壤である。2基の土壤が切り合うような形であるが、ここでは暫定的に1基の土壤として記述する。

平面形は不整な円形の土壤が、同じく不整な楕円形の土壤を切る形である。底面は緩やかなうねりがみられるが概ねフラットで、西側に1段テラスを有する。上端面から底面までの深さは、0.1m前後を測り総じて浅い。

埋土の堆積状況は自然堆積で、特に②層にはシルト質土がラミナ状に堆積する部分がみられるなど水性の堆積状況を示す。SK207は、水に洗われるような環境下で埋没したと推測される。

### (3) 小穴（ピット）

谷遺跡1次調査では、ピットと認識される遺構は1基のみにとどまった。当初柱穴の可能性を考え周囲を精査したが、他にピットは検出されず、SP208自体にも柱痕跡等柱穴であることを示す所見が認められなかったため、ここではピットとして報告する。

#### 小穴208

調査区中央部、SD164に接続した微高地上にて検出した。平面径は不整な梢円形を呈し、長径0.4m、短径0.3mを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は概ねフラットである。上端面から底面までの深さは、約0.2mを測る。

埋土の堆積状況は自然堆積で、下部に砂の堆積がみられる事から水に洗われるような環境下で埋没したものと推測される。

**出土遺物**（図126）5080は、坏身である。土師質で、器壁は橙色を呈する。いわゆる「赤焼き土器」か。

1/3個体残存する破片で、口径11.6cmに復元でき、器高4.5cmを測る。しかし外面は器壁の磨滅が著しく、調整痕は不明瞭である。

胎土は精良だが径3~5mmの砂粒を含み、須恵器より粗である。焼成は良好である。

### (4) 旧河川および杭列

#### 旧河川162（図117）

調査区東部にて検出した河川堆積部分である。全調査面積の約6割を162が占める。土壤群が検出された微高地部分とは、溝SD164をもって隔てられている。

162を横断するように東西方向に入れたトレンチT251の土層断面を図117に示す。ほぼ水平に砂層と粘質土層が交互に堆積している。トレンチT251の断面を見る限り旧河川162が単一の大きな流れであったのではないことは確かであろう。図117で見る限り、東から幅約10mの流れが1条、幅1.6mの流れが1条、さらに第3の流れが1条観察できる。これらの流れが検出された面も河川堆積の砂層であり、さらに多くの流れがあることが窺える。

確実な底面は押さえられなかったが、図117の第13層とした青灰色粘質土層があるいはそれに当たるか。

河川堆積部分の西部で杭列を検出しているが、これについて記述する。

**出土遺物**（図128）5145は、縄文土器である。粗製の深鉢で、胴部の小片である。径を復元しているが、小片のため正確な径を算出できなかつた。器壁の遺存状況は良好で、内面はナデ調整、外面は条痕が観察される。

#### 杭列214（図127）

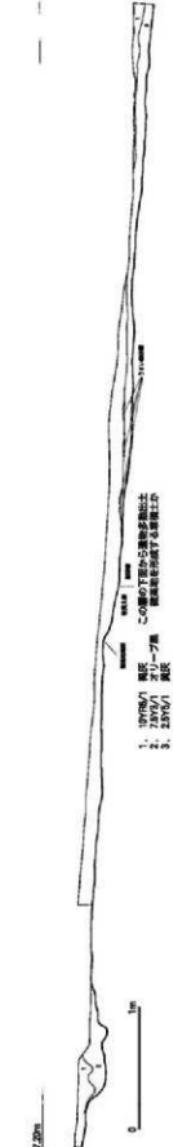


図129 包含箇158土層断面実測図 (1/40)

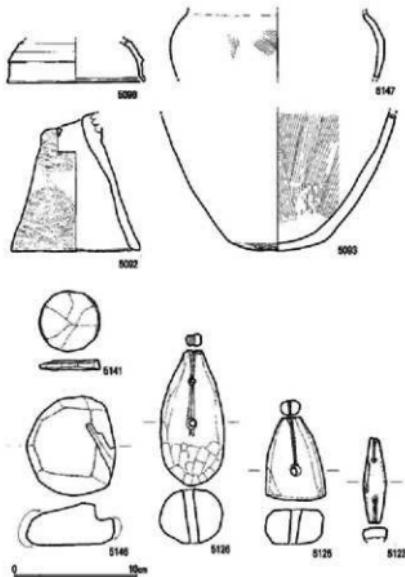


図130 包含層158出土遺物実測図(1/4)

調査区西部、SD164の東、グリッド34-7025にて検出した。

微高地の落ちに沿って南西-北東方向に杭が延長9mにわたって並ぶ。ただし1列に規則的に打たれるという状況ではなく、屈曲しながら不等間隔に打たれ、間隔は10cm~70cmを測る。打ち込まれる深さは、浅いもので5cm、深いもので60cmを測るが、平均20cm程度である。杭は径5cm前後の丸太材を用い、先端部を鉛筆状に尖鋭に加工して使用している。

◎  
□ 158  
0 5m

図131 包含層158出土玉器実測図(1/1)

流れに平行してかつ地形に沿って杭が打たれており、護岸もしくは土留めを目的にしてつくられたものと推測される。

##### (5) 遺物包含層

###### 包含層158(図129)

調査区西部、微高地の落ち際にて検出した。微高地を形成する堆積物とSD164・SD216の埋土を覆う(切る)形で堆積する。出土遺物から、堆積の時期は5世紀末から6世紀初頭頃が下限と推測される。

土層断面を図129に示す。①層が遺物包含層となるが表土はぎの際上層を削ったため厚さ10cm前後と厚くはない。遺物は層の中に含まれるというよりはむしろ層の下面に集中して出土する。①層の下には薄い細砂層がみられ、水流のあるところで遺物だけがまず洗い出され、そのうち滞水した環境下で①層が堆積したと推測される。

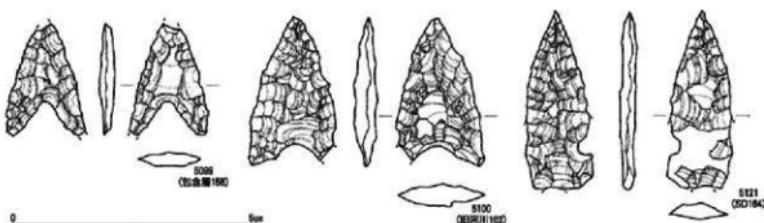


図132 谷遺跡第1次調査出土石器実測図(1/1)

**出土遺物 (図130・131)** 出土遺物はコンテナケース47箱にのぼる。後期後半から終末にかけての弥生土器が大半を占める。

5098は、須恵器である。蓋の小片で、残存高3.4cm、口径11.0cmに復元できるが、小片のため口径は正確ではない。天井部外面に反時計回りの回転ヘラ削りがみられる。5092・5093・5147は、弥生土器である。5092は、支脚である。いわゆる杏形器台。2/3個体残存し、残存高11.2cmを測り、底径10.4cmに復元される。上面の孔は成形時に造り出している。外面には叩き目が観察される。5147は、壺である。胴部の小片で、胴部最大径17.6cmに復元できる。特筆されることとして、内面に赤色顔料が付着する。内面はナデ調整、外表面は疎なハケメがみられる。5093は、壺である。底部の小片で底径7.6cm、残存高11.3cmを測る。外底面は円形にハケにて調整される。

以下、石製品について。5141は、紡錘車未成品か。硬質の滑石を円盤形に削りだしている。径4.9cm、厚さ0.8cmを測る。5146は、磨石である。花崗岩質の礫を用い、縁辺部全周に擦痕がみられる。長径8.0cm、短径7.3cm、厚さ3.4cmを測る。5123・5125・5126は、石鍤である。5123は片面を欠損する個体で、砂質が強い滑石質の石材を用い、紡錘形を呈し器長7.1cm、最大幅1.9cmを測る。5125は略台形を呈する個体で、砂質が強く硬質で緻密な石材を用いる。完形で器長6.8cm、幅4.8cm、厚さ2.8cmを測る。5126は灰色で硬質な滑石を用いる。涙滴形を呈し器長11.1cm、幅5.1cmを測る。いずれの石鍤にも紐ずれなどの使用痕はほとんどみられない。これらの石鍤は未完成か、未使用の個体を投棄したものと推測される。

(図131) 313は、小玉である。完形で出土した。ガラス製で径・厚さとも0.4cmを測る。色調は透明感ある強い緑味の青(4B4/6)を呈し、上下方向に気泡の流れが観察される。棒状の素材を引き延ばし、小さく切り取って成形したものか。

遺物は図示したものの他、中期後半の丹塗り無頸壺も出土した。古墳時代の遺物は、初頭頃の高环が出土している。石製品は砥石、黒曜石のチップ、磨石が出土した。また繩文土器の出土が記録されたが、遺物そのものは整理作業では確認できなかった。

#### (6) その他の遺物 (図133・134)

造構検出面・排水暗渠・耕作土直下・トレンチ出土の遺物から次の遺物を図示し、説明を加える。

(図133) 5142・5144は、須恵器である。いずれも蓋の小片で、5142は口径11.0cmに復元され、5144は天井部外面にヘラ記号を有する。5091は、土師器である。壺の小片で、口径15.4cm、胴部最大径18.2cmに復元される。外面は被熱したと推定され、器壁は赤化し表面は剥落している。5122は、土製品である。土製円盤か。素材は弥生土器の胴部の破片で、周縁を打ち欠いて円形に成形したものである。長径3.6cm、短径3.3cmを測る。5129は、石製穂摘具である。頁岩質の石材を用い、1/2個体残

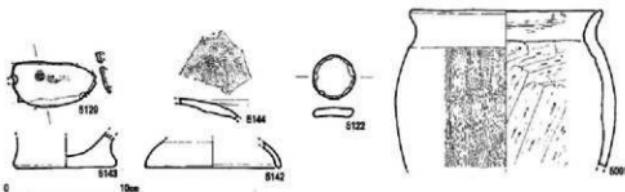


図133 その他の遺物実測図① (1/4)

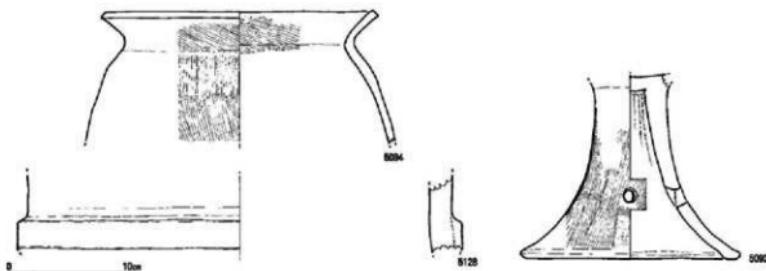


図134 その他の遺物実測図② (1/4)

存する。紐通しの孔には上部に紐ずれがみられ、刃部は使いべきが著しい。

(図134) 5094・5090は、弥生土器である。5094は甌の小片で、口径21.8cmに復元される。胴部内面はナデ、その他はハケ調整である。5090は、高環の脚部である。底径16.7cmに復元され、下半に4箇所、焼成前に内面から穿孔がなされる。5128は、埴輪または弥生土器の大形甌である。小片で、胴部径34.8cmに復元される。胎土は精良で砂粒が少ない。焼成はやや不良。

#### 4. 小結

谷遺跡第1次調査における検出遺構は、溝2条・土壙11基・ピット1基、遺物包含層1である。溝はSD164が人為的な掘削の可能性があり、弥生時代終末から古墳時代前期にかけ埋没している。土壙・ピットは古墳時代後期の土器の大破片が出土するが、土器の表面は磨滅し流れ込みの可能性があり、埋土の堆積状況からも人為的な掘削ではない可能性がある。中途で途切れ、南に追えなくなるが、もともと南に向かって高くなっていた地形が何らかの要因で削平された結果、立ち上がりを追えなくなつたものと推測される。

土壤が検出された微高地部は絶えず水に洗われる可能性がある環境であったことが土壤の埋土から推測される。周辺の試掘調査等の所見から、調査地検出の微高地は高祖山系から流下する河川にできた中洲状の土地であったとも推測される。たとえ微高地であっても人間が居住するには不適で、今回の調査は今宿五郎江遺跡を取り囲んで流れる河川とその中洲を調査したものといえよう。



武昌植物志稿表 (6)

...小川正樹・柳原英輔・飯田義典「新規業者から



図135 埋もれ木出土状態



図136 湾184鉢底出土状況



図137 湾184土器断面



圖138 土塊175



圖139 土塊179



圖140 土塊181

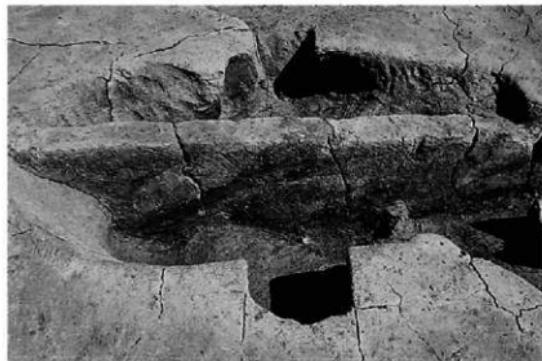


圖141 土壤182土層斷面



圖142 土壤182



圖143 土壤187



图144 土壤193土层断面



图145 土壤193



图146 土壤200



图147 土壤201



图148 土壤207土层断面



图149 土壤207



图150 小穴208



图151 穴列214



图152 包含层158

## 報告書抄録

ふりがな	いまじゅくごろうえ 5						
書名	今宿五郎江 5						
副書名							
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	872						
編集者名	杉山富雄・阿部泰之						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667						
発行年月日	20060331						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
今宿五郎江 8 次	福岡県 福岡市西区 今宿町	40130	33° 34' 33"	130° 16' 18"	20021222 ~ 20030108	297	
今宿五郎江 9 次					20021226 ~ 20040331	3,520	
谷 1 次		0627	33° 34' 23"	130° 16' 22"	20021226 ~ 20030328	1,560	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
今宿五郎江 8 次	集落	中世	未分類の遺構(池状)		土師器壺皿、擂鉢、石鍋		
今宿五郎江 9 次	集落	弥生 (中期~後期)	竪穴住居(1)、掘立柱建物 22、土壤(5)、溝(4)、上器 埋納(1)、柱穴・小穴		弥生土器、ガラス小玉		
	散布地	先土器			台形石器		
谷 1 次	集落	古墳 (後期)	溝(2)、土壤(1)、小穴(1)		弥生土器、土師器、須恵器、 打製石器、ガラス小玉、 石製穀殼具、杭、銅鏡、貨泉		
	散布地	古墳 (後期)	遺物包含層(1)		弥生土器、須恵器、石鍬、 磨石、紡錘車未成品		
要約							

## 今宿五郎江 5

福岡市埋蔵文化財調査報告書第872集

2006年3月31日

発行 福岡市教育委員会  
 福岡市中央区天神1丁目8番1号  
 印刷 協文社印刷株式会社  
 福岡市西区小戸4丁目24番5号